1994

大正十三年一月二十九日（第三種郵便物認可）
昭和四年十月一日發行（毎月一回一日發行）

京城雜筆

永樂町人 編輯

十月號

【第百二十八號】

朝鮮十三道
一目で見へる

朝鮮博覽會

朝鮮博覽會
於京城 自九月十二日 至十月卅一日
（五十日間開會）

內地朝鮮間、滿洲朝鮮間
往復乘車券發賣

汽車賃割引

（世界的名山金剛山は錦繡紅衣を凝らし古都慶州や平壤も一入の美を添へ來遊を待つ）

朝鮮總督府鐵道局

府内病院案内

（いろは順）

旭町一ノ六
今本醫院
電本二八五二

本町二ノ九三
一番ヶ瀬醫院
電本四〇〇五

南山町一丁目八
池田病院
電本一二三四

明治町二ノ七五
利根川齒科
電本二八六七

黄金町二ノ一九八
渡邊醫院
電本八九四

明治町二ノ一〇五
和田外科病院
電本一〇五八

南山町二ノ六
片山醫院
電本一九五一

若草町三九
金井眼科醫院
電本一五五六

西小門町二一
田中丸病院
電光八八五

明治町二ノ七七
中島病院
電本三七八

永樂町二ノ八五
植村外科病院
電本二七〇

北米倉町九四
京城婦人病院
電本四八二

新町四
安部醫院
電本一〇五三

永樂町二ノ八七
酒井婦人病院
電本一八

南大門通二ノ一
阪井耳鼻醫院
電本六四二

吉野町一丁目九一
木村醫院
電本七二五

永樂町二ノ七六
木戸齒科醫院
電本四二七

旭町二ノ八
瀬戸外科醫院
電本二四九八

内地への御土産
お手近の御贈答品
日常の御使用品には
鮮内産品使用御奬勵の
御思召を以て
三和高麗燒
漢陽高麗編
三和燒
製造元
富田商會へ
御下命願上げます
京城南大門通三丁目
電本三三〇九
同本町二丁目
電本五五四

新築落成記念

信託大宣傳

指定金錢信託

金額　壹百円以上

期限　壹ヶ年以上

前期利益配當

（預金利息ニ該當）年八分壹厘強

京城府長谷川町百十二番地

朝鮮土地經營株式會社

社長　荒井初太郎

（電話本局一二九番）

均質牛乳

牛乳界の大革命

日本最初の試み

均質牛乳の特徴は

脂肪を粉碎して居ります故に消化が宜しく風味の佳良と獸臭のない事は一度召上つた方には直覺せられます長らく腐敗しませぬから小兒や病人の方々にはこの均質牛乳に限ります品質本位でありますから値段の競爭をせないのは弊場の主義生命であります。

朝鮮總督府病院特定御用
陸軍衛戍病院御用
京城府各病院御用

平山政十

電話光化門一三三番
京城府蓮建洞二八

誰でも直ぐ使へる

大谷和文タイプライター

が參りました

○和英兩用　○鞄に入れて機行自由　○字數二千四百外換自由

朝鮮中央總代理店

京城明治町一

櫻井秀專商店

電本局三〇〇二番

増築落成記念景品付
冬服大特價豫約
新舘落成
『明るい店』として御客様の氣分を尊重……
『買ひよき店』として一層皆様の丁子屋たらしむべく努力致して居ります
丁子屋
南大門通

金剛山産松實松花應用菓

金剛飴

金剛柏子（松の實炒り）
金剛柏子菓（朝鮮式松の實菓子）

金剛おこし
金剛しるこ

金剛煎餅　金剛山
金剛羊羹　金剛饅頭

京二城本町丁目
亀屋商店
電話二十七番
本局四七五番

祝朝鮮博覽會開會

模型パノラマ
セツト
宣傳塔
アーチ
特設館

早川裝飾工務所

望天川早

京城府黃金遊園內

電話本局二四七六番

祝　發　展

東洋拓殖株式會社
朝鮮土地改良株式會社
朝鮮火災海上保險株式會社
朝鮮鐵道株式會社
朝鮮郵船株式會社
京城株式現物取引市場
京城電氣株式會社
不二興業株式會社
金剛山電氣鐵道株式會社
三井物產株式會社
朝鮮煙草元賣捌會社

祝朝鮮博會開會

朝博御見物のため御入城の方々はその好機を御利用中部朝鮮の樂天地たる溫陽へ御一遊をお勸めします。泉質良く旅館よく運動娯樂の設備悉く整ひ、栗拾ひ、魚釣り殊に可。眞に朝鮮の新名所たるに耻ぢません。

溫陽溫泉
神井館

京城より僅に三時間にして溫陽に到着、日歸りの豫定にてもユックリ遊ぶ事が出來ます。また初めより溫陽に投宿日々博覽會見物に御出城は最も妙であります。神井館の增築成り今は唯だ御來遊を待つてゐます。

朝鮮京南鐵道株式會社

十月號目次

交通整理……總督府
出雲の緣結の神……朝鮮酸素會社
テスの家出……一番瀨醫院
ムーンシヤイナー……城大法文學部
人を語る……朝鮮公論社
秋の思出より……朝鮮銀行
ある日曜……殖產銀行
靴歸る……中樞院
畫房寸話……洋畫家
鵠と金魚……總督府
眞の緊縮策は……南大門小學校
途上偶感……京城醫專
野球往來……殖產銀行
短詩……大阪毎日支局
新聞人秘話……大和町官舍
本町雜筆……遞信局
近事漫評……
飛行雜感……京城日報社
文章……京城醫專
女給なるが故……京城日報社
多見男さんの事……元町小學校
落語……遞信局
をりをりに（短歌）……辯護士
震災ばなし……朝鮮史編修會
讀史漫錄……李王職醫寮
キヤラメルと朝日……黃海道師範
ツエ伯號を見る……京城婦人病院
新秋十首（漢詩）……京城日報社
秋冷雜觀……朝鮮鐵道
ツエ伯號と文化……三菱戴寧鐵山
朝博寸評……東拓社宅
明盲亂談……朝鮮舞臺協會
元山壬寅……
リズムからジヤズ……
恐るべき病菌……
隨筆……
金剛山（漢詩）……本町二丁目
小唄坂……明治町
チヤンゴクバブ……
我妹の死（短歌）……木浦府
海上の建築について……遞信局
大邱から……大邱日報社
高架索の囚人……朝鮮史編修會
雜詠（俳句）……朝鮮鐵道
船來節約漫談……大和町
秋の山（短歌）……櫻井町
狐の話……城大醫學部
稻の花（短歌）……
品川雜記……中央朝鮮協會
穗積眞六郎氏（一）
香川守行氏（三）
一番瀨慶次郎氏（四）
泉哲氏（五）
石森久彌氏（六）
長谷井市松氏（七）
矢鍋永三郎氏（八）
高武公美氏（九）
佐藤九二男氏（一一）
福士末之助氏（一二）
山本吉久氏（一三）
眞能義彥氏（一四）
丸中德三氏（一五）
甕の會同人氏（一六）
楠五郎氏（一七）
土師盛貞氏（一九）
笠神志都延氏（二〇）
飯島滋次郎氏（二一）
寺田壽夫氏（二二）
片岡喜三郎氏（二三）
津田常男氏（二四）
松村桃代氏（二五）
浦田誠道氏（二六）
中村榮孝氏（二七）
池部義雄氏（二九）
佐々木清之丞氏（三〇）
工藤武城氏（三七）
多田毅三氏（三八）
毛利元良氏（三九）
高橋昇氏（四一）
川上喜久子氏（四二）
光永紫潮氏（四三）
今村靜氏（四四）
木塚常三氏（四五）
森川定次郎氏（四六）
岡村介石氏（四七）
瀨口良光氏（四八）
福田有造氏（四九）
松崎嘉雄氏（五〇）
河谷靜夫氏（五一）
瀨野馬熊氏（五二）
新田留次郎氏（五三）
廣江澤次郎氏（五四）
德野鶴千氏（五五）
梶村正義氏（五六）
角田不案氏（五七）
中島司氏（五九）（六〇）

交通整理

穂積眞六郎
（總督府）

昨年のアメリカの統計に世界の自動車數約三千萬臺の内約二千四百萬臺以上は合衆國一國で持つて居る、外國にある五百萬臺餘も半分以上は米國からの輸出品でアメリカ製の自動車は總數の九割に達する、……如何がなもので御座る……とは書いてありませんでしたが、少つと得意層に列國との比較を羅列してありました。

實際ニューヨークの市丈でも五十萬からの自動車が毎日右往左往に馳せ廻つて居るのですから、其整理に當る巡査さんの御苦勞も大ていの事ではない樣に見受けられます。

話はニューヨークの場末に起つたことです、或る四つ辻に立つて居た交通巡査が少時の間其の持場をはずした層です、何の用があつたのか知りません。多分あの府廳前によく立つて居る巡査さんの樣に規定外の速度を出して通過した自動車でも叱りに行つたのでしよう。

場末と云つても大都市のことです。四方の往來から馳せ集る數十の自動車の進行はこの巡査不在の間に四つ辻で混がらかつて交通は次第に亂れ初めました。この瞬間に十二三の可愛らしい子供が群衆の下をくゞつて馳出しました、四辻の眞中に達すると子供は眞直に立つて丁度巡査のする樣に手を擴げて横の交通にストップ。縱の交通にゴーの相圖をしました。初め少つと驚いた人達も子供が何の爲に走り出したか其目的が解かると皆想はずニツコリして、『アノ小僧はアイルランド人ですネ』などとさゝやきながら、それでも小供の手の動く通りに車を止めたり走らしたりして、一人も其相圖を無視する樣な者はありませんでしたそれで本當の巡査さんが用を濟せて歸つて來た時には交通は初めから何の障りもなかつた樣に整然と整理されて居た層です。

話は只これ丈のことです、何故に群衆が小僧さんの手の揭げをそんなに柔順に遵奉したかと云ふ點になると、ニューヨークは一年に千人も自動車の爲に殺される怖ろしい都だから……と云ふのも一つの答案です然し吾々が他山の石としてこの話を聞く時には、もつといろ〳〵な感想が胸に浮ぶに違いないと想ひます。

見聞　茶前
焉焉　酒
後
彦一　木三

○福原俊丸男の和歌のうまいことは、天下に定評があるが、氏は、その外にも書道、繪畫、行くとして可ならざるなし。

○さき頃も、氏は五六の知己と、旭町の高臺『川よし』といふウチで、晩餐を共にしたが、女將の懇請で、ソコの大座敷に千仭閣と名づけ、その題額を書いたが、その筆勢の雄勁は、一座をアッといはせた。

○或る人曰く、『俺アまた、たゞのおん殿樣と思つてゐたが、なか〳〵どうして……おマケに、ありや工學士の、立派な技術家ぢやさうな』

× ×

○土地經營の末森氏が、正氣術といふのを始めた。

○お祖師末森氏の言明に依れば、萬病治せざるなし。それはいゝが、諸方に電話をかけて、『君は、度せてるから、一寸來なさい』、『アー君は、ふとり過ぎてる、一寸拙宅へ來てもらいたい』、何事ならんと馳せつけると、『さアこれよりいよ〳〵正氣術ぢや。諸君、靜粛に〳〵』、傭兵一同ペソを搔いて悄然たり。

出張の豫告の神樣

いて投書する。社ではそれ等を集め、次回の誌の末尾の方に批

出雲の縁結びの神樣

香川守行

（朝鮮酸素會社）

不肖の鄕里は出雲の國であるが他の國の方で出雲の縁結びの神樣といへば出雲大社と合點して居られる向が甚だ多い樣である。併し實際はそうでなくて眞の縁結びの神樣といへば松江市を距る約一里半、乃木村に在る『八重垣神社』といふがそれである。この社には素盞嗚命と稻田姫とを祭つてあるが素盞嗚命が大蛇退治をされて稻田姫を助け進んで姫を娶られたといふ此芽出度い縁結びを肖り後世この二方を縁結びの神樣として祭つたのである。出雲大社は縁結びについては餘り關係がないのである強いて言へば極く簡單ではあつたらふが、結婚式を創められたのが出雲大社の大國主命であると傳へられて居るだけである。右樣の譯であるから讀者の方の中で良縁を求むるのに出雲の神樣の助力を望まれる方は八重垣神社に御頼みになる樣御勸めする。此社へは松江驛より立派な自動車道があるから自動車を驅ると廿分間位で行かれる。料金も社前で一時間位も待たせて往復五圓である。又乘合自動車も松江、八重垣神社間を通つて居るからそれを利用するも不可ならずである。社の後方一町の所に奥の院あり茲には小なる末社ありて其前に一本の樹あり、その枝に幾百といふ小撚が結ばれて居る。これは皆親指と小指とのみで結んだものであるが、それを早く結び得れば縁が早く、遲ければ縁が遲いと言はれて居る。又其直ぐ前に二坪ばかりの清らかな池があつてそこに參詣の若い男女は薄い紙に一錢銅貨を載せて浮べるのである（一厘錢の通用された時代にはこの一厘錢でやつたものである）、その沈下の遲速により縁の早い遲いを占ふのである。この池に投ぜられる銅貨も餘り少いものではない。次にこの池の前方にある生竹や樹に縁に關する勝手な希望を刻んで居るのが澤山ある。右の外此社の構内には稻田姫の隱れたといふ直徑六七尺もある大杉や、地上直ぐより二股になつた夫婦椿あり總て縁結びに因んだものばかりである。この社では縁結びの御守札を社務所で希望者に授けて居るが十錢、廿錢、卅錢、五十錢と色々ある。まさか値の高いのほど難有味が多いといふ譯ではあるまいが値の色々あるのは我々凡人には不思議に思はれる。地の人に言はすれば『いやもう近頃は神主さんも坊ンさんも商賣氣滿々で』とある。果して如何か。

御相談

本誌批評欄開設に關する余の希望――讀者の方が本誌の記事を讀まれた時、必ず感想があるに相違ないと思ふ。讀者はその感想や批評を極く簡單に且つ攻擊的な文字でなく穩かな筆法で書いて投書する。社ではそれ等を集め、次回の誌の末尾の方に批評欄を設けてそこへ載せる。斯樣にすれば甚だ興味ある事と思ふが如何。敢て雜筆社並に讀者諸君に御謀りする。（香川生）

棋界最高指針
將棋春秋 一冊金四十錢
東京日本橋區蠣殼町一ノ四

◇隱れた半面

南柯山人

○前鮮銀理事の井内さん、溫厚謹嚴、身を持すること方正、從つて他の過誤を責むること又峻烈であつたが、彼に珍らしきは稀に見る運動狂であつたことで、其性格と對照して全く不思議な現象であつた。

○彼は實に京城野球界の好箇のフワンであり、研究者であり、同時に隱れたる指導者？でもあつた彼は又オール京城テニス團長として時には彼が私財をさへ投じて指導と奬勵とを惜しまなかつたとも傳へられて居る。

○彼が朝鮮財界に於ける過去數年間の功過を云爲する人は多いが其隱れたる半面を知る人は蓋し少い樣である。彼や曩に鮮銀を退き今や悠々自適の間定めし神宮球場のあたり往年鬱積の憂さを散じて居ることだらう。京城球場のメーンスタンドに傻軀鶴の如き彼の默々煙を吹かす姿を散見し得ないことは、聊か物足らぬ樣な感がないでもない。

テスの家出

一番ヶ瀬慶次郎

（一番ヶ瀬醫院）

『テスが逃げたヨ』

何日もの朝の運動から歸つた私はラケットを放り出して叫んだ。

『エ！どうしたんです』

皆は中庭の椽先に衝立つて居る私に緊張した視線をなげた。落ち付きを欠いだ私の態度から早くも事情を攫り知つた樣に

『連れて出なければいゝに』

眞實そうであつた、今朝は途中から幾度か戻りたがるのを無理に引つ張つて行つたのが惡かつた。

『何處で居なくなつたの』

『永樂町と、本町二丁目の角だヨ、自動車に驚いて貳丁目の方に走り込んだッ切り、姿を見せない』

私は上衣を脱いで汗を拭ふた。

『トーチャン、運動靴を何處へかけるの!!汚い』、九つの京子が頓狂聲で叱つた。私は片ッ方の靴を帽子掛けに吊り下げて尙ほも語を續け樣として居る、皆は噴き出したが私は苦笑した。

二三度軒別に覗いて見たが痕跡だに見當らぬ。丁度出勤時刻ではあり本町通りは可なりの通行人で埋まつて居た。忙しい足並が規則正しく西へ西へと續いて居る。

『必ず何處かで捕つたのだナ』

ハーディのテスに因むだ彼女の名が遂に禍したのだと思ふと今後の運命が明瞭に卜されて可愛想でならない。

六月も末の夕べ、崇一洞のN氏の邸から迎え入れた當時はヤット母親の乳房を離れた許りの仔犬であつた。茶褐のセッター種で碧色の瞳と豊かに垂れた耳朶は特に人目を引いた。日毎に伸びる背丈けと全身の色艶は彼女の悪戯と共に著しく增長した。子供のおイタ同樣嫌惡と忿怒に價しない幾多の惡ふざけ。今は却つて哀れな跡を庭の其處此處に印して想出の種と成つて居る。

壞れた朝顏の鉢、千切れた赤い下駄、片方の子供のゴム靴、凡てが彼女のお轉婆の名殘である。亡くした愛兒を回顧する人が壞れた玩具に留め度のない涙を催す樣な氣持で私はジットそれ等を凝視めた。

ダーバビイル家のテスが搾乳場に働く可憐なる美しい姿や、アッシ高原の麥扱きの苦難が腦裡に浮び上がつて來る。吾がテスにも受難の時が來たのだ。何處かの臺所の片隅に鎖に繫がれてクン〳〵鳴き叫ぶ哀れな訴えが耳の底の方に響く。

朝は毎日薄明りが物置の窓からソット這ひ込む時分テスは既に座敷の椽側に廻つて居た。私の離床が遲れると硝子戸の腰板をガサゴソと掻いて催促するのを常とした今朝は隣りの番犬の頓間聲に不精々々寢床を脱け出た。

本町の裏通りを花月の横に拔けて壽町から日の出小學校の前を降り永樂町の赤門倶樂部のテニスコート迄で自轉車で僅に五分間、今朝は自轉車を廢して若しやの邂逅を念じつゝ本町通りを東にテクッた。矢張見當りそうにもない。早起きの番頭君の打ち水に危くづぶ濡れになる所を輕く身を躍らして避ける拍子に商業銀行の路地を飛び出した茶色の一犬に素早く眼を付けたが其れは似も付かぬ醜男のブル公であつた。アノ走る毎に搖れる大きく垂れた耳、青色の潤んだ眼、無邪氣に跳ね廻る時の輕快なる姿態を一度何處かのクレアに見付かつたが最後脱れつこはあるまい。

【四】

三日目の朝の事である。

『トーチャン、テスが小さく成つて歸つたヨ』

幼稚園生の佳坊は私が運動から歸るや否や寢間着のまゝ蚊帳の裾を捲つて飛び出した。さては虐待から逃がれて吾が家を忘れず歸り居つたか。

『ソーカッ、偉いッ』

と一聲叫ぶ所であつたが別にそれらしい氣配が無い。家の誰れ彼れも其れに就て一言も發せず例の如く朝餉の仕度に忙しい。

『どうしたの坊や』

『夢を見たのよ』

日頃最もテスと不仲で怖がつて逃げ廻つて居た朝寢の佳坊は今朝はテスに起され吃驚りして跳ね起きたと見える。

『そうか、テスは居ないよ、早くお顏を洗つておいで、學校が遲くなるよ』

例えクレアの胤を宿すとも一度は歸れよ、汝の受難は余の不注意から惹き起した罪である。色男のエンヂェルに比べてもつと私は寛大で有り得るから。

ムーンシャイ

元々違法的行爲であるから之を裁判に訴ふる事が出來ない。故に盛

運命が明瞭にトされて可愛想でならない。

六月も末の夕べ、崇二洞のN氏々々寓居を脱け出た。

本町の裏通りを花月の横に抜けて壽町から日の出小學校の前を降ら惹き起した罪である。色男の…ンヂェルに比べてもつと私は寛大で有り得るから。

京城雜筆

ムーンシャイナーの自白

泉哲（城大法文學部）

ムーンシャイナーとは米國東部の山丘地方に於けるホイスキの密造者である。古き頃より行はれてゐたが禁酒法の實施以來著しく盛んになつた。左に元密造者の自白の一端を紹介して禁酒法勵行の困難を窺はん。

密造は西ヴァジニヤ、ケンタッキー、テネシー諸州に於て行はるゝが余（自白者）の住んでゐたローガン及リンコルンカウンテー地方（長さ約四十哩巾廿哩の區域）に就て話そう。余が密造を廢めた一九一六年には此地方に十ヶ所の秘密蒸溜所があり、平均各十五ガロン（一ガロンは二升五合）の蒸溜能力を有してゐた。生産物は無着色の優良品であつた。當時の密造は決して有利の商賣ではなく反法的意識の表現に過ぎなかつた。歐州大戰となつて余は始めて本心に歸り違法の營業を抛棄し蒸溜機具を崖穴に匿して該地を去り六年の後一九二三年に歸つて見ると親戚が之を使用してゐた。そして六年前十ヶ所であつた蒸溜所は十五ヶ所に增加してゐた。此等の密造者は最初の移住者の子孫であつた從來密造は時々斷續的に行はれたものだが今や永續的の營業と變つてゐた。余は一度不正の營業を打ち棄てたのであるから如何に有利でも再び之に關するを欲せず。成るべく近寄らぬが宜しと思ひ西部に去つて三年を經た。一九二六年に一時歸鄉して見るにムーンシャイニングは一倍の活氣を示してゐた。蒸溜所は十五ヶ所より三十ヶ所に增加し、規模も擴大せられ各約四十ガロンの能力を有してゐたそして經營者は從前とは變り多くは外國人であつた。此等の人々にとりては密造は石炭掘（該地方の主要なる産業）よりは有利であつたのである。彼等の製造するウイスキーは驚く程高價なるに反し品質劣惡有毒のものである。

今日の狀態は一九二六年よりも一層惡化し、秘密蒸溜所は六十五ヶ所の多に達してゐよう。而して蒸溜能率も漸次增加して一ヶ所にて六十ガロンを蒸溜し得る。古き時代の密造は娯樂の如き傾があつたが、今日は科學的經營方法を採用してゐる。經營者も最初は一人又は數人にて一蒸溜所を有してゐたが、今日は一人にて五六ヶ所を經營するものも珍らしくないらしい。或る個人は十四ヶ所、他のものは二十一ヶ所を支配してゐる。

如此併合は如何にして行けるゝやと云ふに最初は二三が合意の上合同し、次に大量を比較的安價に生産して個人經營者を廢業差しくは合併せしめる。第三の方法は他人の蒸溜機を盜み取るのであつて元々違法的行爲であるから之を裁判に訴ふる事が出來ない。故に盛んに密價を放つて他人の秘密蒸溜所を探し出して之を盜み取らしめる。

ムーンシャイナーの地方的地位はなか〳〵鞏固であつて地方官憲の保護により時には州及聯邦官吏の追求を遁れる事もある。

以上の自白は米國禁止法勵行の現狀を語つてゐるものであるが之は禁酒の效果を否認するものではなく只禁酒の方法に就き一大考慮を促すものである。

◈福澤翁の書

三木一彦

○この間、名古屋のセリ市に、珍らしいものが出たさうな。福澤先生の書だ。それも狂詩だ。

○往年名古屋に、加藤六藏といふ男があつた。人々から勸められて、代議士を競爭し、幸に當選の榮を擔つた。

○そこで、東上の序に、恩師の福澤先生を訪ひ、『紀念のため、御揮毫を』と賴んだ。

○先生は、『ヨシ〳〵』といふて、即坐に一筆を揮はれた。これが問題の狂詩で、文句は

道樂發端稱有志。
阿呆頂上爲議員。
賣盡傳來田畑去。
買得一年八百金。

といふのである。

○六藏代議士の狼狽、知るべきでせう。

○この書、その場で、六百圓で落札。その夜の中に、千二百圓で他へ轉賣されたさうです。

人を語る

石森久彌

（朝鮮公論社）

『詩經か易かにありさうだ。そういへば俺れは讀んだことがあるぜ』私がいふ。

『齊藤子爵の面目躍如だね』

『何んかで見たね榮根譚かね』春から秋まで爾來その詩の在りかが分らなかつた。別に氣にも止めなかつた。ところがこんどの政變で、齊藤子が朝鮮總督に再任したので、その時の詩が又ぞろ氣にかゝりだしたので、一夜榮根譚に見當を付けて懸命に探すと全集百二十六章かで發見した。これあるかなこの言や。

こんな事をいうたら又東北閥！とやるかな。やるならやれ。妬くならやけ。おべんちやらをやつてるんでねいから。

人間の修養は六ヶ敷しいものである。われ〳〵が皐水子爵のこの愛誦する古言に近いまでに砥礪したなら可成偉い人間になれるんだが……。

怡軒道人

前號京城雜筆で『瓦を磨く』の一文を書いて、浪人者の心境を語つたわが片岡怡軒君は余の好敵手である。彼は失禮な事をいふやうだか、アノ體である。あまりパッとせぬ體であるが、講道館の三段で、あの五十に近い體で、あの貧弱な體で若い三級四級位の青年を見事に稽古を付けて居る。

『どうですか片岡さん』

【六】

『ハアハ……まだ大丈夫ですよ三級四級位は手ごろですよ』

その手頃が馬鹿に嬉しいのである。わが片岡君の面目は、眞骨頭は、この手頃をいふところに存在する。

私も矢張手頃の氣焔は所有してゐる。先年まで滿洲にゐた門馬五段と中學時代大將、副大將で試合をした履歴を私は有してゐる。だからまだ二段であるが、あの頃からやめずにやつてゐたら矢張五段ものだつたらう。と自分丈け信じてゐる。片岡三段とは好敵手として講道館道場でいつも稽古をやる先方は俺に稽古を付けるつもりだらうが、當方は先方に付けるつもりである。二人の禿頭の老人（柔道家から見たら最年長どころ）がやり始めると、少年組はみんなやめてクス〳〵笑ひ乍ら我等二老朽に敬意を表してくれる。

昨年の吉例鏡開きかに二人が觀衆の前で模範亂取を見せる積りであつたが、稽古着を着ると年甲斐もなく二人は額に青筋を立てゝ、やゝ眞劍になつて終つた。俺の横捨身が半分かゝつて怡軒先生は左の手を付いて手を少し挫いたものだ。

二、三日して怡軒先生が手を繃帶して首にかけて便所に通ふのを見て漸愧に堪えなかつた。怡軒先生はそれでも負け惜しみでチットモ痛くないというてゐた。かく僕と交渉ある片岡怡軒道人がこんど官をやめて、書堂を開くといふ。彼は鳴鶴の高弟で、その筆魂は所謂遠雲止水の中に、鳶飛び、魚躍るの慨あるものがある。余の好敵手怡軒道人はかく負け惜しみの强い、而して何事でも名人の境まで進む意氣を有し、からだは小さいが鏗々氣慨を有するの士である。その書堂は書堂以外に、眞の道の由ならしめなかつたことは遺憾であつた。

京城雜筆

皐水子爵

春の夜であつた。倭城臺の櫻が滿開の頃だつた。松村土地改良部長が一夜國の連中を招んで、倭城臺の櫻を賞づるといふのであつた瀨戸國手を始めとして、守屋つれづれ法師、令弟伊藤博士、石田兩務堂その他、ガラス越に重なり合つて居る櫻の房束を眺め乍ら、支那料理を馳走になつた。

雷雨が沛然としてやつて來た。

電光が閃めいた。けれども櫻はその豪雨に散らず、銀雨に洗禮を受けて益々淨化された姿致を見せた。

何か出ぬかな。

『夜櫻や……』獸目だつた。

『これやどうだらう』松村氏は誰れかの揮毫を出して來た。それは皐水子爵のものだつた。

覺人之詐。不形於言。受人之侮不動於色。此中無窮意味。亦有無窮受用。

守屋つれ〳〵法師は讀んだ。

ハハア成程。

人の詐を覺るも言に形はさず、人の侮を受くるも色に動かさずこの中無窮の意味あり。亦無窮の受用あり……か。

『齊藤子爵の心境はこれだね。君！』

法師は一座を一揖した。

『何んの詩だらうね』誰かがいふた。

本誌原稿

が鏗々氣慨を有するの士である。その書堂は書堂以外に、眞の道の修養場として最も恰好の道場であらう。愈々道人の道のために精進せられんことを祈る（片岡君曰くおれの雜筆の文を見てくれとの言に從ひ見て而して如件）

本誌原稿

十一月號締切

第一回　十月五日
第二回　十月十日

秋の思出より

長谷井市松

（朝鮮銀行）

今から六七年もの前、秋も十月の中旬であつたが――私は年老ひた父と、當時五歳の少女を伴れて老虎灘街道を右に折れて山徑三里をガタクリ馬車に搖られ乍ら、傳家庄の海岸へ行つたことがある。

滿洲の秋は大抵コバルト色に澄み亘つて、透徹した空の中には唯一片の雲でさえも、見かけぬほどの好日が多かつた。時折山鳩の群れが、小松林の上を掠めて、斜めに低空を飛び去る樣が、私をしてツルゲネエッフの獵人日記を思ひ出さずには置かなかつた。

傳家庄の海は遠淺ではないが、碧潮滿々と云つた風で、水は極めて美しかつた。濱傳ひ東の方へ出ると、巨巖磊々として海中に錯落又散亂して居た。ソコの丘の上には、秋の日を受けて蟹の類が多く群れて居り、而して又ソコの濱には、美しい青滋色の小石が多く點在して居た。砂濱の上には肉の厚い大きなクラゲが澤山乾されてあつた。

私達はソコから舟を雇ふて、更に星ヶ浦の方へ行つた、少女は波の動搖と、海坊主などの物語を思出して、とう〳〵泣き出してしまつたが、舟が進むにつれて、スヤ〳〵と眠りに落ちた。折々舟の前方で勢よく跳躍を試みる魚族があつた、恐らくソレは鱸か、鯖でゞもあつたろう、對岸の岩上に腰うちかけて、徐かに絲を垂れて居る同胞の姿が屢々見受けられた。

私達をのせてくれた舟夫は、年の頃二十六七の精悍な、眉宇に男らしさを偲ばせた、併しどちらかと云へば、稍青ずんだペシミスチックな若者で、其横顔が名馬一鞭の主役、ジャック、ピックフォードに酷似して居た、青年は舟を漕ぐ手を折々休めて、思出したように一升壜を取上げては、燒酎かジンのような、强烈な酒を呷つて居た。沈痛な面地が、彼の顏面を蔽ふて居た。私は何だが此男に話しかけたい樣な氣がしたが、言葉の相違が私をして、彼との會話を自由ならしめなかつたことは遺憾であつた。

星ヶ浦に着いて、約束以上に、某かの酒手をやると、心持ち微笑を浮べた彼は、幾度も〳〵頭を下げて、而して波頭の白く燻る、黄昏近い海の彼方へ遠く去つて行つた。秋の傳家庄を追想するにつれ、私はいつも當時の青年舟夫の面影を連想する――。

◇米倉町閑話

三木一彦

○工藤武城氏は、毎日午後からは、例の園丁のやうな服裝をし、默々と庭いぢりに日を暮してゐる。

○その庭が、馬鹿に廣いので、時々見ず知らずの風來人が、侵入し、悠々と景勝を樂しんでゐることもある。

○この間安下宿の主人公のやうな男が徘徊してゐる。捨てゝおくと、工藤氏のそばに來て、『一體この屋敷は、何坪ありますな』、『さア……千二三百坪かな』、『タイしたものぢやナー。いつ頃買つたものぢやらう』、『二十年以上になる』

○スルトその先生、獨り言を始めた。『フー、二十年以上といふと、この邊は、原ッパぢやらう。その原ッパに住むといふこと、また必要以上に、千坪以上も買ふといふことは、ヨッポド間の抜けた男でないと出來ん。ところで、ワシの經驗に依ると、間の抜けた男が存外金が出來る。皆この傳でな……』、いひ乍らマコーを出してスパリ〳〵。

○工藤先生金持に見立てられたのはいゝが、天下の間抜ケ男には我れ乍らクスッ……。

『何んの詩だらうね』誰かがいふた。

『どうですか片岡さん』

見事に稽古を付けて居る。

い、而して何事でも名人の境まで進む意氣を有し、からだは小さい

或る日曜

矢鍋永三郎
（殖産銀行）

日曜日午前八時、N君M君等と自働車で清涼里のゴルフリンクにドライブいたしました。東大門外の水稻は穗の出揃つた許りの所です、二百十日は内地の事です、ゴルフ場は朝露深く雨後の草原其儘ですけれども、空晴れて其のスガスガしさ云はん方なし。M君は競技會に加入して腕を振つて見せると云ふ、N君と組んで競技會の列外にあつて午前、午後各一回悠々と秋の氣を吸ひました。午後三時前記兩君の外I君S君等と自働車に同乘京城運動場に向ひました京電對殖銀の野球戰を觀る爲に、運動場に着きました時にはI度二回戰の表で京電攻擊の眞最中でありました。殖銀の投手若冠軍大の責任を負はされて立てる所、涙ぐましさを感じました。此日兩軍よく戰ひましたが、京電は一安打無得點、殖銀は三安打一點で勝を得ました。京電剛球投手一軍を將ひて立つの慨あるに對し、殖銀軍力を合せて弱小投手を援護する樣は稀に見る好對照でした。對戰時間一時間四十五分。

歸來夕食を終つて、妻と自動車に同乘京城驛に新任齋藤總督を出迎に參りました。午後七時多數の人々に迎へられて老總督は到着せられました。七十三歳白髮童顏、德半島に普遍かるべし。

出迎を終つて家に歸ると、床の間にテンペラ畫の展覽會が始まる。長男のは隣家N氏宅の寫生で、頗る眞に迫つてゐる。三男のは此れも隣家A氏宅の寫生であるが、よくもこんなに單純化せられたと思ふ程、單純化せられた色彩濃厚な畫である。二男のは病中畫で又趣の變つたものである。自分のは風景畫であるが、南畫のテンペラ化した古典的のものである。此等の畫が床の間に陳列されて家族の者が見物人と云ふ譯けである。床には方洛の薔薇花の繪が笑つてゐます。

夜十時半の汽車で長女が暑休を終つて東京に行くのでテンペラ畫展會場の前で二、三の知己と茶菓の別れをいたしました。十時出發、秋の夜は朝鮮にかぎる。

茶話　江湖百人　北漢山　しなば

○博覽會の開かれたために、京城北部の土地に、人々が急に眼をつけやうになつた。

○中でも、十人が十人涎をたらしてゐるのは、例の津田鍛雄氏の住んだ白雲莊だ。

○總坪數一萬何千坪、山に據り南面し、樹林あり、溪流あり。閑雅幽邃、とても京城には、二ッとない好景勝だ。

○東拓に、五萬圓で、質に入つてゐる。

○初めは、金嘉鎭氏が住んでゐた。八千圓で津田氏のモノとなつた。津田氏は、此處で、愛妾と、三人の上女中と、四五の婢僕と――大名のやうな暮らしをした。コロッと肺炎で死んだ。死ぬると、殘つてゐるのは、借金ばかり。鄕國から來た母堂などもアッ氣にとられてゐた。

○その前に、愛妾は、氏を口說いて、一萬數千圓を懷にし、軍患だといふのに、それを見捨てゝ、トット內地へ退却した。上女中に、津田太郎といふ一子が、生まれた筈だ。

○そんなことは、まアいゝとして、今は某辯護士が住んでるさうな。さて、今後誰の持物となることやら。

靴歸る

毒だけれども届け出るとなか〳〵面倒なんです。

私は一昨年から昨年へかけて大

靴歸る

高武公美
（中樞院）

一

敢て菊池寛氏の『父歸る』の向ふを張る譯では無いが、盗られてた靴が、届けてもゐなかつたのに警察のお蔭で無事歸つて來たと云ふ出來事があつたので、斯う云ふ見出しをつけて見たのである。

本年の六月末から七月初め頃にかけての事だつたらうか、玄關の下駄箱の中にしまつておいた私の白靴が無くなつた。二足ある白靴の中のいゝ方で謂はゞ餘所行き、軍隊式に云へば第一裝甲に屬するものであつた。

二

私の今の官舍には内玄關が無い裏口はあるがその方から出入する譯には行かんので矢張り我々も玄關から出入しなければならぬ。然るに暑い日など歩いて歸つて來て扨て玄關の鍵がかゝつてゐると、鈴を押しても、廊下は割に長いしするからドアーを明けて貰ふまでに全身汗に襲はれる。恰も嵐の時汽船では酔はないで船酔で酔はされると云つた格である。そこでお客さんの來ておられる場合は別として、日頃は靴などの被害が少々あつても仕方が無いからしめておかないやうにと命じておいた。

所がなか〳〵被害がある。先づ長男の新しい黒靴をとられた。それから之は申譯ないが、お客さんの來られてる時のドアーしめの憲法をうつかり忘れてたもんだから專賣局釜山出張所の金君が來て呉れてた時その靴――新しくはなかつたらしいが――をしてやられた此時などは餘り氣の毒だつたので失禮でもあり且本人も固辭されたけれども、私が洋行中獨逸で買つた赤靴の古くなつたのを贈呈した續いて三度目が本件の靴である。

斯の如く被害頻々であるが、戸の鍵をかけない主義は改めたくないから從前の通りにしておいたが下駄箱をヴェランダの内部へ置き換へたので爾後は靴の被害は無くなつた。

三

靴の盗難三度にも及んだから無論警察へ一回位届けたらうと云ふことになるが、實は一度も届けてはゐない。靴の一、二足位とられても構ひはしないとか、届けておいてもどうせ出ては來ないだらうとか云ふやうな氣はさら〳〵無いまた況んや之が社會政策の一つだなどゝも考へてはゐない。矢張り届けておいたら萬一は出て來るかも知れぬし、同時に何處其處に泥棒が出沒徘徊してるなと云ふ注意を警察へ喚起さす位の效果はあるだらうとは考へてた。にも拘らず何故に届け出でなかつたのであるか。

四

實は斯う云ふと警察にはお氣の毒だけれども届け出るとなか〳〵面倒なんです。

私は一昨年から昨年へかけて大邱へゐた時に赤靴の出來立てのホヤ〳〵を二度までも失敬されたことがある。其時は正直に二回とも直ぐ交番へ女中をして届出でしめた。そうすると盗まれた月日時間靴の買入先、置場所、色合、スタイル、價格等からその頃怪しいと思はれる人は來なかつたか、どうかと云つたやうなことまで根ほり葉ほり尋ねられる。若い女中は丸で口述試驗でも受ける調子でおづ〳〵し乍ら答へたが、扨てその値段を聞かれたとき『十二、三圓位でしたらうか?』と答へたら巡査さんから『苟くも專賣支局長さんの履く靴だ!も少し高い筈だらう?』と云はれて恐縮し、家へ歸つてから少々きまりが悪う御座いましたと話してた。一寸序だから申しておきますが、その靴は刑務所で作つたので見かけよりは安くて九圓しかしてゐなかつた。女中はそれを知らなかつたのであるが、而し知らないで幸ひ、若し九圓でしたなどと云はうものなら一層恥しい思ひをしたであらう。

それから十日か二十日か經つて交番から『靴のことで出頭せよ』と云つて來たから『或ひは靴が出たのかも知れん』と云ふ多少の望を以て前記の女中に行つてもらつた。するとそこへ一人の男がゐてそれが私の靴をとつた泥棒だつたらしい。巡査さんが女中に對して『此男の顔に見覺えは無いか?』と尋ねたそうであるが、その男は意地惡そうな且怨めしそうな眼でぐつと女中を睨んだので、女中は氣味がわるくなり一ちゞみになつたそうである。尤も靴でも出て

京城雜筆

來たんなら景氣でもいゝが、その方は一足も出て來なかつたんだから結局只だ睨まれ損の草臥れもうけと云ふことになつてしまつた。

まあざつとこんな譯で過去の經驗から云ふと届け出ても餘り成績がよくなかつたから默つておつた次第である。

五

それが今度は反對で届けてもゐないのに、靴が返つて來た。届書だつたか、願書だつたかも警察の方でチヤンと謄寫版で印刷されてゐるものを渡され、只だそれに月日や被害品名等を書き込めばよかつた。その中に『……を盗まれ居りしに氣づかず……』と云ふ、少々自分の間の抜けてたことを表白するやうな文句のあるのに苦笑した位のことで、別に何等手數を要しなかつた。

私は今更ながら警察の行届いてることにほんとうに感心し且感謝した。それで八月二十九日誰でもいゝから龍山警察署へ受取りに來いと云はれた時に、御禮心もあり又代人をやつて違つた靴でも持つて來られては困ると思つて恭しく私自身出かけた。その時盗難係主任の前へ一人の弱々しい、寧ろおとなしそうな四十歳前後の朝鮮人男が椅子に腰掛けてゐた。その主任は私に向て『あなたが御本人ですか？ちようど此處にゐるのが盗んだ當人で、モヒ中毒者です』と云つた。成程そうであらう、當人は無氣力で私を睨んだりする元氣も無さそうだから大邱の場合とは全く違つてゐた。その當人などはゐなければ尙その方がよかつたけれども、ゐたからとて少しも恐いような不愉快なやうな感じはしなかつた。その中愈々靴が出て來たが正に私のものであつた。

斯う云ふ成行で一旦私から離れてゐた大事な第一裝甲の白靴が、二三ヶ月目に完全に私の手に……否私の足に返つて來たのです。即ち『靴歸る』の一幕件の如し。

人蔘劑では
一も二もなく
總督府
專賣局
精製の蔘精
に限ります
發賣元
貴生堂藥品店
京城本町二丁目
（電本一三八番
振替七六一番）
總督府
蔘精

◇無駄はなし

三木一彦

○京城の近郊で、將來の住宅地として、最も好望なところは、東小門外……アレから平山さんの牧場方面であらう。砂は白く、水は清く、閑靜そのものゝやうなところである。

○大學の先生達で、地所を買つた人が大分にある。

○ヅッと前に、コヽに眼を着けた平山さんは、流石に凡でない。

○ところで、アノ邊でもう、坪五圓、七圓を唱へ。盛んに賣買も行はれてゐるといふ。

○前號に……齊藤久太郎氏の三阪通の邸宅が、今はアノ邊で、坪五十圓を唱へてゐることを書いたが、十年以前氏が、家をアスコにトした頃は、坪僅に一圓、一圓五十錢であつたといふから驚く。

○三阪通……アレから元の練兵場の賣りに出た頃、アノ一帶を三十六七萬圓で買ひに懸つたのは、麻生晉波氏だ。氏は、この相談を或る銀行家に持ち込むと、『相變らず、太いことを考へとるのう。だが、鑛業家は、やつぱり山をいちつとるがいゝぜ』、麻生氏折々往年を思ひ出して、『俺は、いつもこの調子で、頭が上らぬ』

○近郊の發達は、實に驚く。宵葉町の山の中の橋本氏（豊太郎）のところなど、今はもう『閑靜』などとはいへぬ。道路も開け、家もドシ〳〵建つ。そして地價は、モト値の三四倍に飛騰してゐる。

○以下は、パッとせぬ方の話。

○『賣手あれども、買手なし』といふのは、南山町方面……。値段として成熟し切つてゐて、しかも先きの見込が薄いといふのだ。

一七八〇年――本日の發達をみたと云ふことであるが、米國の或る

畫房寸話

―知つて知らぬ事―

佐藤九二男（洋畫家）

（1）二科會

我々が日常口にしてゐる乍ら、さてその意味が一體なんであるか、知らずに居る樣々が、世の中には隨分あるものである、近くはマネキンの類ひである。

この間、或人の質問は斯ふである。『二科會』とは一體何んです――と云ふのである。

成程之も一つの疑問である、本年の二科展では、など新聞に掲載されて、今では人口に膾炙された言葉であるが、實際その意味に至つては、其の專門の人ですら、何であつたかを一寸思ひ出すのに苦るしむ場合が多い、で雜筆をかりて思ひ附きの二三をしるして見よふと思ふ。

二科會――と云ふのは、石井柏亭氏を首領とする――（柏亭氏の事務的才能が本日迄、二科會を圓滿に持續して來た點、私は斯ふ云ひたい）反帝展の在野に於ける唯一の權威である美術團體の名である事は、御承知の通りであるが、大正元年、當時の文展の審査方針に嫌たらぬ作家が、當局に洋畫部を一科二科に分け、一科は舊審査員、二科は新審査員と區分して、出品者にそのいづれかを撰ばしめて出品すると云ふ二科設置を主張したが、遂に容れられなかつた。

翌、大正二年、斷然帝展に出品せんとする者は、本會に出品する事を得ず云々外數條の規約を定め反帝展の旗を上げ、名も二科會と稱して一般に作品を募り第一回の展覽會を催ふしたのである、じらい本年で十六年の長きに渡る盛會である。二科會に就いては、可成りの難も論もあるが、とに角本日の位置に迄來つた所以は、會員相互の親睦と云ふより、柏亭氏の人物に依る所實に大なるものがあると云ふ可きである。

（2）アイスクリーム、サンデー

アイスクリーム、サンデーと云ふのは、近く龜屋、中村屋で御承知の代物であるが、私の知つたのは震災前、日本橋の星製藥の喫茶店で、それに前後して横濱の不二屋であつた、が京城では、ごく最近の事である。

元來アイスクリームと云ふのが『マセドニヤ』なる幻名を持つた代物で、かつてアレキサンドリヤ大帝が、アジヤ征伐の折、陣中で大暑を之に依つてしのぎ、大いに賞味したと云ふ時代物である。

だから其歴史は隨分古い。

なんでも、アイスクリームと云ふのは、ポジオと云ふ伊太利人が米國へ輸入したのが初まりで――一七八〇年――本日の發達をみたと云ふことであるが、米國の或る都市では、日曜日に限つて飲食物を禁止する法令を布いた事があつた、一商人が、アイスクリームに果物を添えて名も日曜日（サンデー）をもじつて、アイスクリームサンデー（SANDAE）と稱して賣り出したものが、大好評を博して本日、全世界にひろまつたと云ふいんねん附きの代物である。

（3）カクテル

シャンデリヤの下――ギヤマンのさかずきに光るカクテル――おお――ましろきかいな――などと白々しく詩人が云ふ『カクテル』命につぐ鬪鷄を失つた百姓、之を捜しあてた人に娘をやろふと宣言した、その幸をひろつた男はみめ美くしき將校であつた――百姓家では結婚の酒宴、正に酣と云ふ譯である。

美くしい將校の前に酌に出た田舍娘は、只おどおどと、まばゆい心持であつた――一つの盃に樣々の酒をついでしまつたのも無理はない、鷄の尾の樣な樣々な色の酒――しかし酒の味は格別であつた以來、此れの流行となり、名も鷄の尾（コクテル）と呼んだ――とは、夜ひらくの著者、現佛蘭西文壇に於ける感覺派の首領、ポールモーランの言ひ分である。（完）

本町名物
龜屋食堂
金剛山
清潔であります
酒と女給となし

鵲と金魚

福士末之助（總督府學務局）

私の庭に、數本の樅や栗や其の他の雜木がある。この樅の下に小さい池があつて之に金魚數尾を飼つて居つた。

夏の或る日、この樅の枝に、一羽の鵲が來て、頻に鳴いて居る。私は、椽先きに出て、この鵲を見て居つた。

鵲は頻に鳴く。

やがて靜かになつた。

鵲は今小池の金魚を捕ふとして居るのである。

餘り大きくもない三枚尾の赤い金魚は池の中で藻から、出たり這入つたり、如何にも樂しさうに、尾を振つて泳ぎまわつて居る。

鵲は其の初め、枝の上から、池を見て金魚を覗つて居つた。

池の金魚は何事も知らずやはり戯れて居る。

鵲が將に金魚を捕へんが爲めに身構へすると共に物凄い眼で金魚を見詰めた。

この瞬間、其の邊は靜寂悽愴そのものであつた。

私は片唾を呑んで見て居た。

金魚はやはり遊んで居る。

やがて鵲は、體を斜に、池の方へ下に屈めた途端癸忽として、恰かも忍術師でもあるかのやうに、スーと池の汀に飛び降り、其のモーメントに金魚一尾を咬へ取つた。

同時に、他の金魚は駭然とでも形容のさるゝ樣に驚いて一齊に藻の中に逃げ込んだ。金魚には藻の中は淨土であらう。

鵲は金魚を咬へ乍ら凱旋將軍のやうに威勢よく元の枝に歸つた。そうして捕へた弱い金魚を無殘にも食ひ盡した。そうして如何にも美味かつたといつたやうに、二三度啼きつゞけた。

ギュー　ギュー　ギュー

助かつた金魚は、やがて再び藻の中から出て遊び初めた。

鵲は又之を捕へようとする。

この時先きから私と共に鵲を見て居つたチョンガーは、大きな聲を出して鵲を逐つた。

鵲は逃げて、隣家の櫻の木にとまつて又啼いた。

× × ―

その後秋の末に、鵲は、庭の遙か向ふの高いポプラの上枝に烏のやうな巢を造り、よく啼いて居たそうして時々樅の枝に來て、池をねらふ。可愛想でもある。而し此の時はもう寒いから池の金魚は水鉢に移されて居つて、池には一尾も居なかつた、藻も水も大半は枯れかけて居つた。

旗幟幕
龜屋旗店
京城黃金町五丁目
電話本一五八五番

【一二】

◈世の中漫話

三木一彦

○この間まで、京城府の文書課長だつた上杉直三郎君……鮮展に書を出品して……目出度く入選の榮を擔うた。

○工藤擔雪氏これを慶せんとして、はる〳〵府外の同氏宅を訪づれた。

○スルトこれはいかなこと、今方に大論爭の最中である。ハテサテ何の論爭かなと、そーつと覗いて見ると、上杉君夫婦互に腕まくりをして、負けず劣らず大論判をやつてゐる。

○工藤氏『今日は……』と、靴を脱いで座敷へヅイ……。『一體どうしたといふのだ。騒々しいのう』といふと、夫婦互に先を爭ふて、陳述するところに依ると、さき頃上杉君の將に鮮展に出品せんとする時、夫人は、『アンタ、そんな愚書は、駄目よ。おやめなさい』、上杉君憤慨『馬鹿ヲ、俺の書の値打が、お前なんかに判るかい』、『判りますとも、そんな悪書が入選したら、アタシ逆立ちしてお目にかけるワヨ』、『ヨーシ覺えてゐろ、コン畜生ッ』

○上杉氏ます〳〵馬力をかけて精進。とう〳〵今回の榮譽を擔うた。そこで、本日唯今早速逆立ちしろといふのが、上杉君の主張。……イヤ斯く入選したのも、畢竟ワタシの激勵の賜。苟くも恩人に向つて、逆立ちとは、何事です……これが夫人の陳辯。

○工藤氏聽き終つて、『ナールホド……似たもの夫婦とは、よくいふてある』

る。小僧直ちに手桶を見たが僅かに水があるばかりである。どうせ

眞の緊縮策は

生命觀の指導に在り

山本吉久
（南大門小學校）

現内閣の緊縮政策は國家の現況から然あるべきで知識階級に屬する大方國民は之に贊成するであらふ。論より證據議會に百七十名の小數黨でありながら天下の言論機關が鳴を鎭めて眺めて居るのは其の何よりの證左である。併も現閣の諸公及天下有識の士の云ふ所口を開けば金の解禁へ！、否解禁に際して經濟的の打擊を少ながらしむべく緊縮へ緊縮へ……と大は國家豫算の天引、事業の繰延、非募債主義、或は地方費の節約、小は一家臺所の切詰めに井上藏相を先頭に大童の宣傳活動である。今や我國債は六十億に達せんとして其の利拂は年に國家歳計の二、三割を占めて居る。斯る有樣にてはやがては國家財政の破滅である。だから官民共に緊縮一番して國家財政の立直しに邁進せねばならぬと實に其の事や悲痛にして其の云ふ所善し。吾人は暫く現閣の政策を信賴すると共に各々が又務むべきを努めて此の國運の挽回に邁進すべきである。併し現閣の緊縮が金の解禁や財界の立直してふ物質觀に立脚するその目的に近づき或は其の目的を達した暁には緊張せる精神は忽ち弛緩して却つてその反動精神の恐るべきものがある事を知らねばならぬ。之は全く其の云ふ所が方便智であるからである。

昔し印度に或る王樣が居た、其の王妃というのが近所の僧林に五百領の衣を與へたと云ふのである王之を聞いて不思議相に一体五百領の衣なんかどうするだらうと僧都を呼んで問ふたのである。

問、五百領の衣を貰つたといふが一体どうするのか

答、各僧侶に分配するのであります

問、然らば各僧侶の舊衣はどうするのか

答、破れない所を切つて繼ぎ合せて敷布にするのであります

問、然らば今迄の敷布はどうするのか

答、善い所を取つて雜巾にするのであります

問、然らば今迄の雜巾はどうするのか

答、善い所を取つて足拭を作るのであります

問、然らば今迄の足拭はどうするのか

答、愈々足拭にもならなくなつたら小さく切つて壁に混じて使用するのであります

と王之を聞いて其の經濟思想に感じ大に嘉したといふのである。

昔の事ではあるが岡山縣だと思ふ、滴水和尚といふ大德が居た。或日湯浴するのに湯が稍々熱いので小僧に命じて水を求めたのである。小僧直ちに手桶を見たが僅かに水があるばかりである。どうせ之では物の役に立ち相もなしと思つたか、之を捨てゝ更に手桶一杯の水を用意して和尚に進めたのである。和尚直ち小僧を一喝していふやう、『あの一滴の水に尚ほ價値あるではないか、價値あるものには生命がある、その生命を絶つとは何んだ』

此の内外の事例之を近視的に見ればシミツタレとも見へやふ、稍々善く見れば物を粗末にせないともいへよう。併し此の大德高僧達の意中は斯くの如き物質觀から解すべき言行ではなく超物質的な生命觀に立脚して居るのであると思ふ。物には各特前の價値がある。ものには亦各生命がある。その生命を尊重するといふのが此の大德高僧の精神でなくてはならぬ。

政治は力だとか勢だとか或は哲理だとかいふが、今日の政治は力ではいかぬ。元より勢でもない、全く高遠なる理想とその理想實現の方法とを要する。現閣の緊縮は此の高遠なる理想に立脚するのであらうか。今日は金が無いから木綿着に漬物で暮しても明日儲かつたら忽ち美衣美食に耽るやうな導き方では眞の政治ではない。物質觀より生命觀への指導……之がほんとうの緊縮政策であると思ふ。併して始めて個人も救はれるのである。

易
小唄
阪
岡村介石

京城雜筆

途上偶感

眞能義彦（京城醫專）

鍾路から大學の前へ通ずる、新大路が出來た。鍾路通りと殆んど直角に、そして殆んど直線的に、法文、醫兩學部の間を貫いて、高商の横手まで北走する。此の新道路が出來る前は、私はよく此の新道路に株を奪はれた舊道路を歩行して學校へ出勤した。其の當時私は、今から云へば舊道が多少は灣曲して居る事を感知しては居たが其れ程著しい迂回だとは思つて居なかつた。所が彌新道路が直線的に、云ひ換ふれば舊道に定木をあてがふ樣な調子に出來上つて見ると、今も名殘をとゞめて居る舊道が、丁度Sの字の中央に太い眞直ぐな棒を引いた樣に見えて來たのには今更ながら此れまでの感じの鈍かつたのに驚き入つた。自分の心にも時々定木をあてがつて見ないと、とんでもない灣曲を自覺しないで居るかもしれないと、此の新道を歩く毎によく考へる。

○

電車に乘つて暇な時、對岸の乘客の頭上に列んだ廣告を悠々閑々と鑑賞するのが私の娯樂の一つである。然し何時でも考へないで居れない事は、日本文字の書き方が何故もつと統一出來ないのだらうかと云ふ一事である。左から書かれたもの、右から書かれたもの、下から逆上してゐるものはさすがに無いが、眞直ぐの書下し、右上から左下へのはすかい書、左上から右下への斜書、楷行草は無論のこと、片假名、平假名、變體假名假名書などになると逆に讀んで久しふして其のあやまりを悟るものなど、決して以て珍らしく無い。忙しい日本國民は、こんなつまらぬ不統一にわづらはされ度くないものだ。

先般さる町を歩いて居たら、軒先にお正月のお飾が、まだ其の儘に、然も甚だしく朽ちよごれて殘されて居るのを發見して異樣な感に打たれた。眼に見える世界では誠に些とした時節はづれでも、非常な異樣の感を人に與へる。然も眼に見へない心の世界では、前世紀、前々世紀の遺骸を、平氣な顏して大道にさらし歩いても、多くの人は何とも思はぬ。

○

◈名山比較論

北漢山人

○鮮銀支店課長の向井さんは、山を樂み、山を愛する人間で、歐米の名山大嶽は、大抵足跡を印してゐるさうだ。

○但し『金剛山くらいな山は、君、何所へ行つたつてありやしない。僕ア全く感心した』とある。

○いづれ一流の麗筆で、『世界名山比較論』が出ることだらう。

◈東京風聞記

千駄山房

○彫塑家の朝倉文夫氏が、鼻高々と、『拙者の宅には、三井にも岩崎にもないものがある』と、ジロッと一座を見渡しました。

○『ホホウ、君ンとこには、そんな大きい金の茶釜が……ウーン』と唸ると、『さうぢやない。實は、年輪五百以上もある稀代の古木の碁盤がある』といふ『ハハン、碁盤か。碁盤なざア』と一同氣の抜けた面つき。

○だが、朝倉氏は、頭山翁と犬養翁とが、どつちも目尻を下げとるのを見て、近々兩翁に對局をさせ。勝つた方にうや〳〵しく授與することにしたさうだ。

○崖から落ちて腰を痛めた犬養翁、ニヤツとして、『ウフツ、その儀なら、もう俺のものに決つてゐる』、腰をさすつては、『フフ早く頭山に一泡吹かせてやりたいノウ』

× ×

○首相官邸で、婦人聯合會の幹部を招待し、席上藏相が例の緊縮演說をやつた。

○演說中に、『あなた方の浪費……』といふ文句が、頻りに飛び出した。グツと柳眉に逆立て給ふお方も多かつた。藏相降壇すると久布白女史など、『私など、生まれてからマダ、お白粉といふものを用ゐた事がありませぬ。ソコになると、殿方は、酒代十五億圓、遊興費二億五千萬圓、ちとお氣をおつけ遊ばしては……』、舌鋒當るべからず。各大臣顏見合せて、『ウ……』

野球往來

てば萬止むを得なかつたのだ。都市對抗戰にどのティームも單獨に行かないとなると結局棄權の外方

紀、前々世紀の遺物を、平氣な顏して大道にさらし歩いても、多くの人は何とも思はぬ。

○いづれ一流の麗筆で、『世界名山比較論』が出ることだらう。

『ウ……』

京城雜筆

野球往來

丸中德三（殖産銀行）

A、涼しくなつたね、シーズンが來て又餘技の野球で忙がしい事だらう。

B、變な物の言ひ方をするね、餘技の野球つて無理に餘技に力を入れて言はないでもいゝぢあないか、餘技だなんて初めから解りきつてゐる。

A、併しお前はその解りきつた事が混同され勝ちなのに氣を腐らして餘技だ餘技だと絶叫してゐるではないか、それで俺も『餘技』なる形容詞をくつつけることに習慣づけられたのだ、寧ろお前の感化が斯く言はしめたのだから感謝されても叱言を言はれる筋合のものではないぢあないか。

B、堀てるな、處で今日は何の話をしようか。

A、高く止まるない、お前に何の話が出來るか?、趣味も狹く、いや殆んど無いと言つてもいいぢあないか。それに話も下手な癖に大きく構えて何の話をしやうかなんて笑はせるな。お前は矢張野球の話をしてゐれば間違がない。そうして、それが聽手としての俺に最も意屈さを感じさせない唯一のものだよ。他の話は皆居眠りものだ。まあそう憤つた面をするな。

B、お前には敵はない、毒舌家のモデル見たいな奴だな。

A、何んでもいいよ、秋期リーグ戰に就いて話せよ。

B、リーグ戰のことは當分待つてくれ。

A、立場上か、強いか弱いかの話位したつていいぢあないか。

B、それなら殖銀が一等強いかも知れんぞ。已惚と笑えば笑えだ

A、そんな言ひ方をすると俺は殖銀が一番弱いかも知れんぞと皮肉くり度くなる。

B、想像は御勝手に。

A、案外あつさりしてゐるなあ時に十月三日から催される體育大會に大連滿倶の來城が確定し、東京倶樂部の來訪が噂されてゐる。そうすると、東京日日主催の都市對抗野球戰に於けるビッグスリーの試合振りが見られるといふものだ。處で大連滿倶、東京倶樂部の相手としては當然全京城軍といふ事になるね。いや見ないうちから痛快至極。……あゝ覇權は何處え!!といふところだねい。

B、やに喋るね、大連滿倶と東京倶樂部の來訪した時の相手は何づれ決定するだらうが恐らく全京城ではあるまい。尠くとも實業聯盟に相手方の選定を依頼された時はね……大連が凄いと言つたつて東京が強いと言つたつて何も全京城を再び組織する必要もあるまい東京日日主催の都市對抗戰に全京城を組織して送つたのと今度の體育大會の場合は全く違ふ。

この全京城を組織したに就てはベースボールの理解者には相當論議はあつた。あの場合の空氣としては萬止むを得なかつたのだ。都市對抗戰にどのティームも單獨に行かないとなると結局棄權の外方法がない。棄權!!非常にあつさりして宜しい。男性的だ。然も棄權した後に起るべき問題は何か?、お前には解つてゐるだらう。更にだ朝鮮球界の將來に對する待望、更に更にだ、東日社の輝かしい意圖を思つては棄權する事は出來なかつたのだ。世の嘲笑罵言は覺悟の前だつた、そうして今回限り組織したのだ。

A、理屈を言ふな、そんなに堅苦しい事を言はずに都市としての名譽のために今回限りをもう一度やつて見てくれないか。俺達は京城が勝つてくれゝばいいのだ。

B、見る方ではよいだらうが、ベースボールの倫理は嚴然として我々に迫つてゐる。野球競技が名人上手を臨時に網羅することに依つて必然的に勝ち得るといふ考は間違つてゐる。間違つてゐないのなら、名人上手の集まつた東京倶樂部は何故都市對抗に敗れるのだ團體競技に必要なのは感激なのだそうしてその各人の異常な感激が釀すファイティングスピリットなのだ。そうしてこれが飽和點に達した時はティームワークも易々たるものだ。成程名人上手を各ティームからピックアップしたら強いかも知れない、否強いだらう。がベースボールの倫理は嚴然として控えてゐる。もつと現實的な問題を論じて見よう。例を京城實業聯盟に採ることにする。聯盟には五つのティームが包含されてゐる。そうして互に聯盟戰をやつてゐる全京城を組織するとなると、これらのティームを一時的にもせよ解體することになる。

るべからず。各大臣顔見合せて、

京城雜筆

A、待て、全京城を組織したからと言つてテイームの解體とは直ぐ言へない、洩れた人は互に練習したらいい、大京城のためといふ意識に燃えたらその位のことは出來さうなものだ。

B、處がだ、それはプレーヤーといふものを神樣扱にした言だよさき程言つた感激といふものは一週間や二週間の寄合世帶では釀されるものではない。

A、……。

B、一時的にもせよ解體さして全京城を組織するといふことは既製テイームの存在といふものの必要を無くする。極言かも知れないが全京城を度々組織することに依つて各單獨テイームを潰滅に導くことになる。尠くとも各テイームの內容低下は免れない。

A、それは餘りに偏見だ。

B、と言ふだらうと思つた。が眞の理解者でない君には解るまい……。で僕が殖銀の監督をしてゐる間は斷じて再び全京城軍を組織するといふ事には贊成しないよ。名人上手は居なくとも、感激性に富んだテイームを京城代表として推薦するに僕は躊躇しない。

A、そうすると樂しみにしてゐた全京城と大連滿倶との對戰は見られない譯だねえ。

B、何と愚痴られても僕は動かない。（九、一〇鐵道對殖銀のドロンゲームの夜）

社長　高橋章之助
朝鮮　教育新聞
發行所　京城西小門　教育新聞社

短詩（麗の會）

○　鈴木芹郎
生れて吾子の首さだまらね秋風ふき

○　桑名晴葉
朝なかよふ山の蒲草が熟れて來た

○　早川草仙
雨來ればくるにて庭木茂りのくらく

○　森內杣男
日蔭となり山あい水車まはる

○　泉谷秋蘿
秋のけはひ桑摘む夕べの冷えて

○　岩淵山與水
夕べを月の洪水折れすゝき穗にでゝ風が

◇國太公の眦

北漢山人

○朝鮮宮廷秘話『國太公の眦』といふのは、細井肇氏の新著である。

○著者は、これまで論文家、論策家として、名聲を博し。著者がかりそめにも創作、小說樣のものを書かうとは思はなかつた。が、本書は、全く小說創作樣のもの。劈頭から『セリフ』に始まつてゐるのは、實に珍らしい。

○しかも、著者がこの新しい試みを、如何に巧妙に、或は如何に拙劣に、コナシてゐるかは、我々の最も深い興味を持つた點だ。しかも著者の燃えるやうな熱筆は、グン〳〵我々を牽引し、通卷三百餘頁を一氣に快讀せしめねば已まない。大成功といつてよからう。

○國太公とは、大院君のことだ著者は、大院君と閔妃とを、朝鮮男女の模型的人格體とし、その權力爭奪、骨肉陷穽、閨閣靡爛の狀を描くこと、實に精刻且つ深詳。時として凄慘、目を掩はしむるものがある。しかも一々事實に即し欄外に參考、考證を添付したなど實に周到、親切を極めてゐる。

○單に讀物としても、實におもしろい書物である。敢て本誌讀者の御一讀を慫慂する。

（定價金貳圓）

大浦貫道師著
死線に立つ
（新刊、價貳圓）
京城南米倉町
心の友社

ステイトメント式のものを出して寢臺にもがいてゐたこともある。

新聞人秘話（二）

楠五郎
（大阪毎日支局）

箱乘り

余り人聞きのよい名稱でもないが『箱乘り』といふ受持ちがある列車に乘り込んで目的の人を探し出して訪問談をとるのである。政治記者もやれば社會部記者もやるだれが考へだしたか知らないが目的の人を確實に訪問出來るよい方法である。近頃では箱乘諸君の訓練よろしきを得て如何なる高位高官の人々でも車中にさへ訪へば樂々と面會することが出來る。私の經驗では日本の政治家で列車中に訪問して會へないのは西園寺陶庵公だけである。倉富樞府議長の如き職責上、苟しくも政治問題や時局に關しては一口も新聞記者に自己の意志を打開けることの出來ない人でも、心よく面談はする。たゞしだ、一言半句も、それらの問題に觸れない、うつかり談じ込むものなら修身の先生にでも出會つたやうに逆に長々と說教される、しかし倉富さんなんかは箱乘記者にとつては氣持ちのよい明るい感じのする政治家である、疑獄事件で箱乘りの寫眞班記者に追ひつめられて遂に東京から大阪まで列車の便所に納つて出ることの出來なかつた人もある、――これは本人にとつては不面目極まることだしそれに故人でもあるから姓名だけは、こゝでは書くことを遠慮する――松島事件のときの死んだ箕浦勝人翁だつて、あれだけの政治家で、東京から大阪へ引かれて來た態度なんかは、まるでお話にならなかつた、プラットホームに堂々降車することさへ出來ず、寢臺のハシゴで裏側へ降りて荷物同樣といふ有樣、會つて氣持ちよく、愛嬌はないが面接振りの實に堂々たるものは何といつても、濱口雄幸氏である、出雲名物どぢやう式にぬらりくらりと、よく話すが結局要領を得さゝないのは若槻禮次郎氏である、一言一句おろそかにせず實にハツキリした態度で否應を判然せしめるのは幣原喜重郎氏である。如何にも政治家としては幼稚園ものだと思はしめるものに久原遞相、山梨前朝鮮總督などがある。幼稚な記者には喜ばれるが幾度か會つて會ふ毎に次第に箔のはげる人に床次竹二郎氏がある、田中前首相なんかは箱乘記者が居らないと却つて旅行氣分が出ないといふ方の一人である、それでも議會で肥料の分配なんか問題になつた時分には、周圍の人々から禁制をしかれて、鳩山君作るところのステイトメント式のものを出して寢臺にもがいてゐたこともある。犬養老の如きは箱乘記者の味方である。新米の記者なんかが乘り込んで手帳でも出さうものなら新聞記者としてのたしなみを敎へる、總じて金ピカがうれしくて堪らぬほどの大臣は箱乘記者を歡迎するそして、『どうだ自分の民衆振りに感心したか……』といつた態度である、吹く〳〵大いに經綸を吹くが――それが實現もせず追々と窮地に陷る頃には、この箱乘りが何かにつけて、うるさくなる、それが野に降ると吾こそは天下の新聞記者諸君と共に天下國家を憂ふるものであるといつたそぶりをする、勝手至極なのは政治家と名のつく連中である。

號外詐欺

財物搾取を目的として發行する不思議な新聞(?)の存在がある。搾取財產と勞働財產とは自由交易時代の遺產相續のための戰の根底に横はるところの二つの財產形式である。新聞人にもし財產なるものありとすればそれは當然勞働財產によるべきもので、急進的に搾取によつて產をなす者あらうとは思はれない。新聞人が新聞といふ强力――それは決して常道において力のあるものではない、――を背景に財界において搾取をこと〻するなれば、文化の幼稚なる社會では恐るべき結果を齎すことがある。それが單に會社總會の論客であつたり、一料亭での御大盡であつたりする間は、まだしもだが、更らに進んで社會の紛爭をよろこび、秩序の紊亂をつけねらふに至つては全く沙汰のかぎりである。しかし不幸にして所謂『新聞人』

發行所 京城西小門 教育新聞社

心の友社

と世間で總稱されるものゝ中にはそうしたサモシイ心根のものも見出すのである。こゝに記する『號外詐欺』などもその極端な一例で吾々新聞人にとつては風かみにもおけぬシロ物がやつたのである。

『號外詐欺』の主人公は或地方での有力なる新聞の經營主である。會社の論客から身を起し、今では『瓦斯長屋』だとか『電氣長屋』『選擧長屋』だとか幾多の貸屋經營をしてゐる。茲にいふ『瓦斯長屋』とは瓦斯設備の特に完備してゐるために呼ばるゝ名稱ではなくして經營主が搾取財をかち得た財源の出所によつて、口さがない世間がかく名づけてゐるものである即ち『瓦斯長屋』は瓦斯會社の内紛に乘じて筆に口に、所謂手八丁口八丁といふ株主總會の大論客として活躍して不當にかち得たるところの搾取財産である。以下『電氣長屋』『選擧長屋』等々、何れも同一筆法によるものである。

關東震災のために東京の陸軍造兵工廠が灰燼に歸して、直後である、某新聞社は號外を發行して陸軍造兵工廠が、その社の所在する地方に移轉されることゝ内定したと報じた。まことしやかな報道である。世間で所謂思惑師といはれる奴は直ちに某社の新聞で内定したと報ぜられ寫眞まで掲載されたところの土地を思惑買ひした。たちまち地價は幾倍かに昂騰した。そのうちに『いよ〳〵内定』といつた號外が更らに續發された。その移轉豫定地といはるゝ土地は完全に思惑師に買收されてしまつたところが約一ヶ年を經て同じ新聞社が、また〳〵陸軍省の都合によつて移轉候補地は他に變更せられたる事を報じた。また〳〵土地思惑師の活動の開始となつた。話はこれだけであるが、その後吾々は『號外詐欺』といふ面白くない言葉を聞かされるやうになつた。取調べて見ると、某社が號外を發行する前に、その新聞社の經營主は他人の名義でそれ等の土地を盡く買收してゐたのである。そして地價の騰貴による差額は例によつて『號外長屋』と早變りしてゐたからである。

【一八】

◇世間はなし

北漢山人

○阿部無佛翁は、近代の傑僧仙崖和尚の風格を景仰し、その書畫翰墨を蒐集すること、實に四百五十點に及んだ、『天下廣しと雖も仙崖モノなら、先づ乃公かな……』、いよ〳〵以つて、アノ眼尻を、ズリ下げてゐました。

○一日、細川侯爵から、『一寸お出でを願ひたい』、無佛翁何事ならんと、早速參邸に及ぶと、アノ宏大な邸内、床といはず。壁間といはず。廊下といはず。懸けも掛けたり、悉くこれ仙崖モノぢやしかもその一粒々々が、實にえり抜きの逸品と來てゐる。『ウーム斯くとは知らなかつた。天下は廣いのう……』、茫々然たる肩を叩いたのは細川侯、『どうぢや……參つたか』、『ウーム、致し方もございません』、『降參ぢやらう……溫順に首を渡したがえゝぞ』

○ソコで、翌日無佛翁泣く〳〵二十餘年の蒐集品を、荷馬車に滿載。『いかすとも、殺すとも、どうぞお心のまゝに』

○今の阿部さんの邸宅は、この仙崖のお禮心に、細川侯が建てたもの、贈つたものぢやといふ。

× ×

○武術家の陣ノ内氏のお父うさんが、黄金町邊で骨董屋をしてゐる。

○或る日記者の先輩の某氏が、その店先に坐り込んで、漫談をやつてると、ソコへ西洋人の夫婦が來て、骨董をひやかす。陣ノ内老人顧で細君に、『オイ奥にあるアレを見せて上げなさい』、『でもそれアあんまり……』、『何、えゝつてえことよ。早く持つてお出で』

○細君の持つて來たのは、德川時代の殿中の或る秘畫だ。極彩色で、一見直に涎の垂れさうな逸品陣ノ内老人それをうや〳〵しく毛唐夫婦の前に擴げて見せる。オヽ毛唐夫婦の顏色?……。

○そこで、老人ニヤツとこつちを顧みて曰く、『エヘヘ……毛唐だつて、何だつて、こいつばかりは腹は立ちません』

將棋會

師範……辻六段
時日……毎週水曜
會場……美術倶樂部
會費……一個月二圓
御入會を歓迎す

水曜會

本町雜筆（三）

土師盛貞（遞信局）

商人道德二圓五十錢也

歐洲旅行の際日本から持つて行つて又持歸つた一つの中形のスウトケイスがある。獨乙から佛國に入る時身の廻りを輕くする爲にクツク社に賴んで送つて貰つた際鍵を添付して置かなかつたので稅關で蝶番の金具を取離したと見え、巴里で入手したときは無殘や何かで繃帶をしてゐた。此のスウトケイス中古で未だ充分使用も出來るので京城歸着後人に賴んで修繕にやつて貰つた。其れは昭和二年の夏か初秋頃と記憶する。然るに其後待てど暮らせど仲々出來上つて來ない、賴んで呉れた中間者に訊いて見ると其れは本町二丁目の或靴屋だが如何に催促しても渡して呉れぬと云ふ。結局の所昭和三年の夏頃になつて預り先で現物を紛失した事が明になつた。だらだらに一年位も引延ばされてから店の申し分によれば『御預りの現品と大體同樣の物を買つて貰ふ事にし但し價格は半額に割引にする』と云ふのだ。換言すれば店の責任で紛失した物品の損害を店と客とで共同負擔しやうといふのだ。隨分虫のいい案だが角立てて爭ふことも好ましくないし、其れに第一に漠然私の頭腦に浮むだのは其の店は屹度細々と看板を上げてゐる極く小さな靴店で困つてゐるのだらうといふ事を想像したので、新品を買ふなんて事はし度くないが同じ大きさで無くともいくら小型のスウトケイスでも構はぬから、自分の良心で氣がすむと思ふ物を寄越して貰ひ度いと言つてやつた。一には先方でどんな事をするか試みる樣な氣もあつた。

然し乍ら此の寬大な積りの提言も仲々實行して呉れぬ。どうせあきらめた鞄だから代價物などは何等氣にせぬけれども、一年餘りの期間を置いて尙ほ解決せぬのは一種の不愉快な感じもするので、店の横着と怠慢とを憤慨し乍ら、更に人を以て談じたら、遂に店から人を派して代價物なるものを持參して來た。『何でもいいとの御話しでしたから』と言つて置いて行つた一つの箱。後で明けて見るとスリッパが三足。附着の正札で定價を見ると三足計貳圓拾五錢也。成る程店の方で滿足する物と云つたから、勿論後で彼是抗議する意志は毛頭無かつたし又筋道としても店の措置に違法とか契約違反とかいふ樣な手落は無い譯だ。然し私が試驗的に檢分した該店舗の商業道德は金二圓十五錢也で此の點は聊かの感動を私に與へた。

漫然至極ささやかな貧乏店と想像してゐた其の店舗は、其の後發見した所に依れば思ひの外相當な店構えで矢張り普通の靴屋らしく靴もショウウインドウに飾り立て看板も勿體らしく出してゐる。其の前を通る毎にスリッパを思ひ出して苦笑を禁じ得なかつた。多くの本町商人が此んな調子だか如何か知らないが、此の出來事に依つて本町の一面觀が增加したやうな氣がする。

◈おもひ出草

漢江漁郎

○松田拓相は、今から十六七年前、一度朝鮮に遊んだことがある

○滯城中、或る人の案內で、コツソリ東部の樂天地へ發展した。スルト席をとり持つ仲居、何處をドウ勘違いしたものか、拓相を時の南部署長某氏と間違へた。『且那々々、且那は、あのう南部署の……でせう』、『ムム』、『そーら、あたいの眼はどうや……』、『ウム、狸のやうに光るのう』

○こんな事で、拓相大持テ……山海の珍味けおろか、特に樓中第一の尤物を擁して、『ウム、朝鮮は、トントえゝとこぢやのう』

○以來その佳人、頗る鼻が高く『ヘン、馬鹿におしでないよ、あたいのうしろに、ついてる人が、判りまへんか』

○ところが、十日ばかりして、その佳人何かの用事で、南部署へ呼ばれた。例の仲居同伴出頭してさてつく〳〵署長さんの顏を見ると、オーヤ……何から何まで、全くの別人ぢや。佳人ヨロ〳〵して『姐はん……どうしやう』、仲居三たび眼を擦つて、『ホンマに、けたいやナー』

【一九】

近事漫評

鼻の先に

現内閣が、整理緊縮の誠意を表現すべきもの――當代無用の長物の標本は、一に曰く、拓務省。二に曰く、政務次官。三に曰く、各省參與官。

いづれも濱口首相の、鼻の先きに、ブラづき居るものなり。

粥と梅干

何となく短命だらうと豫感せらるゝのは、この内閣だ。

『アレを喰つては、體に悪い』『コレを甜めては健康に害あり』先生年中素粥と梅干で『のりと』を唱へてゐるのが、現内閣のやうな氣がする。

お氣の毒だが、いつまで、持てますかな。

政友なし

賞勲局の總裁の醜態には、天下悉く啞然たり。

やつたものですナー。

但しこゝいらが、政友一味の空氣です。當情です。政然斧鉞を下したら、政友會といふものは、この世にないことになる。

光風霽月

『我輩の胸中は、光風霽月だ』と、自慢したる男あり。

胸中は、光風霽月かも知らんが行爲には一寸おかしきところあり取調べられるとか、られたとかの飛說紛々。

光風霽月、何の自慢になるものか。天下の平民は、いつでも光風霽月だ。つまらぬことを、申す男かな。

名總督

齊藤總督といへば、我々が呼んで、名總督となすばかりでなく、外國人も、夙に名總督を以て、敬重してゐたのです。

名總督々々々。……これは、名總督の名譽であるばかりでなく、朝鮮の誇りにもなりませう。

但し四方八方から『神様々々』で拜まれては、流石の神様も、手も足も出ますまい。

私達の望むのは、齊藤總督が、名總督で封じ込まれぬことです。御神體のやうに、無爲寂寞であられぬことです。もう一箇の大政治家として、眞骨頭を現はさるゝことです。まことの御奉公を、心から始められることです。私達は、人間齊藤氏――一男子齊藤氏の、涙ぐましい御奉公振を、今度こそ拜見したいと思ひます。

朝鮮の金

朝鮮から內地へ移出する物資といへば、大體米一つではないかと思ふ。

それと反對に、大阪方面から、朝鮮へ搬入さるゝものは、その品目、數量、價格、實に莫大なものである。

そこで、我が朝鮮で、港灣を修築し、鐵道を整備し、道路を延長し、擴大し、專ら商路を完全にすることは、ツマリどういふ意味になります?。畢竟大阪商人のために、益々販路を利便にし、鮮內の金を、浚らえて行くのに、好都合にしてやる――いひ換へると『朝鮮に金をなくする方法』を、實行してゐることになる。

我々には、さう考へられる。これは、我々の偏見でせうか。

金の威光

此處に、一人の金持が居る。彼は、榮養佳良にして、でつぷりと肥大し。閑散なるがまゝに、頻りに巷衢に佳人を求め。上は、四十の大年增より、下は、十四五の美少女まで、ざつと大小三十名の愛妾を有す。

彼は、その精力を、大に誇りとし、それらの寵妾のために、新に銀座に幾萬坪の地所を購入し、ソコに堂々、宮殿まがいの大妾宅三十戸を、造建したと假定する。

一世は、恐らく駭然とするでせう。

但しこれだけのことをやつても法律は、警視廳は、『彼が彼自身の金を使ふ以上』一指をも加ふることはならぬ。

よつて、彼はます〳〵增長『この上は、太陽を西からのぞかして見たい』

しかし、一世は、指を銜へて、瞠若たる外はない。

今日役人の月給などは、實に安い。その勞力に比べ――殊に金持のノホホンさに比べ、阿呆らしさの限りだ。よつて、意志薄弱の徒は、ツイ〳〵贋道に墮つ。……一味のあはれさは、確にある。

金の威光にも――消費的方面にも――局限を附けることが、今日の一要務ではあるまいか。

飛行雜感

ういたるところに着陸場が、ひろげられて居るやうに見える。これは操縱士もそういつて居る。ある

取調べられるとか、られたとかの飛說紛々。

なります？。畢竟大阪商人のために、益々販路を利便にし、鮮內の

も——局限を附けることが、今日の一要務ではあるまいか。

飛行雜感

笠神志都延
（京城日報社）

五七十行の原稿を書き了つたのが午前の九時である。それからいつも社へ出勤する通りの服裝となり、ただカラ一本を上衣の內ポケットへ、安全かみそりのサックをチョッキのポケットへ、そこでステッキをついて太陽組と京城自働車とを乘りついで飛行場へ行つたそうして午後四時には大連のホテルにあり、一風呂あびてゆかたがけか何かで、ルーフガーデンに登り、日本酒を命じて好い心持になつて居た。そのへんの善友、惡友に電話をかけ散らし、大いにはしやぎまはつた末、ベットへ横はつて見ると何だか奇蹟のやうな氣がしてたまらない。けふがけふでなく、わが身がわが身でないのである。

× ×

さて次ぎの朝のことである……八時廿分美事な離陸をしました、と大連驛頭で午前九時の特急を待つて居るわたしを、見送つてくれた友人が、かう今日の歸還飛行のあざやかさを報告した。彼等はけふの二時には京城に着くのだ、わたしはあすの朝でなければ着かない。どうやらばか〳〵しくなつて來た。汽車が走り出して四十哩も速力がかかつて來ても、わたしの心甚だ樂しまぬ。原稿を書きたいにも動搖が劇しくて書きつらくてならない。飛行機上ならんにはとそぞろに空の旅がなつかしくなる

× ×

プロペラーが廻つて機が動き出す。タイヤが秋草を散々に蹂躙する。雨あがりの軟土がそれに粘着して、醜い姿だ。とそのタイヤが次第にスピードがかゝつて來るに從つて、だん〳〵きれいになるではないか。機體が宙に浮いて來るのである。そうしてタイヤの完全に秋草で拭ひ淸められた時が、すなはち羽化登仙の第一歩だ。しかもタイヤは空中でなほ隨力廻轉をやつて居る。そうして全く廻轉をやめたときが、すなはち場內を一廻して適當の高度に達したときでそれから機首を目的地に向けて飛翔するのである。目もさむるおもひだ。

× ×

もうそれからはタイヤを見ないがいい。タイヤを見て翼を見て、それから下界を見ると足のうらがむづ〳〵していけない。目を離つて地平線の彼方を見て、自然に眸裡に落ち來る——まことは登り來る——風望をすなほに眺めて居ると極めて平靜なものである。といつてそれも最初の十分か二十分に過ぎぬ。次ぎの十分二十分にはすぐいたづら心が湧いて出で脚跟直下を見るのが樂しくなる。

× ×

發動機に故障が起るか起らぬかどちらかといへば起りそうな氣がする。しかし空中から下界を見るついたるところに着陸場が、ひろげられて居るやうに見える。これは操縱士もそういつて居る。あるときある飛行機は發動機が欠落したのをブラ〳〵ぶら下げながら不時着をやつたそうだ。そのとき動かぬ發動機なら邪魔だからといつて、捨ててしまつたら、機は平衡を失して危險なのだそうだ。いはば發動機はきかなくなつても、くつついてさへ居れば安全なのである。しかし發動機がくつついてさへも居ないといふ故障が、空中に起るとは想像だもされない。

× ×

操縱室から時々紙片が落ちて來る。氣象を知らせたり、位置を知らせたりするためである。それが『たゞ今の雲中飛行は氣流が惡かつた』とあとからの報告はさもありなんさもそうづとうなづくだけだが、『これから雲の上を飛びます』と豫告を出されると、淡い不安にかられる。しかしこれは最初だからであらう。二度目からはこの種の淡い不安は、却て樂しい期待に變るかも知れない。とにかくこの紙片通報は機上唯一の指針であり慰安である。機上不安が——もしありとせば——その八割までは この紙片でいやされる。お札を持つよりこの紙片を尊信するこそ安全第一である。

× ×

飛行時間正味三時間半の間に、わたしは七絕が三、聯が二、十七字がまさに五十を得た。これは安全のたまものだらうか、不安の所產だらうか。由來機上にありては何となく浮々して居る。はしやぎたい氣である、要するにどうかして居る。だからとなると十七字を五十も並べるのは尋常の精神狀態

京城雜筆

ではないやうにもある。さりとて不安でこの大製作が出來るわけもあるまい。

× ×

機がエヤポケットに首を突つ込むと、ドツと落ちる感じが人體にする、一すぐらゐ落ちたと感じるしかしそれは少くも二十メートルはたしかに落ちて居るのだそうだ汽車や自働車に乘つて窓からのぞくと電柱、電柱、電柱。ポプラ、ポプラ、ポプラ、といふ詩的韻律が湧いて來る。機上ではそんなことはない。あるといふのはそれはうその皮だ。どこまで行つても悠々たり寛々たりである。それで居て時速百七十五キロなのだ。君たちとはテンで話がちがふ。

文章

飯島滋次郎（京城醫專）

ギシングの田園春秋のうちにクセノホンの文章の簡素で含蓄のあるを褒めて例をペルシヤ遠征記から引用してある、敵地深く希臘兵の道案内した男、任はて〻さま〴〵の贈物を希臘兵より受け、その場を立去る條を描いて

『日暮れたれば彼男は我等に暇乞いて夜の道を行けり』

と簡潔にしかし暗示的に日沒して荒涼たるアジアの風景のうちを金財布を提げて行く男の運命を描く技量を賞讃してゐる。

大体が解剖的な洋文脈に較べてこう云ふ風の美しく暗示的に富んだ文體は東洋的と云つてもよいくらいである。我等はいくらも漢文にその例を見出すからである。碧巖錄のうちには僅少の概念で描かれ、人物を立體的に感じさせるやうな文章が隨所にあるし、野村朱鱗洞氏の句は前のやうな小說的境地を明るく爽やかに描いてゐる。

草鞋はきしめ瞬くらく出でゆけり

簡素で含蓄ある文と云ふのは外形だけで內容は複雜な要素が含まれてゐるから日光のやうな白文である、分解すれば七色の色彩が含まれてゐると或人が云つた。

大浦貫道主宰
『心の友』
南米倉町二一六

◇政界遠望記

三木一彥

○濱口首相は、酒も、煙草も喫まぬ。耶蘇の信者といふ譯ではない。音聲を惡くせぬためである。」良い演說をする奧床しい？心掛けぢやさうな。

○中橋理庵老……明治十九年判事試補を拜命して以來、この間まで、丁度恩給年限に達する。爾今毎年二千七百二十圓づゝ、御支給に預りたいと、請求書を出したさうな。この古狸……存外藝はこまこうござる。

○中野正剛次官、仙石總裁を訪問して、滔々滿蒙政策を說き、さて友人某を、滿日社長に推薦しやうとすると、この時クワツと眼を見開いた仙石老『エヽ、ツベコベとよく饒舌り居るのう。忙しい！あッちへ行け〳〵』

○犬養木堂翁が、輕井澤の別莊で、崖から落ちて負傷した。澤山の見舞電報の中に、『謹んで御負傷を祝す』といふのがある。日本一の惡舌家も、これには『ムムーン』と一聲唸つた。發信人は、日本ビールの馬越翁。その寫味今に至つて、發信人にも不明。

○宇垣さんの『陸軍整理』は大變な好評であつたが、近頃シカとした所をよく聞くと『陸軍充實』……近來ワッカリ感激出來ぬ。

借家でもしやうものなら、警察がやかましくて、『住み込みでなけ

要素が含まれてゐるから日光のやうな白文である、分解すれば七色の色彩が含まれてゐると或人が云つた。

○宇垣さんの『陸軍整理』は大變な好評であつたが、近頃シカとした所をよく聞くと『陸軍充實』……近來ワッカリ感激出來ぬ。

京城雜筆

女給なるが故

寺田壽夫（京城日報社）

○

このごろ、カフエー問題が、新聞や雜誌で、いろ〳〵と論議されるやうになりました。ことに、この問題に油を注いだのは、大阪の商工會議所議員對カフエー組合の嗤み合ひでした。

○

會議所議員側では、現在大阪のカフエーは、著しく風紀が紊れてゐるから、社會風敎の上から見て徹底的取締を要し、ことによつては撲滅してもいゝといふ程度に强硬な意見を政府當局に具申したのでした。この威嚇に對してカフエー側では、當然反抗の氣勢をあげました。『風紀を紊すのは、君達ぢやないか。料理屋はどうした。藝妓はどうした。カフエーだけの取締は理不盡だ。まづ御手許から拜見しやう』と逆ねぢを食はせました。

○

赤い灯、靑い灯の『道頓堀行進曲』に唄はれてゐるとほり、大阪はカフエーの全盛時代を現出しております。それに伴つて風紀が紊れてゐることも事實でせう。で、適當な取締を施すことも必要でせうが、あまり極端になると、營業を壓迫することになり、女給の生活を脅すことにもなる。この痛いところへ問題が觸れたので、議員對カフエーの泥合戰にまで進んだことは、世間一般が認めて居るところでせう。

○

そこで、この問題を京城へ移し植えて見ると、やはり大體に於て似通つたところがあります。暴力團の取締、魔窟の取締、カフエーの取締等、このごろ本町署などの英斷的取締には敬意を表するに足るものがあります。まづカフエーは、數ケ月前から日本間營業止斷行を命ぜられました。そして今日では殆んど全部が、洋間椅子席に變りました。尤も、この日本間なるものは、京城特有といつていゝ位どこのカフエーでも、洋間と日本間を兼用してゐましたが、女給を口說くといつた連中は、得てこの日本間を利用するものが多いので當局でも、その點に眼をつけたのでせう。ところで、この日本間なるもの、多くは客間兼女給部屋であつて、住込み女給の寢室です。その寢室を取られたのだから、可哀相なのは女給連で、寢る部屋がないといふ有樣、尤も雇ひ主の方で、別に家を借りるなり、增築するなりすれば助かるのだが、營業のためには、女給の部屋なんか犧牲にしてもかまわないといつた向が多いのです。そこで、その日の營業が終へたら、女給達はテーブルを並べて、その上に寢るといつたところも尠くないさうです。

○

困つた揚句、どこかへ間借りか借家でもしやうものなら、警察がやかましくて、『住み込みでなければいけない』と來る。自分が働いて、自分の安息所を求めるに何の不都合もなささうなものだが、そこが、職業柄、女の弱さで、その筋の色眼鏡の光りが怖ろしい、『獨身女給が、通勤しては風紀を紊す』と來る。勿論さういつた危險性は伴ひ易いであらうが、それは甚だ人權の自由を蹂躙した話。それならば藝妓も、料理屋なり、券番なりに合宿させたらいかが、料理屋も洋間にしたらいかゞなど大阪もどきの議論が飛び出すであらう。

○

ことに、一寸したことではあるが、女給の外出に對する派出所巡査などの態度は、時々面白からぬことがある。何の必要もないのに交番へ引つぱりこんで、からかつて見たり、叱つて見たりする。それが、普通の職業婦人であれば、すぐ問題になるのだが、女給なるが故に泣寢入りの場合が多い。風紀取締りもいゝ。が、取締りに名を籍つて、不純な行爲を敢てするやうな警官などは、更に一層困りものですね。

社告

中川義勝

右の者不正行爲あり去る七月限り解雇致し候につき、御含み置き被下度候

京城雜筆社

京城雜筆

多見男さんのユウモア

片岡喜三郎
（元町小學校）

△今の世の中には物質と地位との慾望に忙殺されて心のひからびた人間がいくらもある。一生に一度もユウモアの趣を味つたこともなく洒落や諧謔一つ解する術も知らずに大官ぶつて大きな顔をしたり金持づらをしてふんぞり返つて得意がつてる人種が隨分多いやうである。われ〳〵は時には利害から超越して洒落氣分になつてゆつとりとなる必要があるやうに思ふどんな人でも一年に一ぺん位は光風霽月といふのが有り難いことであらうから。

△大學工場の製品としては多見男さんなんかはたしかに走りもの丶部であらう、至つて仲の悪い彼の兄さんは高等官三等で他の大學製並に月給取として鹿爪らしくやつてゐるのに彼は讀んでも飯の種になりそうもない本などを拵べて暮してゐる。

△多見男さんの書いたものは日常茶飯事のことを面白おかしく表現したまでのことで見やうによつては内容のない愚にもつかぬものであらう。本といふものは讀みさへすれば即効紙のやうに必ず知識慾を滿足させる効目のあるものであり金儲けの足しになるものだと思つてゐる人種には多見男さんのユウモアなど馬の糞ほども有り難くないであらう。

△ところが多見男さんの本はなか〳〵よく賣れるそうである。どの位賣れるか税務官吏でないからわからぬがそこは評判通りとしてなぜこんな暇つぶしの本がそんなに賣れるのかはともかくとして彼はそれによつて有名な男になつた有名が有り難い わけでもないが仲の悪い兄さんは形の上では立派な教育者だがちつとも有名でないのに彼の名は全國に可なり知れてゐる。彼はまた有名になると共に懷も暖くなつた。併し溫泉場を歩き廻つたりいろんなところへ出入するのでけちん坊の兄さんのやうには金はたまるまい。

△多見男さんは今『多見男さんユウモア全集』を出しつゝある。今のところ十四五册出たがどれもこれも似たり寄つたりで傑作など丶いふ上等品はない樣である。殊にユウモアと銘を打つてはあるがむしろ駄洒落といふ方が近い上に下卑たところもあつて若い女などにはいかゞと思ふところも大分ある。『ハルピン夜話』や『支那街の一夜』などはよく出來ては居るが情緒視察の段になると首をひねらせられる。『美しき君よ今夜はこれで歸るか』『我は抱く白鳥の君』など題からしていけない。

△多見男さんの本でも一ついけないのは自身の自慢話である。彼の自慢の種は日本一の美男子であるといふこと丶有名だといふことである。この二つが至るところに首を出してゐて見つともない。『學士樣ならお嫁にやろか』『大學出の兵隊さん』などが最も甚だしい。『溫泉場の女』などでも自惚根性をまる出しにしてゐるがあれじや人氣を落してしまふ。要するにユウモアとしてはとても生方さんや佐々木さんには及ばないやうである。

△多見男さんのユウモアに難くせをつければいくらもあるが併しまあかうした本がどし〳〵讀まれるのは結構なことである。あんまり上等でない彼の作品すらかうであるといふことが深い意味があるではなからうか。實は聞いたことはないのであるが。

先日京城のラヂオで三遊亭雛か

◈平民的の話

漢江漁郎

○兒玉政務總監は、勿體振らないといふ事と、氣輕く、平民的だといふので、概して評判はいゝ。

○が、時とすると、餘り平民的書生的で、部下の人々が、サンザ間誤づくこともあるさうだ。總監視察といふと、その道筋、その行先、いづれも警備の手を廻はし、水も漏らさぬ手配をする。が、御本尊そんなことは眼中になく、乘り出した自動車の中で、『チョイと××へ寄つて行く』、『イヤ△△へ顔を出す』と仰せられる。でそのたんび急遽手配の變更だ。遣り直しだ。一同汗だく〳〵。

× ×

○これは、滿鐵總裁の話。總裁の年俸と手當は、一ヶ年一萬八千圓。別に賞與が三十萬圓、モ一ツ機密費が三十萬圓。計六十一萬八千圓。

○『役人なんぞなるもんかい』と威張る黨人も、滿鐵と來ると、忽ちムニヤ〳〵〳〵。

落語

津田常男（遞信局）

震災前のことである。學校を卒業して上京してから日もまだ淺い晩春の薄ら雨が降る夕、神田の立花亭といふ寄席へ落語の名人會といふのを聞きに行つた。學生時代から持越の洋傘が未だ新調されないで、骨が一本折れて居た。下足を脱いで上ると、背後から下足番の鋭い聲がした。『骨一ちよう折れて居ます』といふやうなことを江戸前で叫ばれたのである。そば屋や鮨屋で聞くそれに似た聲は甚だ景氣がよいが、此の際は頗る面喰つた。骨の折れて居ることは先刻承知なんだから、何も態々素ッぱ抜いてくれなくてもよいのである。江戸ッ子は氣の廻し方も速い歸り際に因緣でも附けられん用心に一本利かした心算であつたらうけれど。

その立花も震災で燒けて了つた寺の御堂のやうな感じのする本郷の若竹も燒けた。震災前の七月末若竹で小さんの獨演會があるといふので聽きに行かうとして居たら長崎の方へ急に出張を命ぜられたので遂に行きそびれた儘震災にはなる。朝鮮へは來て了つた。三年前に上京したとき、伯父がそのときのことを覺えて居て、『どうだい落語は――』といつてくれたが『もう落語でもありません』と寄席へなんか行きたい氣は見せなかつた。事實自分の氣分もさうであつたが、落語そのものも次第に衰微したらしいことは演藝風聞錄なんどで聞かされる。

『小さんは天才である。あんな藝術家は滅多に出るものぢやない何時でも聞けると思ふから安つぽい感じがして、甚だ氣の毒だ。實は彼と時を同じうして生きてゐる我々は大變な仕合である。今から少し前に生れても小さんは聞けない少し後れても同樣だ――』之は與次郎の說であると同時に夏目さんの說であつたのであらう。『三四郎を讀んだのは小さんを聞く前であつたが、此の說は小さんの落語に一種の憧れを持たして居た。そのうち、小さんが地方巡業で鄉里へやつて來て獨演會を開いた。流石に大した人氣で大入滿員を占めた。このとき聞いたのが、小言幸兵衞、高砂や、碁どろなどであつたが、有名な『うどんや』は更にもつと後で、多分京都の南座の名人會か何かであつたやうに思ふ晩年には小さんも漸次老衰に傾いて下り坂になりかけたやうだが、先頃遂に隱退して了つたのは人の知る通りである。

三語樓が面白いといふので一時評判だつたが、それは藝が至つて居るといふよりも、目新らしい言葉を採り入れたりする點が受けたので、ほんとの深味のあるものになつて居るかどうか疑問である。金語樓の兵隊さんが面白いとかいつても、之も恐らく末稍的なものではなからうか。實は聞いたことはないのであるが。

先日京城のラヂオで三遊亭誰かの『小言幸兵衞』を聞いた。ラヂオでは、手振り身振りが見えんから、大分具合も違ふだらうが、とても小さんの演つたやうな味はない。少し荷が勝ち過ぎたといはなければならない。『古い方の羊かんを持つておいで』といふのに、『大正の羊かんを持つておいで』などは與太も甚だしい。洒落の心算なら氣の毒である。

元來落語は話の筋が問題ではない。それなら活字で讀んだつて知られる。しかし、落語の味が活字で盡きるなら所謂はなし家を要しない。サンデー毎日の落語などは恐らく副業的產物である。又落語のオチは話が終つたといふ符徵みたいなもので、オチに生命があるのではない。オチへ來る迄の經過に生命がある。つまり話全體が生きて居なければならぬのである。一つ一つ取り上げて見れば他愛もないやうなものだが、その間の拔けたやうなものが集つて一つの生命が構成されて居る。その生命を口先一つで掴み出すのが名人である。前時代からの落語の筋を追つて居るのでは落語は益時代から遠ざかつて行く。いつそ時代物といふことになればその氣で聞けるかも知れぬが、中途半端では始末が悪い。何處かに餘裕のあつた明治大正時代に或る意味で頂點に達しその時代の人心に適合して居た落語も、その儘の形では映畫、トーキー、ジャズ、レビューなどといつた刺戟の强いものが發達した、何事にもテンポの速い昭和時代に至つては衰微するのも致方はないであらう。

【一二五】

京城雜筆

此の頃流行るのは漫談である。漫談は雜誌や新聞の紙面は占めるが、高座へはまだ上らない。高座へ討つて出るべき性質のものでないでもあらうが、それだけに孵化し切らない點もある。一面又それだけに新味がある。新味があるといふのは何處かに頭腦の背景が潜んで居ることを意味するが、餘り責任のかゝらない放言で、一種の息抜きである點は、落語とその發生の動機に於ては似て居るやうでもある。落語が漫談と合流すると一種の更生が出來るかとも思はれるが、それは今の落語家には一寸望み得ないことであらう。漫談家は勿論進んでそちらの方へ行かうとは言ふまい。そんなことに拂はれる努力?があつたら、それはもつと異つた方面に向けられるだらう。だから滅ぶものは滅んで、起るものが起つて行くだけのことである、こんなことを書いたとて、何も今更落語なんかに力癇を入れる義理も興味もなかつたのだが、ラヂオなんかと輕蔑しても、その實は寄席の高座よりも、ひよつとしたら大切な御客樣にならなければならぬやうな、有機的關係が兩者の間に出來るとすれば新時代の舞臺と內容とを具備した新式の落語といふやうなものも產れて來てもよいやうな氣がする。

をり〳〵に

松村桃代（大和町官舍）

○

しら〳〵と朝づき來れば草群に鳴きつぐ虫は細まりにけり

○

日のひかりうす〳〵さして朝庭にサルビヤの花は花ざかりかも

○

みちのくの鳴瀨の川の川上に逐ひし螢上今は生れなむ

○

ハンケチに螢を入れてよろこびぬ幼き時も我れはかくせし

○

山ゆ吹く風は伽藍に居る僧の衣手かへし吹き過ぐるなり

○

數多き螢明はつぎつぎ曾たてて消えむとすなり更けにけらしも

○

ひくき枝に蟬なき居れとまぎれざる松風の音に耳かたむけぬ

◇聞くがまゝ

漢江漁郎

○この間プロ派の創作家中西伊之助君が、入城してゐたが、その中西君の話……。

○岡山へ行つて、山陽新報の主筆某氏を訪ねると、その人暫らく自分（中西）の顏を、ジロ〳〵打眺めた後、『あなたの中西伊之助といふのは、ヨモヤ嘘、いつはりではありますまいネ』、中西君仰天して『それア一體どういふ理由です』と訊くと、實は中西伊之助といつて、もう三年もこの岡山に住んでるものがある。しかも著書の出版されるたび、一册づゝ我々にそれを呉れる。疑ふ餘地がない學生などは、先生〳〵といつてその男をとり圍いてゐる。『私（主筆）も實に判斷に迷ふ……』

○私も判斷に迷ふのみならず、斯うなつてはホン物も、ホン物といふ證明は、さて出來ない。ソコで、中西君ツルリと頭を撫でゝ、『殺生な奴だナー……同じ名乘るなら、モット有名な奴を名乘ればいゝに』

震災ばなし

て見るのである。

その年は『おれは河原の枯れ芒同じお前も枯れ芒、どうせ二人は

震災ばなし

浦田誠道（辯護士）

◇今は早や六年の昔となり了んぬ、私は彼の地獄なりし慘害に遭遇した避難民即ち危ひ命を助かつた一人である、その私すらが自らその苦難のありし事實を忘れかけてゐる。

然しそれは忘れてはならない事變である、のどもと過ぎた熱さとしてケロリ閑としては居られない事變であつた。

三伏の暑さが人々をアエがしむる年毎の夏に私は彼の地獄なりし慘禍を想ひ起す、そして額の汗をふき乍ら痩せ腕に力コブを入れて見るのである。

◇あの頃遭難者の凡てが開口一齊に言つたものであつた、ゼイタクはしないぞ、衣物も二三枚……それも木綿で澤山だ、洋服も詰襟で結構、食物も澤庵味噌汁に麥飯で辛棒しよふ、電車や自動車にも乘らぬぞ……等々、それこそ悟りを開いた禪僧の如き徹底振りであつた。

若しその精神の張りが有らば濱口首相も事新らしく緊縮政策標榜の必要も無かつたであらふ、それがどうであるか僅か半年經つか經たぬ中に潮次帝都の復舊が進むに連れて人々の心理は全く一變し世の風潮は震災以前に數十倍の盛んなるゼイタク振りである。

◇華に就き、易きに走るは、人性の常で有れば致し方も無い事とは謂へ、刹那の享樂に甘へて遠き慮無き國民に對し如何に名論を以て實に就き勤險産を治めよと說いても夫は無駄である。

然し天意に偶然は無いものとするならば近年の慨かはしい天下の風潮に對し天譴の來らざる理由は無い、『大日本帝國は神國なり』その神國で有るが故に、神の愛憐有るが故にこその天譴である、それも無くなつたら世は末である。恐れ謹しむ所に社會國家の未遠き榮は招來され奢りたかぶる時に衰兆はきざす……之れ天則である。人力の及ばぬ大字宙の威力である

◇さて其の年は今年の如く馬鹿暑い年で有つた、秋風も立たふと言ふに何と憎たらしく暑い年で有つたか、數多い下町の貧民街ではお神さん達が腰卷一枚で水道傍で轉り乍ら洗濯をして居た、諸官廳の役人達は涎を流して居眠りの出端で有つた、神田橋や飯田橋の柳陰には荷馬が首を伸ばして大息をついて居り、山手町の留守宅では奥さんも書生も暑さでボンヤリ座り込んでゐる最中で有る。一帶に斯く氣も魂もヨロ〳〵してゐたその時にドガンを來たのである。驚天動地文字其儘で有る、虚を突かれた人間の吃驚仰天するのは當然だつた。

◇私は今事新らしく震災の實情を記そうとは思はない、その遭難に因つて私の痛感した感じの種々相を少し許り記憶の中から手繰つて見るのである。

その年は『おれは河原の枯れ芒同じお前も枯れ芒、どうせ二人は此の世では、花の咲かない枯れすゝき……』と言ふ歌詞も曲譜も亡國じみた哀れな歌の流行した年で有つた。露伴先生が『卑弱哀傷、人をして厭惡の感をいだかしむ』と評せられた歌である、橋上に杜鵑の聲を聞いて天下の形勢をさとると言ふにはあらねども、枯れ芒の哀歌と震災との關係を後世の史家は何と考證するであらふか！。

◇第一に遭難者達を困難ならしめたのは水と食物と光りの欠乏で有つた。

我々文明都市に住む者は水道の栓をねじりさへすれば水は何時でもジャー〳〵出るものと考へてゐる、然しその水道にしても我々が考へる程頼りにならぬものであることは洪水旱魃でも直に斷水騒ぎをやらねばならぬし水道管の何處かゞ破裂でもしたら又斷水であるまして這次の大地震の樣なのに出遇したが最後忽ちにして一滴も水は得られなくなるのである、而かも人の命にとつて水程欠くべからざるものは無い、そこで代りの水を求めよふとしても川には遠し、井戸は乏し……恐らく水の欠乏を痛感しなかつた人は無いであらふ。

◇次には食物の欠乏であつた、我々都會人の常食とする米は一般小賣商人の手を通じて日々必要な分量だけ宛配給されてゐる、その小商人の手元にも日々配給に必要な分量だけが用意されてゐるに止るのであるから、一旦定量以上の不時の需要が起ると忽ちにして米不足を來たすのである。そしてその配給秩序の破壞された狀態が曲

ひくき枝に蟬なき居れとまぎれさる秋風の音に耳かたむけぬ

『殺生な奴だナー……同じ名乘るなら、モット有名な奴を名乘ればいゝに』

京城雜筆

りなりにも回復されるのに一週間や十日は少くとも要してゐる。

若しも彼の大震災が全國的で有つたとしたらどうであらふ、我々は餓死の慘をも亦加へなければならなかつたであらふ。

幸にして全國各地の人達の同情と敏活なる供給の恩により餓死の悲しみは見ずして濟んだ、それでも十日や二週間米を口にしなかつた人は夥だしいものである。

◇次には燈明の破壞であつた。之れも水道と同じく都市に住む人は電氣や瓦斯の利便に馴れてゐて其の送電裝置の破壞より來る暗黑の不便を知らない者が多い、我々は差し當りローソクを以て之に代へランプを備へるに至つたけれどローソクも亦、かゝる不時の用に供する程澤山の準備は雜貨屋には無いのである。

ランプなどは今日餘程山の中にでも行かなければ求められぬ、そして暗黑の夜にオビエ乍ら住んでゐる程、氣持の惡いものはないのであつた。

かく擧げ來れば文明都市、否文明の利便と言ふものは如何にも底力の無い賴り無いものの如く思はれて私は寧ろ文明と言ふものを嘲笑したくなつた。

◇通信機關……交通機關……それ等のものも亦天帝の猛威の前には只一つの麗クズにしか當らないものである。

その麗クズにも等しい機械を絕對のものとして人類はそれに賴り切つて居るのである。

そしてその賴り賴む多年の慣習に馴るゝ時我々の足は退化しつゝある。

それでいゝと斷言し得る人も有らふけれど、私には首肯出來難い醫師に賴る人が處方箋を煎じて飲むと同じい愚を笑ひ得る心持を以て自ら災難に遭遇した積りで考へなければならないと思ふのである

◇文明……それは物質的に便利な世の中であると言ふのでいゝと私は考へる、少くとも今日の文明はそうであると思はれる。

然し乍らその文明は一朝大宇宙の嚇怒に遭へば屁の突つ張りにもなるものでない。

我々は常にその覺束ない文明の世の中に住むでゐるのである。

◇その年の九月七日、傾いた家の椽先に夕暮れの空をツク〳〵シの聲が流れた。

つく〳〵し秋になりぬとなき居れり此の慘虐をよそにみなして

同じ年の十月十五日、同じ家の庭隅に一個のカタツムリがノソ〳〵と歩いて居た。

人達は自ら造し家に壓し殺され
自ら燃やした火に燒かれ
住むに家なく
雨露にそぼぬれて
戰々競々としてゐるのに
庭の隅のカタツムリ奴！
石の陰をのそ〳〵と
家を背負ふて何處へ行く！

私は變哲もない此んな文句を綴つて見ては獨りで苦笑して居つた。

鰻丼 五拾錢
お壽司
定評あり 先づ御試 食願上候
本町五丁目 阿波文
（電本一八三七）

【二八】

此の面白くもない震災話しを又の機會に私は結末をつけることにしたいと思ふ（四、八、十五）

◇法曹風聞記

漢江漁郎

○辯護士の山口均四郎氏は、昔京城覆審法院の部長判事として、頗る令聞があつた。

○ところが、どういふ都合か、俄に咸興地方法院といふトテツもないところへ、轉任を命ぜられた……。どうも骨が硬くて、ハタのものが都合が惡いといふ風評もあつた。

○兎に角咸興へ行つた。……そして在朝在野の法友に、挨拶狀を送つた。ところで、面白いのは、その末尾に添へた自嘲の一句、

馬の脚檀舞臺を踏み外づし

○『いづれ罷めるだらう』との評判たつたが、果然冠を掛けて京城にもどり、今のところで、辯護士を始めたのである。

× ×

○八月號の雜筆を讀んだものは皆クスッと笑ふ。『何がおかしいのです』といふと、山口氏の『腰臺奇觀』を指し、『君……この七號の寢臺から、痛快無比の罵倒を浴せる男。蓋し夫子御自身ぢやらうぜ。ウフツ、こんな先生は、世の中にザラにはないからノウ』

片岡喜三郎氏著
隨筆 神仙爐
（目下印刷中）

てゐる。日本でいへば、丁度元祿から寶永の頃に當る時代の人の議論として、推稱に値する點が少く

讀史漫錄（六）

中村榮孝
（朝鮮史編修會）

潮と汐

潮はさしほ、汐はひきしほ、潮汐の差の大きいので朝鮮西海岸は有名であるが、東海岸はこれに反して著しくない。この現象は、朝鮮でも既に古くから注意して、東海岸に潮汐のないのは何によるかといふことが考へられてゐる。

光海君から仁祖の頃即ち今から三百年程前に張維といふ人があつた。號を谿谷といひ月沙李廷龜の門人で、朱子學者ではあるが老佛の氣趣を混じた學風を持してゐたこの人にはその殘する四年前（仁祖十三年）に出來た『谿谷漫筆』といふ隨筆がある。その中に東海の潮汐を說いた一節があつた。その要旨はかうである。朝鮮の東海に潮汐の無いのについて昔の人は何ともいつてゐない。自分は嘗て其の理を考へて見たが中々思ひつかなかつた。しかしよく考へて見ると、これは東海に潮汐が無いのではなくて、北海に無いとせねばならない。何となれば、既に先輩が、潮汐は地の喘息（エキ）だといつてゐるが、人が喘息ぐ時は腹が動いて背が動かない、ところが地勢は北を背とし、南を腹となし朝鮮の東海は朝鮮としては東方といつてゐるが、天下といふものを標準に論ずれば東北隅に當り、北に近いのであるから、其の海は北海の一部で、從つて地の背に相當してゐて地の喘息のために動くことがないのである。これによつて推論すると、西域の西でも北に近い海は朝鮮の東海と同じやうに潮汐がないであらう。北海は人の行かないところであるから潮汐の有無は知りやうもないが、理論としてかう考へるのである。聞見の及び得ないものは、これを理論に求めねば、知ることが出來ない。

谿谷に先だつて宣祖から光海君時代の名臣李恒福（號は白沙）も既に東海潮汐なき所以を說いてゐるその論は、東海は水の歸する所であつて、既に歸する所があり氣に隨つて竭きざるを得ないから潮を成さないのだといふのである。

この後仁祖の時に生れ、肅宗朝の大臣になつた、金萬重（號は西浦）といふ人は、西洋の地史の說をも引き、廣く海灣水流の形勢を論じて谿谷と白沙との兩說の不備を批判し、ただ兩方とも其地勢の然らしめる所だとする點は、疑ふことは出來ないが、朝鮮の人は見る所が小で、いつも一班を以て全豹を論じようとする弊があり、李張兩公の博雅を以てしてさへこれを免れないといつて嘆じてゐる。しかし谿谷が地が海を載せてゐるといふ見解を立てたのは、遙かに古人より卓出してゐるといつて激賞した。これは、萬重の『西浦漫筆』に見えてゐるが、この頃としては極めて氣のきいた批評を下してゐる。日本でいへば、丁度元祿から寶永の頃に當る時代の人の議論として、推稱に値する點が少くない。

その後時代は下つて洋學も大分傳はつて來てから、純祖時代（日本の文化頃）の鄭東愈の隨筆たる『晝永編』を見ると、また潮汐に關して論及してゐる。そして或は日によるといひ、或は月によるといひ、或は地運によるといひ、或は人の呼吸の樣なものだといふが自分は嘗て湖西の海島、陸を距ること五六十里のところに行つた時ここは陸地に比して潮汐が著しくなかつたのを見たから、これによつて考へると潮は海が深ければ現れないものにちがひない。朝鮮の西海は支那の東海で、これはほんの浦港の大なるものに過ぎないが朝鮮の東海は海の最深處であるから、潮はないのであると論じてゐる。但しこれは强辭することは出來ないと特にことわりがいつてある。いづれにせよ、この人の言ふ所は外れてゐるが、その實際見た事を論據にしてゐる點は面白い。

かくして潮と汐とは謎のままで最近に及んだわけである。迷信の强い朝鮮で三百年來この神秘的な現象に對して上述のやうな見解を下す人もゐたことを心强く思ふ。但しいづれも儒學者らしい支那風な考へ方をしてゐることは注意せねばならない。またこのやうな科學的な問題を擇んで朝鮮人の取扱ひ方を見るのも心がくべきことであらう。（昭和四年九月十日）

求職
中學卒業、身體强健、希望官廳、

キャラメルと朝日

池部義雄（李王職）

双肌ぬいで眞一文字、肥後守が丹田をねらつた時、

『マアお待ちなさい』

と、突然背後に銀鈴の聲、而して肩越しに緋の腰帶を投げかける。

氣合のぬけた顏で靜かに振り向けば、憎らしい程沈着いた廿歲前後の女性一人、麗容に笑みをたゝえて居る。

『ナゼとめる、邪魔立てすると道伴れだぞ』

『オホホ、若い身で自殺する程の人はモウ少し頭の冴えて居る筈だのに、案外メグリの惡るい人ネ』

『なんだと』

『ぢやありませんか、男は双物女は細帶、大抵道ゆきは判りさふなもの』

『フヽンさふか、成程此の腰帶さては君も淨土への旅仕度か、イヤこりや失敬。話せる人だ、マア座り玉へ』

『隨分現金ネ、道づれが出來たと思つて』

萌へ出づる大地一面の靑草の中に放り出された肥後守は凄く冷たく光つて居る。ソレに燃ゆるが如き紅の緋の帶の一端は風にもつれて戲れて居る。やがて男はポッケットより煙草を出して點火する。女は袂よりキャラメルを出してしやぶる。死點を凝視しつゝある二人としては、すべてを愚殺する皮肉振りである。

『時に君は、どうして自殺宗に歸依したのか、いづれトテシヤンが御難してモガの行詰りだらふ。玉を抱いて罪ありの類で』

『ソレが初對面の挨拶ですか、淸く出發しやうとする死前の妾に思ひ切つた侮辱の餞別ですネかふ見へても生まれたまゝの生地ですよ。貴下のやうに動きがとれんで追ひ込められたものとは違ひます』

聊か柳眉の氣壓は下る、男は吸殼を踏みつけ乍ら

『痛み入つた御返禮、ソレで侮辱は相殺？君が處女であり僕が童貞者であるとして、何にも尊重を意味する譯ではないが、ソレにしては君の態度がアマリに膽的だからネ、女としては』

『自殺の前にナンの不安がありますか、貴下の六感は餘程鈍いのネ、可愛さふに男のくせに』

『まいつた、確かに……では改めて貴女自殺の目的は』

『變ナ事を云ふ人、絕滅にナンの目的がありますか。唯フラ〳〵と其氣になつたまでです』

彼は二つ目のキャラメルの紙を剝いで居る。

『エライ舌鋒だつたが、フラ〳〵死讃は苦しいネ。生命は人間最後の一つの所有物だといふに……』

一寸冷嘗をくれて見ると、

『何が可笑しいです、フラ〳〵と生まれたものが、フラ〳〵と死ぬるのに、矛盾も滑稽もないぢやありませんか。もし又妾に死を撰ばねばならぬやふな理由があるとするなら、妾は死の前に一切を征服させて見せます。人間手製の責道具で、ヘイ左樣ならばと、死ぬる樣な卑怯ものではありません』

【三〇】

鼻息の荒さは女域を脫して居る。

『成程無理由に自殺せんとする程の勇氣ある君には、其說明は當然だらふ。それにしても代價なしのフラ〳〵自殺ナンテ恐らく空前絕後の一人者だネ』

褒貶不明にあしらへば

『だつてさふぢやありませんか代價とか、期待とかいふことは『死』そのものゝ尊嚴を傷くるもので、人間の最後に慾望を賭するなど、如何に見苦しい事ではありませんか。で妾はフラ〳〵自殺を禮讃します。而して妾は出發を淸めねばなりません』

と、女は袂から鹽の一包を出して若草の上にばらまく、

『奇想奇行共に天來？、實に面白いネ。が冷靜石の如き君にも一雫の戀愛を垂らしたなら、忽然として人間味に溫まるだらふナ』

一刷毛こすつて見ると烱眼忽ち血を彩りて

『ナニ戀愛ですつて、ソンナ並み扱は廢して下さい。もと〳〵戀愛とは何です『自然』が赤い舌を出し乍ら靑春者の門口で奏づる陶醉の曲ではありませんか種の存續策として親が子を愛するといふ事は『自然』の傑作の部に屬するか知らぬが、戀愛をその前置詞にするといふ事は、人間を愚弄するものではありま

せんか。尤も此期を利して肌觸りのイヽ樣に一寸人間を蹂めす

せんか。尤も此期を利して肌觸りのイヽ樣に一寸人間を蹂めす氣味はありますけれど』

『ナメスはよかつたネ、有名無名の戀死者は、君の評殺に地下でくしやみして居るだらふ。僕はまだ資格づけられないから戀愛觀には未だ野人の列だが、至上とか眞正とか呼びかけて、振りかざして居る大太刀は、ありやみんな竹光かネ』

細目でやんわりと伺ひを立つれば

『其點は妾だつて、戀愛の眞似ごともした事のない身ですけれど、世相の一般が裏書きして居るぢやありませんか。青年の異性達が血道を上げて戀愛〳〵と騒いでゐますが、さて彼等がどたん場となると、媒介者から五割かけの又聞丈けでついぞ見聞した事もない男女同志が、高砂の一謠でけりをつけるではありませんか。浴衣一枚買ふにも自分から漁り廻はるくせに、生涯一度の大禮は不見轉の取引です赤繩誤結惡因緣など丶出雲の神を横目で睨み乍ら、あり合せの器物位ナ氣分で不得已引かされて居るのではありませんか。戀愛々々つて徒らに高調した處で完全に之を收穫するものが世上果して幾人ありますか。皆な赤い舌に舐められて陶醉した罪ぢやないですか。人世に於ける戀愛と宗教は、方便上の戲作でこれ程不鮮明、不徹底なものはありません』

口元は優さしいが舌端は燃へて居る。

『成程、君の云ふ處はワンコツプの妙味はある。が不鮮明、不徹底、矛盾、滑稽、これ等のものが、文化を蠹食しつ丶並行してゆくから馬鹿にならない、況して運命なんて暗點現象でさへのさばつてる世の中だもの、二一天作の五になつたり三になつたり、ユトリのある處に攝理の力が隱れて居るのかも判らぬ』

話がや丶穩かに無風帶に入つたと思ひしが、

『それだと人生は、未來永劫に合理的淨化さる丶といふ事はないのでせふか。一切の不純を束にして攝理觀するやふな卑怯ものにはキツトさふ思はれるでせふ。東道者の聲も、尖端者の叫びも引かれ者の小唄か、異端者の呪ひと聞へるものでせふ。貴下は双物三昧せんとする劇合にこけ蒸す石？赤錆びの鈍刀？いづれにしても骨なしの海鼠男だネ』

冷罵氷の如く人間の屑あつかいされて居る。豈に逆鱗に觸れざらんやで、

『控へなさい女のくせに、現に君がキヤラメルをしやぶり、僕が煙草をのむ樣に、物的慾求でさへ相違がある。況して心相が一致せぬからとて傲慢な批判は慎むがイヽ、』

荒々しく取出した朝日を纏に吸はすれば

『では、貴下の肥後守は何にから割出したのですか』

これから彼女は横槍の入れ場を狙ふて居る。

『僕？僕は君と正反對に絶對的積極觀から出發したのだ。僕が壽命の今後五十年間に、人生行進相の變化は、歴然として心鏡に映じて居る。ナニも欠伸を嚙み殺して愚演の實際化を見る必はないからだ』

フフンと嘯いて居る品のイヽ鼻だけ一層キザだ。

『なんだか脫俗の燃へ殘りの臭がしますネ。だが札ビラの二三萬ふりかけたら水いらずに消火するでせふ』

『なんだと、札ビラだつて、沙汰の限りの毒評だネ。抑も札ビラとはなんだ。人間共が卑近なる文化の標的として地上に撒布した虚性の興奮劑ぢやないか。これあるが爲めに、すべては惑亂せられ、混濁せられ、一切の生殺與奪が此無機物に掌握せら

本塲銘仙
毛糸各種
ちゝぶや
本町二丁目
（電話五〇五番）

京城雜筆

れ、ナニが人生の赤化劇といふてもこれが最大なる元兇であるもしも人生にこれさへなくば、人生は生一本に發育して病者もなければ罪人もなく、花鳥風月こゝろのまゝに遠ふの昔に樂園となつて居る筈だ』

觸れて居る丈け、流石の女もシンミリとなり、

『黃金つて、ソンナ使命ですか妾はまだその必要不必要を感じた事がないけれど、『力は金なり』とは人生の登錄語ではありませんか。それを文化の毒素呼ばりするものは恐らく貴下丈けの唯我獨見でせふ』

ポツ〳〵フラ〳〵死の敵討ちと見ゆる。

『だつて事實は雄辯だ、人間が盲目的に生きんとするのも死の瞬間まで札ビラが兩眼に蓋をするからだ。それ程物慾が灼熱して居り乍ら其生活振りはどふだだらしない浮調子で、肝甚のお膝下でさえ宵越しのカネは持たぬなど脫線の横綱格である。自ら進んで無產の穴を堀つて人生のむぐらもち見たやふな生活をしながら、まだカンピンの底を甜めてるぢやないか。人生はカネ〳〵と云つた處で完全に惠まれたものが幾人あるか。皆惑亂の飛沫に喘ぐ計りだ。人生に於ける呱呱の第一日から黃金と法律により拘束さるゝなど、これが、自己冒瀆でなくてなんである。生ける人間に對し死せる無機物が何の價がある。ソレは黃金でも金剛石でも、一椀の麥飯にも及ばぬ』

極論に緊張した男の眼は、蒼穹の一點を射つて居る。崇嚴なる態度を見ては流石は女である。其本性の優しさにかへつて

『人生から赤い戀と、黃い金とを除いたら、必らず夢のやふな色あいとなるでしやふ』

『成程此二つのものを直前に見つめつゝある目には、ソンナ誤想も湧くであらふか、それは無自覺者の杞憂だよ。元來『自然』は嚴肅に構へて居るが平凡だよ精密に組織して居るが簡明だよ宛かもパンとか飯とか特種の味性のないものが永久性の常食となり得るやふに、『自然』の眞相も其コツで人生に接觸して居るのだよ。それに人間が勝手に戀愛だの黃金だのを作つて、下らない濃度の色彩をなすり、而かも人間の尤大なる技工として得意然と誇つて居る。其くせ人間病のアラユル原因が、コゝに巢喰つて居る事を知らず、平和とか、不戰とか、裃を着けて千百の調印したからとて、此病源が除かんぬ限り、機會毎に人間は獸性に還元されて殺戮を繰り返へす丈けの事だ。實に馬鹿々々しい』

陽は川面に西斜する、男が最後の朝日をぬけば、女は和睦の意でマツチをすり乍ら、

『で貴下は、人間の早仕舞をなさるといふのですか』

『マアそんなものだ、コンナ牛步の如き人生の試錬期を送迎するには、僕の頭腦がアマりに先き走つて居るからだ』

『よく判りました、それで死後にも何か考想があるのですか』

『素よりだ、一度び大地より消えたる僕は直ちに宇宙行脚と出かけ、眞善なる天國に達した時始めて鞋の紐を解くのだ』

眞抒格で辯じて居るのに、彼女はキヤラメルの空き箱を指さきで廻はし乍ら、

『いづれ其國は、明け暮れ舞樂に興じて居る、月宮殿の所在地でせふ』

『凡察だネ、抑も僕が第二の足跡を印する處は、神化したる純人の群れだ。ソコには一片の兇器もなく、と云つて一抹の白粉もない。唯肉性の人は生產作業に任じ、天才の人は發見研究を以てこれに應じ、通貨則『力』であつて、玩具の如き札ビラもなければ、石コロに毛の生へたやふな金貨もない。恒久なる平和の裡に人間が感受し得らるゝ最大限の福祉に向つて、勇往邁進しつゝある處が、即ち僕の靈魂の安置どころだ』

豆鐵砲を食つた鳩然たりし彼女はやがて立て膝のチリを拂ふ。

『君、ドロに行く』

『一寸キヤラメルを買ひに』

『序に僕にも朝日を一つ』

◈筆のしづく

三木一彥

○安田善次郎翁の首ネツコを、グツと押え。豫て用意の短刀を、プスツと突き刺したのは、朝日平吾といふシタタカもの。

○その平吾の實弟——一誠といふのが、鹿北の浦項にゐる。但しこれは、壯士にあらず坊さんだ。

○その坊さんが、京城へ行つて勉强したいといつてゐる。畫面を大浦貫道師のとこに寄せた。

○大浦師曰く、『これは金持に頼まんならん。さて、どなたをお見立申上げたものか……』

を見ては流石は女である。其本性　眞打格で辯じて居るのに、彼女は　見立申上げたものか……』

かばやき
きんぷら

川長

旭町一丁目

茶いろ〜
茶器いろ〜
青々園茶舗
京城本町二丁目
（電話本局一二一番）

外科
皮膚科
瀬戸醫院
院長 瀬戸潔
京城旭町二ノ八
電話本局二四九八番

西洋料理
支那料理
泰明軒
東京 芝新櫻田町
紫雲院そば

お二人で一つの保險にはいれる然も保險料は普通の一人分餘ですむ
二人保險
東洋生命京城支店
一萬圓契約で八千五百圓の現金定期配當の外に普通配當がつきます
不老保險

M式卷上日覆
ホロ形日覆
各種テント
諸車用雨覆
非常袋
フトン袋
其他帆布製品
製作販賣
京城驛前
中西テント商會
電本二八四八

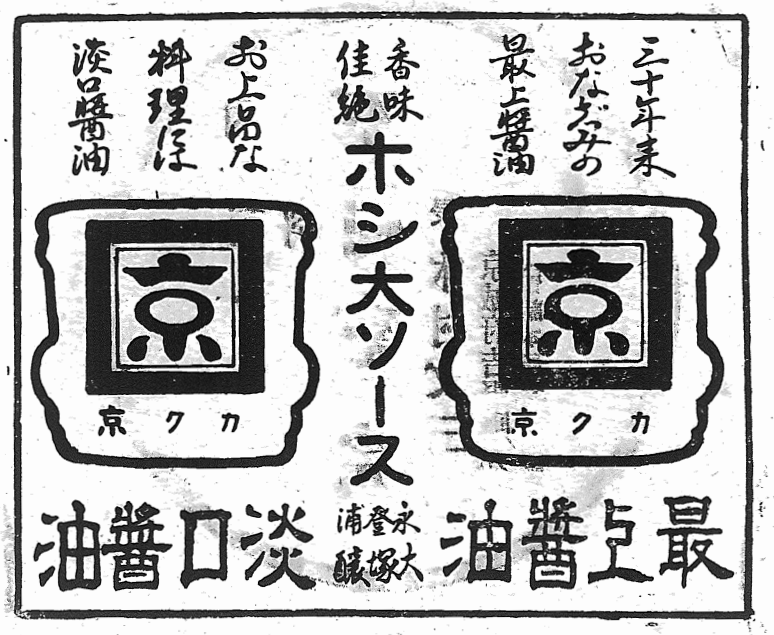
溫陽溫泉
神井舘
京城より三時間
新らしき樂天地

内科
小兒科
木村醫院
院長 木村文三郎
京城府吉野町九一
（電話本局七二五番）

京城本町二丁目
一番瀨醫院
院長 一番瀨慶次郎
（電話本四〇〇五番）

金物類
近藤商店
京城本町三ノ三三
電話本局一五六二番

合資會社
日章堂時計店
京城府本町二ノ七五
電話本局八七六番
振替京城一六九二二番



十格恰の男『あれがッエッペリンだ』と双眼鏡の力で決定を與へる

ツエ伯號を觀る

佐々木清之丞
（黄海道師範）

私は今松屋の屋上展望臺に立つてゐます。初秋の午後の日光ははげしく投げて、私の顔といはず背と云はず全身すべての所から油の樣な汗が流れ出ます。私ばかりでなし、私と一緒に數千人もゐます矢張同じ樣に汗を流して。おなじ松屋の屋上でも、私達と別な所にも多數ゐます。が、矢張汗に塗れて。松屋ばかりでなし、東京市内の屋根といふ屋根、物干、手すりすべて人間の上り得る場所なら、もうすつかり上り詰めて、眞に立錐の餘地もありません。『こんなに上つて屋根が落ちはしませんかもう暑くてたまらん、何どか日よけの工夫が無いか』、實に人間も勝手なものです。何も松屋はツエッペリン號見物のため特に案内狀を出してもなければ、かうした群集中手ぶら連が多いので、松屋はこのため直接何の利益もないらしい。利益無いどころか、屋上庭園の芝生や樹木などメチャ〳〵にされる、聽けば京坂地方からも態々來た人も多い樣です。

白木屋の屋上ではメカホーンで『只今どこまで來ました』など知らせてゐるらしい。『松屋もあゝした設備が必要でないか』など不足を言ひはじめる連中が前後左右に、而して初めは小聲だのが、次第に大きく恰も當然の主張の樣にしかしてそれが松屋の落度でもあるかの如く言ひ立てる。たまりかねたと見えて、高級店員らしい男兩手で口を圍んで『只今三時五十分小名の濱通過』と知らせましたが、直下の私達にはよう聞取れましたが、他へは徹底せんので『何グヅ〳〵する、もつとハツキリ』などいふ連中もある。

時計はもう四時三十二分です。あわたゞしいサイレンの唸りだ、屋上の人屋外の人途上の人、人といふ人一齊に空を仰いでソチラコチラへと視線を向けしめる。『あゝあれだ』といふ。見れば先行の飛行機でせう。三々五々隊を組んで秋のトンボのそれの如く東の上空かすかに見える。『やああれは飛行機じや、だましちやいかん』などどなる人もある。しかするうちに上空一點ポツチリと眩ゆき強き輝きが見えた。あれだらうかと私が言ひ出しますと、『あゝ光る〳〵あれかな』など群集漸く騷ぎ立てる。凝視するうちに光りが幾分か大きくしかしてそれがこちらへ進む樣に見える。間もなく光る部分が頓にいくらか廣く大きく見える。しかしそれが果してツエッペリンの正體なりや否の決定は容易に出來かねる。『何だろう變だ』など群集のどよめく内に光り物の體はやゝ大きく見えた。私は思はず手を拍つて『あゝ今方向を換へたのだ、あれはたしかにツエッペリンぞ』と叫ぶと豫て用意のよい、しかし聰明そうにも見えん五十格恰の男『あれがツエッペリンだ』と双眼鏡の力で決定を與へる群集『成程そうか、眞直に縱に進んで來た、それに日光がさしたので最初は一點の强い輝きと見えたのだなあ』と首肯き、始めて安心一同鳴を鎭めて只々此方へと飛ひ來るのを待つてゐます。時に四時三十八分、あの邊はたしか千住邊の上空でせう。

銀色の輝きは次第に大きく、唸りも次第に高く、しかしてこちへと次第に近づいて來ます。あゝ今日は航空史上記念すべき昭和四年——千九百二十九年の八月十九日です、帝都の處女空、雲淨うして天高く初秋の氣分既に充ち滿ちて海よりも青い紺碧の空に銀色の巨體が悠々浮んで、刻々我等に近づいて來ます。

氣の毒なのは私達の向ふを張つた連中、他の屋根へ上るは上つたものゝ、大煙突や他の建物が邪魔で一向見えんらしい。眞賞必罰立ろに至つたでは無からう。しかしかうした些事にも矢張自然の攝理犯すべからざるところに敬虔心を持たせて見たい。私達の方は頻りと拍手する歡喜に躍る。彼等は失望落膽『見えん見えん』と呻く。

空の巨體、東京驛全部の建物をば難なく呑み得るといふ怪物、銀色に光る實に偉大な魚形水雷的な巨體は威容堂々天空を壓しつゝ我等に近づき、私達の頭上にGRAF ZEPPLINの文字鮮かに見えるまでに飛んで來、飛んで行く。群集は期せずしてエッケナー博士、レーマン船長萬歲を連呼し野次連は『おとした〳〵、も一つドラモンド・ヘイ夫人萬歲』など騷ぎ立てる。屋上地上はたまた車上からした歡呼の沸きかへる帝都

京城雜筆

の空をば、悠々飛翔して四時四十五分には東京日々新聞社の直上約六百メートルの上空に、それから宮城の上をば二重橋を前にして最敬禮を表するもの丶如くやゝ頭を垂れて、尖頭六方形の金屬をば夕陽に輝かしつゝ愛宕山上をかすめて横濱へ向ひ、市上を一周して再び東京に引返し、五時二十七分帝都を後に霞ヶ浦を目指して悠揚飛び去つたので、屋上の群集何れも科學の威力に感歎吐息を漏らしつゝ地上へと下り、避雷針上羽ばたきする晩鴉の脊をば斜陽淋しそうに照してゐます。

あゝ待ちに待つた空の巨客ツェッペリン伯號は、今日しも我等の帝都たる東京の空へと飛び來り飛び去つて、大きい深い印象をば長く史上に印刻したのです。去八日の拂曉ニューヨークの平和の女神像を起點として世界一周の壯圖に就いたツェッペリン伯號は、一萬一千二千一キロを九十九時間と四十分で世界征空の偉績を擧げ得たのです。しかしこの巨客に依つて繫がれた日獨兩邦間の親交も亦、今後一層の深厚さを加へるものがあらう。

◈醫界風聞記

北漢山人

○池田病院長のお孃さんは、慶大小兒科新進の某博士のとこに嫁入つて居られる。

○二年前……その若御夫婦が、お父うさんを訪ねて、京城へ見へるといふ豫報があつた。子煩惱の院長『さア來るぞ〳〵』、仕事も手につかぬ位の大滿悅。

○『いよ〳〵來るとなると、二階が欲しい。ウン、早速棟梁を呼べ』、俄に新建築にとりかゝりました。

○その建築の最中、院長は一日棟梁の案内で、半竣工の二階へ上りました。そして階上から、つく〳〵階下を見おろしてゐた院長、愕然として、『オイ棟梁！、これア階下にも一ツ座敷が出來るぢやないか』、棟梁も肚贈を抜かれた『ヘイ、その……二階座敷といふものは、空間には出來ません。二階をつくる以上、どうしても階下座敷といふものが附物になります』、『ヘヽン、俺はまた二階といふと、二階だけのものと思つた』、『ヘヽン、俺はえゝ學問をした』

○院長大邊な御機嫌……忽ち酒看料……金一封が棟梁の手に渡りました。

新秋十首

工藤武城（京城婦人病院）

新秋夜坐

天催灝氣足清幽。露白星明河漢流。
蟋蟀帶風聲斷續。燈邊獨坐惹新愁。

月下聽虫

促織知何處。荒雛月影移。
清音聞可聽。倚榻撚吟髭。

望月

一天秋氣爽。雲盡月玲瓏。
草露紛如玉。中庭不厭風。

對南山

任他呼我作癡頑。默々無爲晝掩關。
目送白雲來去影。悠然抱膝見南山。

韜光庵即事

韜光庵古景依然。窓對老松頑石邊。
擔雪營々塡井客。嘗無寸効四十年。

秋曉

雲飛露滴寂無人。地白風清境可親。
曉月空庭把箒立。胸中圓鏡絕纖塵。

初秋口占

蟋蟀宵々韻益繁。
竹檻新涼今可倚。先迎初月好傾樽。

題葡萄圖

白玉盤中紫水晶。累々帶露味應清。
汲泉不用頻童子。燈下展來醒宿酲。

秋懷

風高肅瑟旱蛩鳴。孤雁南飛惱旅情。
被冷簾寒斜月暗。滿城砧杵夢魂驚。

秋夜話舊

燈下繙書興最宜。叢虫壁裡款扉誰。
何圖雪案螢窓友。偶爾訪來談舊時。

秋冷雜感

たゞ此の渾沌たる藝術家や畫家の無秩序の中にあつて、運よく

秋冷雜感

多田毅三（洋畫家）

三越のガリバーテンペラ展で、多くの人は見落されたか知れませぬが、石井鶴三氏の『村相撲』といふ小品を見ました。繪は例の調子の鶴三式のものですが、夜の畑を背景とする土俵に、電氣の光りを浴び乍ら二人の村人らしい素朴さを以つて取組んでゐます。するとその後に三人ばかりこれも裸んぼの男が手を組むだり或は腰に當てゝ見物をしてゐる。是等人物の上にも電氣の光りが實に確かな感覺を持つて降つてゐるのでしたが私が特に驚いた事は此の電氣の光線が降るなんとなくリズムを感じられるその向ふの闇の中で、何とも云へぬ闇の深さが描かれてゐましたし又その中に青い物（野菜か何かゞ）見えてゐて、作者の實に確かな記憶力（此繪は室内作と思ふ）と技法に深く敬服しました。

現在では樣々な即席料理的な自分で配列し得るそれも塲末の料理人がやる式の七色か八色の色彩と、何時も飛び出す不自由なる筆觸（タッチ）と隈どりとの小刀細工的仕事に巧者振つてロク〳〵自然の示す何物にも觸れ得ず自已の小才をたよりに自然をヘシ曲げてゐる、すべての畫家としての境地を他人の畫風の間に介在してひねくり出してゐる人ばかり多い中にこんな自已の仕事を深くたのしむ姿を見せ、自然を樂んでゐる姿を見せてゐる人は稀であると深く敬意を表させられました。

×

フランスの或る高踏的な畫風を示してゐる畫家が次の如くに云つてゐるのですが、決して他處ごとではありますまい。

『藝術家は此の『如何に』といふ形式や方法の探求に增々腐心して居る。藝術は特殊的のものとなり、たゞ藝術家自身によりてのみ理解會得されるものとなり行く。而も彼等は見物人が自分達の作物に對して無關心であることを歎息してゐる。かゝる藝術家は、世に向つて何等叫ふべきものをも有たず、たゞ僅少の『他の人々』に認められて、庇護者（パトロン）や鑑識家の小團體によりてチヤホヤ言はれて居るので、（無論かゝる事は、彼にとりて偶には外形的に良い物をも伴ふものであるが）外形的の才能のある熟練ある人々の一團が起きて藝術に進み、容易に勝利を占むる事が出來るやうに見える。何れの『藝術界』にも斯の如き藝術家が幾百幾千となくうようよして居り、而もその大部分は新奇な方法をのみ追求し、何等の靈感もなく、冷やかな心情と昏睡せる心靈とを以て滅茶苦茶に作品を出してゐる。

こゝに『競爭』は激しくなる。名聲を得んとしての狂暴な鬪爭は益々外形の追及となつて來るたゞ此の渾沌たる藝術家や畫家の無秩序の中にあつて、運よくも成功せる少數の群は、彼等の贏ち獲た領土の中に、自ら立て籠つて仕舞ふ。そして遙か後方に取り殘された一般群衆は、一體何の事なんだかサッパリ解らず、かくの如き藝術には興味を失つて了ひ、靜かに背を向けて立ち去つて行く』

×

最近私の願望とする事は京城に確かな美術協會の設立です。私等自身も繪を時々は買つて貰ふのでないと思ふやうな勉强も出來ないのですが、さて誰が私の繪を欲しがつてゐるかです。正直に考へると朝鮮廣しと雖ども特に私の繪を求めて居る人などはなさそうです。それでも矢張り賣らねばならぬので駄法螺の一つも飛ばさねばならぬのですが、駄法螺料を貰つて來るといふ事は出來る事ではありません。駄法螺料二十圓ですか、三十圓ですか、とても辛抱なりません。それかと云ふて買つて貰ふ心算りで持參するより他にないのですが、その甘え（あまえ）心は何處から來たものでせう。甘える資格、權利、自然性そんなものがあるでせうか實際情け無い思ひにとざされなければなりません。他に適當な仕事があればそれで食ふべきであり、生きて行くべきですが、下手な繪を描く事より他には何も出來ない性（さが）の人は少くはありません。然らば如何にして是等が救濟さるべきかを思ふのです。何うすれば幾分でも合法的であるかです。これには私が今日知る範圍で京城には何等その意志を尊重されず紹介やゆきがゝり因緣などで月々多額なる繪を賣りつけられてゐる人々が多

京城雜筆

數で眞に氣の毒に思はれもするし又た、不當なるものの跋扈ともなつてゐる。それにそんな消極的な意味からばかりで無く、進んで援助さるべきものも今日では見遺されてゐるのでこれ等の一切に善處する機關として私は美術協會を設立することを提唱します。そうして如何なる方法で會員を作るかといふに、今日の被害階級を會員として月々會費を徴收する。自然それ等の人々が美術に對する理解者でもあり善い後援者でもあるのだから此の協會は美術界に權位を持つ事にもなる。先づ幾らかの資産を持つ會員の他に美術家數名を幹事として常任する。會員は畫家の紹介や買ひつけの役を協會へ廻避する。特に後援救濟すべき人がある場合は協會がそれをする。京城の府内に個人展覽會が有る場合などは進んで買つてもやる（今日個人で展覽會をやつても費用だほれになるといふことは作者個人の境地をはつきりすることの出來る發表機關を欲く事になりますので殘念なことです）實際は個展などでどん〳〵賣れる程度の作家は居らぬのかも知れませんが、然し他に内職といつたやうなものも無い土地柄ですから堂々と個展などをやる慣性にして買つてやることになれば非常に適當なる救濟法だと思ひます。それと同時に今日ザラにある潜航的に賣り歩く駄法螺料で食つてゐるやうな種の旅人を幾分でも防禦することも出來ようと思ふのです。要するに此の協會の設立は相互のためになることですから犬馬の勞を私共はとらねばならず、將來必ず實現の運びにいたしたいと思ひます。

×

次に研究機關の事ですが、鮮展といふ發表機關があつて研究機關が無いといふ事は全く變態で、今日鮮展で活躍してゐる者の多くは内地でその研究をして來た人々で鮮展開設以前の者ばかりで新人が頭拔けて來ない事に少し注意を拂はねばなりません、又こち〳〵此處でやつてゐたやうな人の多くが停滯して次第に影を薄くしてゐるといふ事にも注意をしなければなりません。大體鮮展は素養といふやうなものを作家に要求し續けて來てゐます。處がその出品者の多くは素養といはれる種の勉學をしてゐる者が稀であつて、その素養といはれる勉學はある年輩のうちになさなければ殆ど取返しがつかぬといつてもよいのです。それに朝鮮にその素養を作る勉學をさせる機關は欠如してゐるのです。斯樣な事は今日の半島美術界の大きい欠點といはなければなりません此の件も併せて協會を以つて援助が出來るやうならば亦一層の善事ではないかと思ふのです。

×

博覽會で街頭に樣々な裝飾が施されました。一つも氣に入りません。皆マガヒものであるからです美くしさを持たぬからです。人々は眼かさも騷がしさも同一にしてゐます。誰かペンキ塗りのズツクの塔を美麗と感じることが出來ませうか、あれは立體的雜音に過ぎません。私の氣持ちでは折角の美くしい歩道が掘りくり返されてあの種の塔が立ち並べらるゝのがたまらない不快さです。

×

鮮展を見に行く、皆忌けてゐるなあと思ひ乍ら階段を下りて陳列棚の倉庫みたいな處を通されて、あゝつまらんなあを一層通感させる仕掛け。

×

某君の美術評甚だ高慢、友人一同眼をムイて、『何の必要があつてお互の事を公表しなくてはならぬのか、人を馬鹿といつたからつて自分はリコウといふ意味にはならんぞ』といふ。

◈鑛業風聞記

三木一彦

○例の野口遵氏は、全南の光陽郡で、大々的に金鑛を掘り始めたが、頗る有望といふ世評。

○ドコまで運の強い人やら。

○西崎鶴太郎氏も、忠南公州で金鑛を始めた。これも豫想以上の成績で、樂堂氏ウカと碁ばかり樂しんでゐる譯に行かなくなつた。

○近來ボツ〳〵鑛業界は、復活の兆が現はれて來た。久原は、南に銅鑛を始め、北に義州鑛山をやり始めた。三井、三菱も、手を束ねてはゐない。三井は、三成鑛山といふ大物を始め。三菱は佑益鑛山といふのを手に入れた。機運は漸く動いて來たやうに見える。

○セメテ鑛業でも、芽を吹いてくれんことにや……。

× ×

○鑛業といふと、朝鮮で、長く鑛業をやつてる人は、西崎、富田麻生の諸氏で、いづれも三十年組先輩者たることに、間違はない。

○石炭の方では、平壤の松井民次郎氏。これは、『朝鮮に石炭なし』といはれた頃、安州に石炭を見つけて俗説を掃蕩した。一筆の／ネウチは、確になる。

ソエ自殺と統密文化

作つて大騒ぎやつて居るがあんな紙ッペラの上の約束は結局なんに

ず、將來必ず實現の運びにいたしたいと思ひます。

×

鮮展を見に行く、皆忘けてゐるなあと思ひ乍ら楷段を下りて陳列棚の倉庫みたいな處を通されて、し』といはれた儘、安州に石炭を見つけて俗説を掃蕩した。一筆のネウチは、確になる。

京城雜筆

ツエ伯號と航空文化

毛利元良（朝鮮鐵道）

ツエッペリンがとう〳〵日本へやつて來た。ドイツから日本まで僅々五日間で飛來し更らに太平洋を翼破して全世界を完全に征空したエッケナー博士の業蹟は正に人類史上空前の壯擧であり將た又人類文化最高の誇りである。ツエ伯號の成功によつて航空文化に一新紀元を劃した事は云ふ迄もない事であるがこれを以つて航空文化に黄金時代來ると隨喜の涙をこぼすには話が少し早過ぎる。成る程飛行船は水素氣囊と云ふ浮き袋を背負つて飛び歩くのだから墜落の危險は殆んど無く且つ又續航力の偉大なる事もツエ伯號によつて確證されたので飛行船が長距離航空輸送機として最も理想的のものであると云ふ事は既に論を俟たない。然しながら斯くの如き飛行船は莫大なる建造費を要し水素ガスの補給、燃料の積載等に少からざる費用を要するので如何なる程度までこれを經濟的に利用する事ができるであらうか。そして又飛行船は多大なる天候の支配を受け帆船の如く日和見の飛行をしなければならないからツエ伯號の如き飛行船を以て定期般空路を開拓する事は未だ前途遼遠の事であらう。けれども今や人智の向上進歩はその極まる處を知らず學者技術者の研究によつて積載量及び續航力の大なる飛行船が經濟的に建造され運轉され、殆んどこれが天候の支配を受けざる程度にまで完成された曉にこそ航空文化に眞の黄金時代來ると云ひつつ可きである。

かくて航空文化に黄金時代が到達したならば世界の交通は時間的に短少し人類の文化は空間的に增大する。即ちこれまで交通機關の不備によつて文化の恩惠に浴し得ない地域、例へばアフリカ内地とか内外蒙古、支那の奥地、チベットの如き地方へ是等航空機による航空路が開發せられて文化の活動範圍が空間的に擴大されるからである。

所で諸君!!! 文明の建設者は又文明の破壞者である事を考へなければならない。これは世界大戰の時に立證されて居るではないか。世界大戰當時は飛行船でも飛行機でも今日の如く發達して居なかつたけれども飛行機又は飛行船によつて交戰國が受けた精神的及び物質的損害は我々の到底想像し得ない程悲慘なものであつたに違ひない、そしてツエ伯號今回の壯擧に就いて非常に面白いと思ふ事は嘗て世界大戰當時ツエッペリンの襲擊を受けたイギリスとフランスが劃合に平氣な顔をして居るのに、ツエッペリンの恐ろしさを知らぬ日本人とアメリカ人とが熱狂的お祭り騒ぎをして居る事である。そこで科學が生んだ世界大戰の悲慘事に鑑み不戰條約とかなんとかを作つて大騒ぎやつて居るがあんな紙ッペラの上の約束は結局なんにもならないに違ひない。將來航空路が開發せられるにつれ到る處に縄張りの爭ひや何かから第二次の世界大戰が起る事だらうと思ふからである。

未來に於ける世界の平和がどうなるかそれは神樣のみ知るものとして日本は將來世界航空路の一大中心地點となるに違ひない。故に吾々は世界に先立つて航空文化の建設に努力し同時に航空軍備の充實に無關心たる可きでない。黑船に乘つて來たペルリによつて日本の地上文化は開發されツエ伯號に乘つて來たエッケナー博士によつて日本の航空文化は必ずや啓發される處が少くない事を確信する。

◈大臣は憂ふ

漢江漁郎

○或る日の閣議散會後、大臣連はうち揃つて食堂に入り、めいめいフォークを手にしながらの漫談……。

○渡邊法相の曰く、日本婦人はこれまで貞操堅固といはれてゐたが、それは、誘惑を受ける機會が尠なかつたことを、考へなければならぬ。ところが、この頃のやうにダンスが流行し、貴婦人の大多數が爭つてダンスホールに出入するやうになると、强い誘惑の機會は、ドシ〳〵來る。餓虎の前の小羊だ。この小羊が、どれほどグット踏みこたえる力のあつものか。我輩頗る心細い氣持がする。

○誰一人日本婦人のために疏明するものはない。一同『フーム、ナールホドねえ』

朝博寸評

半島の秋をかざる朝鮮博覽會は國費、地方費、寄附その他を合せて二百數十萬圓を投じ、始政二十年を紀念する朝鮮としては空前の催しである。會場を通覽して感ずる事は當局の配意準備に遺憾少しといふ事だ、先づ朝博の出來ばへは種々の點から見て十分と言へやう。

×

唯、二百數十萬圓もかかつてゐる博覽會として、通觀したところ如何にも物足らぬ所がある、ぬけた感じがする。總督府が金力をあげたと思はれる本館が、どうも寂しい。引立たぬ。これは何故だらうか、緊縮節約の八釜しい時節でその觀念を以てバッとした、博覽會を見るために、割引されて頭に映ずるのだらうか。

×

もとより夫れもあるだらう、然し不引立は朝鮮そのものが引立たぬからだと思ふ、農本位といふても、極端な農本位の朝鮮だ、極端なジミな農本位の朝鮮が、朝博にそのまま映つて來る。見榮えのせぬのは當然であらう。當事者の努力は認められ乍ら、朝博本館そのものが物足らなくなつて來る。これはどうも止むを得ぬ事だらう。

×

博覽會としては、色彩ある纖維工業品や、機械類、一般工產品がないと見榮へがしない、所が朝鮮には染織機械はもとより、工業の目ぼしいものがない、工產品の大部分は家庭工業である。然もこれは！と思ふものがない。朝博の不足感は、一言にして盡せば、工業朝鮮として幼稚な爲であると思ふ

×

尤も、各道審勢館は競爭意識が十分に動き、意匠採光の見るべきものあり、各種の表現に新手法を加へて居り、相當觀るに足る。始政五年の時は、各種產業を道別にし、今回の產業南北館、米の館、審勢館を一括し、各道審勢館としてゐたやうに思ふ。その頃と十五年を經過した現在とは同日に語れぬ。從つて分割は當然だらう。が分割した所に充實味をうすくしてゐる。

×

ヤハリ、何と云つても內地の特設館や參考館は見ごたへがある。ドコも毎年若くば一年に數回の經驗があり、出品陳列共に手に入つてゐるからだ。夫れには第一に工產品を主にしてゐるからである。さりとて一歩進めて批評すれば、京阪の百貨店よりもまさつてゐるとは言へぬ。東京、京都、大阪、九州並に內地館に於て然りだ、博覽會ナンテ舊時代の遺物だ、百貨店全盛の今日から云へば、無意義きはまると貶す人のあるのは一理あり矣。尤も朝鮮には大百貨店なく、博覽會も近年かつてない催しである、そこに朝博としての存在性はあるだらう。

×

臺灣館や、樺太館、北海道館などは、その地方色を僅に出してゐるにすぎない。各道館と共に賣店であり、又食堂にすぎない。食堂と曰へば、實にその食堂の多いのに驚ろく。朝博見物と云ふよりも何か食ひに行く人が多いのでないかと思はれる位である。

×

陸海軍館や、製鐵所館は、夫れでも大衆を啓發するに足るものがある。概して好評！。獨立せる特設館では三井館が異彩を放ち、三菱館も內容はある。住友館の出品はその道の人に賞揚されてゐた。水族館や、畜館產などは結局それだけのものといふに留まり、社會經濟館や、美術工藝館には、若干朝鮮のカラーは出てゐる。遞信、警務、交通などは先づ平凡と言ふべきだらう。

×

協贊會の主力經營たる演藝館は博覽會の花で、その評判の如何は入場者を左右するといふが、協贊會の演藝部長は、經費の關係で思ふやうに行かず、夫れに低級な大衆を標準とし、安く見せる事にもたと語つてゐる、從つて藝術的とかいふやうな點はドコにも見えぬ致し方のないことだらう。

×

筆者は、一昨年の福岡、昨春の別府と岡山、昨秋の京都博を見た別府と岡山は小さいし論外だが、巡覽後の感じは、流石に京都よりちよつと落ちる、又福岡の充實と設備の完成に比し、多少の遜色ありと思ふ。朝博は朝鮮大衆相手、福岡は九州中國にわたる文化の進んだ觀客を相手に總てが經營されたからだらう。唯だ今の朝鮮としてこれだけのものを設備し得たのは、先づ大成功だ。

い、五里も歩かすとはヒドイ』
など愚痴は止まぬ。

京城雜筆

明盲亂談

高橋昇

（黄海道載寧鐵山）

夏の思出

子供の脊中が三つ並んで居る寫眞……櫛を斜めにして左下に倒に濁點を打つてある寫眞……レンズの上半分の寫眞。

『寫眞の言葉』としてアサヒグラフに載せてある。『蟬しぐれ』と讀ませる積りである。これで思ひ出すのは

暇あらばぢと訪ひ來ませひぐらしの涼しき聲をきみに聞かせん

を椽に出て、青田を渡り、杉の木蔭をくゞつて來る、涼しい北風に吹かれながら、大和田建樹氏の隨筆の中に見出した時の事。カンカンに照り付けた眞夏の日も傾いて屋敷の杉の林に、ヒグラシの所謂蟬時雨を聞いた實感が詠まれて居るのを喜んだ。我故郷の夏

夏は暑いものと相場がきまつて居るが、今年は隨分暑かつた。畫の暑いは毎度の事ながら、暑苦しくて寐付かれぬ夜が打續いた。朝餐は大陸的で、日中は暑いが夜は涼しいから凌ぎ易いなど言ふた前言は、取消さねばならぬ。

暑さに就いて『前言取消』の思出が一つある。

十數年前のことであつた。其頃萬朝報を永い間讀んで居た。暑くなつてから、『涼味其日々々』といふ見出しで、毎日三面の隅に、短かい記事が出て居た。之れに投書したのを、掲載されたまゝ書くと……八月五日掲載……。

遊泉寺銅山

私は暑中休暇中石川縣小杉町の東二里に在る遊泉寺銅山（實習に來て居る。此處へ着いた日友達の許へ『此頃の暑さでは何處に居ても汗を防ぐ事は出來ないから寧そ働いた方が勝だ』と書いて送つたが二三日の後坑内へ這入つて見ると前言を取消したくなつた。坑内は冬は暖かく夏は涼しくどんな暑い日でも外より十二三度は溫度が低い。奥深く入つて行くに連れて爽かな冷氣が地の底から浸み出て來て暑さを忘れしめる。之が暗い坑の中でカンテラの光を頼りにして働く人々に對して自然が授くる唯一の賜物である（有馨兒投）

洒落の失敗

◇演習を終つて後、軍歌に威勢を見せて、兵營に歸り行く隊伍を時々見る如く、長く歩いた時にはいろ〳〵話をして居ると、疲勞を忘れて思はず足が進むものだ。

見學旅行に友達と連立つて、四五里歩いた時の事である。半頃から友達の一人が膝が痛むとて盛に愚痴る。肥つて居るので徒歩は最も苦手なのだ。最初は皆も同情したが、其愚痴がトテモ烈しいので果ては同情者も離叛する樣になつて來た。之れでも

『どうも關節が痛んで仕方が無い、五里も歩かすとはヒドイ』

など愚痴は止まぬ。

こうして歩く時には、戯語笑談、駄洒落等にまぎらせて行くのを常とした僕も、餘りの愚痴に

『カンセツでまだ良かつた、直接痛んだら尚困るがね』

と揶揄した所が、怒るまい事か……とんだ失敗をした。

◇是も學生時代の事、イツモ月末には來る爲替が、どうした事か其月は來ない、催促の手紙を出さうにも金欽病を患つて居る、漸く端書一枚あつた、端書では明ら樣書くのも具合が悪いと思ひ

拜啓時下秋冷の候益々御清適奉賀候サテ愈々十一月にも相成秋風懷中に迄吹き荒み閉口致居候就ては兼ねて御注文致置候懷爐の灰至急御送附被下度鶴首待居申候　敬具

と書いて出した。懷中……兼ねて……と言ひ、懷爐の灰と言へば、察しが附く事と思つて居た。折返し爲替が來て、ホクソ笑んだ迄は大成功であつたが、其翌日母から懷爐の灰に懷爐迄添えて、小包が到着したのには、親の有難味をシミ〳〵感じさせられた。

◇聯珠初段になる事になり、免狀料を納めねばならぬので、『來る一月十六日上野韻松亭に於て、聯珠と結婚式を擧行致度、其費用金壹圓五拾錢也序の節御送り下され度』と言ふ風に手紙を書いた。毎年其日ソコで競技會を催し、段位授與式を行ふのであつた。

所が其返事に、學生の身分として親の許しも得ず結婚するとは不届千萬云々とエライお目玉。可愛い聯珠の爲めに辯明是努めて漸く貰ふには貰ふたが、クスグッタイ次第であつた。（四、九、六）

京城雜筆

元山土産

川上喜久子
（東拓社宅）

朝鮮語を學びたいとは早くから思つてゐたが、同じ希望を持つてゐた友人が青年會の夜學に通ひ初めた時は此方の健康狀態がよくなかつたりして其儘になつてゐたところ、この夏言語學をやつてゐる弟が習ふといふので、一緒に初めてみた。

京城よりは幾分涼しいとはいへ元山も今年はひどい暑さで、その中を毎日晝の一時から午時の時刻を二時間近く押し通さうといふのだから、かなり苦しかつた。それも午前中原稿書きで激しく頭を使つたあと、新らしい言葉を征服しようとするのは、なかなか疲れるもので、早く切りあげて欲しいあまり、先生の小學生にでも敎へるやうな丁寧さが焦れつたくて仕樣がなかつた。それでも溫厚な人格者らしいその先生は讃めることが全くお上手で、これまで內地人に幾人となく敎へたが、あなた方位熱心で覺えがいゝ人はなかつたなどゝ言はれるのに勵まされつゝ、やつとのことで、二週間のうちに二の卷を了つた。けれども了つのは名ばかりで、復習の時間が無かつたりしたために一向物になりはしなかつた、しかし基礎だけは、損得を離れた先生の親切のおかげで得させて頂けたかと思ふ。弟が先に歸城するので二週間で私も止めたが朝鮮語は外の外國語にくらべてずつと樂であるらしい、併し朝鮮語のために割かれる時間は僅かなから、丁度小說に興味が乘つた時期であつたゆえ、ひどく苦痛であつた、お蔭で希臘語をはじめ各國語をずん〳〵物にしてゆく妹や弟の仲間にも這入れず、豫定してきた或る外國語の勉强も到頭手がつけられなかつた。

ひとつ朝鮮語を元山土產にして歸つて下さいと先生は言はれた。自分もその積りであつたが一向土產らしい土產でなくて此方へ歸つて整理しようしようと思つてゐながら、矢張り時間がないのと、こつちの注文に合ふやうな先生もまだないし、外の言葉の夜學に通はうと考へてゐるし、つい本も開かない始末。

それからも一つ元山土產に持つて歸らうと意氣込んでゐた小說も八月末に一通り書き上げてきたのだが、歸宅して讀みかへすともうだめ、アラだらけで見るに堪えない。流產までしたほどの努力で、『麻雀』を入選させた西岡さんが矢張り自分の作品を恥ぢて後悔してゐるので、ともに『これだから發表するのはいやだ、あとの恥づかしさがたまらない』と同じ思ひを語り合つてゐるわけだが……ともかくも私の生み出した子供も不具で、その外見（みつとも）ない子供を抱へて得意になつて歸つてきたことは何て恥かしい——。けれども、その後毎日せつと書き直しつゝある、こんどこそは、と思つてゐるが、それもぢきに不滿になるだらう。道は遠い、ともすれば甘つたれやうとする心を鞭うち鞭うち、激しい努力をつゞけねばならない。

——こんなわけで元山土產は到底人前に出せないが、自分自身に省れば、元山の生活から持ち返つたものが無いでもなかつた。もとより空に終つたやうに見える仕事も決して全然むだでない事は判り切つてゐるが——兎も角その間に少しづゝ自己の淸算が出來ていつたのが感ぜられる。殊に今夏の元山生活には私の思想の變化を記念する一つのさゝやかな里程表が永久に殘されるであらうが、それはまだまだ文字に現はすほどに熟した考へでもなく矢張りお土產の形にはならない、それよりも過去の感情の幾分を海邊へ置土產にして來た位だから、私は寧ろ身輕になつて歸つてきた。ではせめてその身輕な自分自分はお土產にならないかしら——しかし友人達の超時代的な眠りを更に深めて衰亡（ほろび）への運命を促進する亞片のやうなお土產にはもはや決してなりえないであらうから……。

以上の樣なわけで、何のお土產もなくて——尤も、誰一人當にしてゐた筈もなからうが——。

細井肇氏著
國太公の眦
（一冊定價貳圓）
大院君とは何人？
韓末の世相歷然！

（波浮の港）
磯の鵯の鳥りや

リズムからジヤズへ

（時代表現の小唄考）

光永紫潮
（朝鮮毎日新聞社）

四五年まへに若い青年男女の愛誦した流行小唄の二三――松井須磨子のカチューシヤは餘りに時代に遠のいてゐるから除いてそのあとを受けて流行つた。

（戀の鳥）

捕へて見ればその手から
小鳥は空へ飛んでゆく
泣いても泣いても泣ききれぬ
可愛いゝ可愛い戀の鳥

それから間もなく

（花園の戀）

くるしき戀よ花うばら
かなしき戀よ花うばら
二人は逢ひぬしのびかに
顫へて人見はゞかりぬ

この流行期は大正八九年頃から少くも二三年はカフエーにも一般にも遍ねく口ずさまれた。當時流行小唄の濫觴は概ね歌劇か新劇の間に挿入されたもので、當時は現代の様に世智辛くなく、若い青年たちの間にも今日ほど深刻な失業難などが食ひ入らず、財界の好調と正比例して心の中に餘裕があり、同じロずさむ小唄にも悠長さとリズムカルな典麗さと莊重さを保つてゐた――大正十四五年の頃になるとそろ〳〵人員淘汰や冗員整理など云ふ聲が出て、漸次小唄の發祥地が歌劇や新劇から離れて映畫に移り、當時の生活不安さを表現して多少とも歌詞が頽廢的になり前の典麗さと莊重さを失つてリズミカルな處を失つて來てゐる。帝キネの佃血秋氏作歌の

（籠の鳥）

逢ひたさ見たさに
恐さを忘れ
暗い夜道を
たゞひとり

まだ幾分律調は以前の時代を承けついではゐるが以前よりテンポは早くなつてゐる。この後を受けたのが例の松竹の『枯すゝき』である。

（枯すゝき）

俺は河原の枯すゝき
同じお前も枯すゝき
どうせ二人は此世では
花の咲かない枯すゝき

同じく律調に幾分の悠長さがあり歌詞の内容は漸次頽廢的になつて來てゐる。――それから四五年を經た今日此の頃の青年男女の間に口誦してゐる小唄になると、

東京行進曲

昔戀しい銀座の柳
仇な年增を誰か知ろ
ジヤズで踊つてリキュールで更けて

翌けりやダンサーの涙雨

となつてもとの小唄の發祥地が映畫であつたものが、此の時代になるとダンスホールやカフエー、バーなどに流行し出すと、映畫業者はその小唄をとり入れて脚色し撮影をすると云ふ風になつた。

（波浮の港）

磯の鵜の鳥りや
日暮にやかへる
波浮の港は夕やけ小やけ
明日の日よりは
ヤレホンニサ
凪ぎるやら

など松竹、日活、東亞、マキノの四社競映である。全國三千にあまる四社系の常設館で全國的に伴奏し獨唱するのであるからその傳播性は急速度である。そして『籠の鳥』『枯すゝき』時代のリズムから見るとずつとテンポが早くなり何れもジヤズになつて來た。即ち一脈の生活不安に脅えながらも尙ほ多少のゆとりを見せてゐたものが、近代のそれは小唄を唄ふにも始終いら〳〵した何者かに追ひ立てられるやうな焦燥さを伴つてゐる。ダンスのステップに合はす關係上ジヤズには一定の歩調がありそれより悠長にはなり得ない。それでは踊りが出來ない。唄とダンスが離れてしまふ。然し此のテンポの早いそして歌詞の内容を檢考して來ると以前から見るとずつと猪突的な盲進的な、自棄的なものを持つてゐる。それがいゝか悪いか――それは皆さんの御判斷におまかせするとして――。

西洋料理
支那料理
泰明軒
東京 議院そば

恐るべき病菌

今村鞆

コレラよりも、ペストよりも一層猛烈なる病毒を有して、禍害を人類社會に與へ、古より今日まで爲めに屬國家を滅亡に導きし、恐るべき傳染病、其名はカンカイ腐敗病である。

此の病は、大古より世界各國に存在し、官公務に從事する者のみを冒す、特種の傳染病にして、其傳播の經過は、極めて緩漫なりと雖も、素因たる條件の具備せるケ所へは、急激に蔓延す。

△病原體

病原體は、顯菌に類したる、一種の奸菌にして、照魔式顯微鏡により、患者の身體各部に、其存在を證檢する事を得、本菌は觸接により、直接人體に侵入する事ありと雖も、多くは、御用商人、利權屋、不正會社の重役等の、中間宿主を經過して、侵入する者多し。

本菌は暗黑と汚濁を好み、熱性に弱く、紙幣手形等の、培養基によく繁殖す、其のコロニーは、鍵形を爲す、而して他の色素には染色せず、唯黃色特に黃金色によく染色す。

△素因

人の素因としては、心身不健全なる者、特に道義心に欠乏し、正義、清廉、克己等の美德の缺如せる者は、此の病に感染し易く、又放蕩、負債等の境地に立てる者甚しく貪慾なる者も亦、感染の素因となるものなり。

人格高く、道心堅固なる人には絶對本病に感染せざる特異性を有す。

時の素因　社會一般が腐敗して道義滔々地を掃へる時代は、一般に充滿せる、釀膿球菌と、共同働作して、其感染を甚しからしむ。

處の素因　官權萬能にして、言論の威力なき場所、上級者が、本病に冒され居る場所、金錢物品を取扱ふ場所、商工業者、實業家、事業家等と密接の關係ある場所は最も危險なり、料理屋の如きも亦時に、本病の畑としての素因となることあり。

△系路

感染の系路には種々あり、進物商品切手等は常に此の病菌を媒介す、饗應の飲食物、美人及巧言令色の人物も亦、感染の系路として有力なるものなり。

△症狀

此の病菌の侵入したる最初に在つては、患者は精神不安となり、心臟に多少の痛苦を感するを常とす、然れども時を經て、病狀昂進すれば、膽囊肥大し胃の擴張を起し、上肢は伸長し、骨質は總て軟化し爪は伸びて曲り、神經系統は總て痲痺し、唯金錢計算にのみ著しく銳敏となり、公務を厭ひ、血液は甚しく不純混濁し、厭ふべき一種の體臭を發散するに至る。

【四六】

其の顏貌は、常に不安の色を蓄へ、著しく強慾、陰險、野卑の醜相を呈するに至る。

暗所を好み、日光及犬を恐るゝは、本病患者の特徴たり。

△療法

重症患者に對しては、療法なし古代は牛疫の罹牛と同じく、撲殺したり、此の方法を最良なりとす

輕症患者に對しては、强烈なる吐下劑を用ゐて、其不正飲食物を悉く吐瀉せしめ、數日の絶食を行ひ、傍ら宗教的液體の靜脈注射を行ひて、血液の更新を行ふべし。

菌携帶者に對して、力めて其素因を除去し、境遇を改善し、傍ら本病の恐るべき經過をとることを覺らしめ、自攝自養に努めしむべし。

△豫防法

豫防消毒法は秋霜雷電の如く最峻烈なるを要す。

重症中症の患者は、悉く鐵窓の隔離病舍に運搬して、長年月隔離するを第一の急務とす。

而して本病者と健康者とは容易に判別し難きが如きも、本患者は一種の體臭を放散するを以て、大抵世人はよく其病者たる事を醫師以上に感知し居れり、故に此等の擬似患者に對しては、檢病的に嚴重なる偵察を行ひ、料理店に於ける遊興の模樣、其の仲間、遊興費の支拂、商品切手、株券等の受授の內情預金の多寡、自己又は他人の名義にて所有せる土地家屋の價格等々に付き精査すれば、直ちに其病狀を暴露すべし。

要するに、本病の根本的豫防法は、諸種の素因を除去し、社會の空氣を健全にし、病毒傳染の余地なからしむるに在り。

ならぬ事となる。

現在の所謂正義は强者の假定だ

隨筆

木塚常三
（竹添町）

ツエツペリン號

ベルンハルデキーの『力即正義』の宣傳を贊仰して歐洲大戰を惹起したる獨逸國民が敗戰したりとて今日の流行語たる『平和即正義』の宣傳に心から改宗し居るであらうか。

獨逸國民は未だしも其他の諸强國民が果して皆な『平和即正義』と信じて居るであらうか。

共鳴の聲を合はするのは心から洗へば皆な御都合主義からではあるまいか。

資本國、戰勝國に取りては平和は正義の如くに見ゆ。左れど非資本國、戰敗國に取りては平和は不得已一時の現象にして其心奥には其忌ま〳〵しいと思ふ平和の假面を一時も早く剝取らん反平和の熱火燃え居ると見るが眞實ではあるまいか。

『力即正義』と云ふことは人間の歷史が證明して居る半面の眞理で『平和即正義』と云ふ事は御都合上の口頭宣傳で人間の他の半面の本性に反して居る。畢竟するに人性は素善ではあるが善惡混交である。

人間の本性に反する事を無理强ひするのは到底成効の見込がない見込のない事を無理强ひするのが當世の事相だ。無理强ひの連續が人間、社會、國家、國際間の事相だとも謂へる。

論より證據、各人の本性に自問自答して見るが早判りだ。

昨夜ツエツペリン號の活動寫眞を見た、如何にも平和に、壯快に雄大に見へた。約廿日間で世界を一週するなんて驚異の外はない。獨逸人の意氣は如實に世界を呑み了せた樣だ。

左れど其形は魚形水雷ソックリだ。魚形水雷は戰鬪の外に用は無い。

左れど又た飛航機と同じく平和に善用するも破壞に惡用するも人間の勝手だ。

如何に戰敗國なりとて幾十億の賠償金を五十年間に亘りて獨逸に課するは餘りに無理だ。嬲殺的死刑の宣告だ。五十年間刑の執行猶豫の形ちだと同情心が突發した。

無氣力、無體力の獨逸人ならイザ知らず何れの點より見ても世界最優秀の而して『力即正義』を信ずる獨逸國民が何んでコンナ無理强ひの裡に生きながら死なふぞなんて考へても見た。

想像は想像を生んで突飛な邊にまで進んだ。假りに見よ『力即正義』を信ずる獨逸國民が否な獨逸の志士（死士）數十人が蹶然奮起一片の亡命書を地上に拋つて其所信に邁進せんか、數時間乃至數日間に世界の大首都、大都邑の運命は全く彼等の慈悲の下にあらねばならぬ事となる。

現在の所謂正義は强者の假定だ愛國志士の心は飽く、飽きたる心の反動は常識以上に猛烈だ。軍縮の猫聲、其聲の優しきほど危機は迫りつゝありなんて老人の血を若返らせた（四、九、四日）

緊縮政策

明治維新に先だつ三十二年？の春、佐賀藩主鍋島閑叟公十八歳初めての入國に、江戸を出立せんとする際、供揃ひは出來ても一向出發の模樣が見へぬ。公は怪んだ、旅費貳萬兩（現今の約貳拾萬圓）不如意の事が判つた。若き藩主の血は湧いた、瞬間に決意した。ヨシ見とれと

公の緊縮政策は入國後直に始められ、直に實行された、三十六萬石の大々名が身自から綿衣を纏ひ一汁一菜主義で藩の儀表と爲り綱紀を振作して徒食遊惰奢侈の風を排し、一定の年限を經過したる藩内の貸借證書は悉く之を火中に投ぜしめ、又た農民一人の六十歩以上田畑兼有を嚴禁された。

其實行振は實に峻烈であつた、公の施政を怨む者も少なくなかつた。當地に現住する都文堂主人中村郁一君の家は其爲に潰れたとて君は初め其怨む心を以て公を研究する志を起したと云ふ程である。研究の結果は明君の明君たる所以が判つて立派な鍋島閑叟公傳の名著と爲つて居る。

公入國當時の藩債は今の國債三十八億萬圓以上の重荷であつたかも知れぬ。長崎警備の任を兼ねて居たから、當時の軍政費は今の海軍費以上の割合であつたかも知れぬ。反之、奢侈とは云ふものゝ當時の奢侈は江戸表に於ける奢侈

で、藩内に於ける奢侈は勿論當世の奢侈以下であつたであらう。

然かも公の毅然たる緊縮政策は數年ならずして其効果顯著し、和蘭より軍艦數隻を買入れ得たるのみか、國内には反射爐を据付けて大砲をも鑄造するに至つた。品川砲臺の大砲は實に佐賀藩の鑄造に係るものであつた事は世間周知の通りである。

幕府の末年に佛國大博覽會があつて日本にも其招待狀が來た。財政窮乏の折柄として日本よりの出品出席者は只だ幕府と鹿兒島と佐賀とであつたと云ふ。

貳拾幾年前には江戸から歸國の旅費にさえ窮した者が軍艦を造り大砲を鑄、留學生を出し、博覽會に出品するなんて、其當時に在りては實に破天荒の仕業である。

祖宗の遺烈は言ふ迄もないが佐賀は實に一國一人を以つて中興した、間違ひもなく其通りである。

現内閣の綱紀肅正、財政緊縮は上下擧つて鍋島閑叟公の心を以つて心としたい。出來ない事はない只だ決心次第である。

現在は餘りに不眞面目である。已が衣服を見よ、已が住居を見よ已が貸借對照表を見よ。財部海相がツエツベリン號を見て日本にもコンナ物二ツ三ツ四ツ位い、朝飯前の事となるであらう。

（四、九、八日旅行先）

【四八】

◇蛙を集める

三木一彦

○鮮展に自作の『蟇』を出品して、異彩を放つてゐるのは、佐藤曉關といふ、東京在住の蒐集家です。

○この人は、自ら繪を描くといふよりも、東西古今の『蛙』（畫及彫刻）をあつめることが、その本領だと聞いてゐます。

○今、東京では中橋狸庵の狸、大山柏公の象、巖谷小波の馬等々……知名の蒐集家が、ざつと七十餘名。その中で、佐藤曉關氏は、五指以下に下らず。『蛙』の蒐集實に一萬五千餘點。

金剛山

回天堂　森川湖東（本町三丁目）

一昨秋藥友六人節を曳いて天下の壯觀金剛壹萬貳千奇峰探勝に行脚せり。岐立岩層累々垂直碧空に聳へ、翠松巖頭に生ひ茂り、紅楓燃ゆるが如く、溪流に映じて千變萬狀滾々の聲を聞く。實に仙境靈地なり。偶々手帳を出して思出あり（稿三十錄十五首）

○長安寺

長安寺古歷千年。四顧潺緩響澗泉
淨域無塵秋寂寂。紅楓如錦滿山巔

○表訓寺

境在山中萬瀑東。伽藍壯大聳空中
禪床秋靜法燈冷。心界澄來古梵宮

○摩訶衍

淨界山深午寂然。奇峰繚石繞如仙
松楓隱見白雲裏。山氣莊嚴絶世緣

○正陽寺

淨地正陽離俗緣。吟筇閑適白雲天
黃紅葉樹如屏障。身入高山自寂然

○萬瀑洞

萬瀑清泉亘石間。飛流百尺碧潺緩
金剛氣勢又壯絶。紅葉吟看巖險艱
縱橫奇石響泉聲。紅葉爛斑碧水清
親友六人巖上題。喫茶一椀踏霜行

○内八潭

香爐峰下望蒼蒼。探勝八潭攀石行
忽訝滂沱如急雨。半日巖頭聽水聲

○普德窟

羅壁吞巖望不窮。孤庵迥在白雲中
躋攀偏賴金剛力。脫却紅塵世慮虛

○臼雲臺

危巖突兀白雲邊。鐵鎖托身登絶巔
俯瞰陰森千仞谷。北風颯沓起寒煙

○萬物相

奇哉萬相是金剛。鬼貌仙容幾低昂
天下壯觀塵世外。蓬萊千古鶴飛翔

○神溪寺

寺喚神溪額大雄。筆峰山畔紫雲通
中庭古塔羅朝跡。佛殿香燈今古同

○九龍淵

石壁千尋飛瀑前。銀河倒落碧淵深
誰知傳說神龍跡。山上八潭不見邊

○海金剛

日照芙蓉紺碧波。巉巖亂石海金剛
潮當島嶼亂成瀑。萬狀千形不可量

○叢石

心爽滄溟萬里風。六稜巖柱幾叢々
自然彫琢海中立。皓鶴來遊氣勢雄

○夢遊金剛山

竹杖茅鞋世外天。金剛山裏訪眞仙
夜寒夢醒衣衾冷。巉巖奇峰總漠然

たまにやぶらく遊びにござれ
かどにおくざの小唄坂

小唄阪

岡村介石（明治町）

今から約三十年位前でした。或る席上で、盛に私が俚謡正調の自慢をして居ましたのが氣に障つたものですか、突然同席の一人が、『耳無くて聽く』と云ふ難題を突きつけて、私に即吟を強請するのです。實に意外でしたが其瞬間さつと持前の負けぬ氣がきらめくと同時に、『耳は無くとも聽ゆる誠心願届いて神の告げ』と、即坐にやつつけました。同席の諸士の驚きも驚きでしたが、私自身も此時程快心を覺へたことは前後稀です間髪を容れぬ速さは全く暗記して居る既製品を讀むやうでした。

總じて作り盛つて居る際は眼中難題なしで、難題こそ却つて名吟が出來るやうです。曾つて日韓協約成立祝賀會の席上で『櫻咲かせた餘りの風が韓の柳の袖を引く』と唄つたこともありました。『月の眞が映らぬ筈よ水に浮氣の草がある』、之は平壤在職中の或夜、月の浮碧樓に立つて脚下の水面を見た光景であります。其の頃は藻が盛んに生へて居まして月が明らかに映ら無かつたのであります。

そうした趣味を持つ私の耳近く――この小唄阪を、登り下りの人々が十人十色の歌を唄つて通るものですから、思はず知らずペンを止めて聽耳を立てたものでありました。中には三丁四方の糠味噌が氣遣はるゝやうな梅印付の赤下手もあり、あゝ良い聲だ！と耳を澄まして伸び上り、自ら爽然たる氣持になる名人？もある。

そうした事實の結果が『人間は粋も不粋も小唄坂、登り下りて唄うものかな』で小唄坂と命名したのであります。之れは私が命名したと云ふよりも小唄阪自體が固有的に有つ事實が時運到來して名に現はれたと云ふ方が適當でありませう。

序に一つ小唄阪を高唱させて頂きます。

私は年來世間一般に行はれて居ります『謹賀新年』や『暑中御見舞申上候』と云ふやうな萬里同風的な月並の文句に飽き〳〵して居るのであります。殊に暑中見舞の如きは何等同感の興味を感じない却て其の葉書を頂いた爲めに厭や〳〵乍ら返事を書かねばならぬ暑苦しい負擔を覺ゆるのであります眞に心切から見舞ふのなら一時でも先方に精神的涼味を與へるものでなければ暑中見舞の意義を爲さぬと言ふが私の持論であります。

そこで私は昨年の暑中見舞に

たまにやぶら〳〵遊びにござれ
夏の夕の小唄坂
涼しい風が通るぞえ
たまにやぶら〳〵遊びにござれ
月の夕の小唄坂
トチも美人が通るぞえ
たまにやぶら〳〵遊びにござれ
月の小闇の小唄阪
唄ひ上手が通るぞえ
たまにやぶら〳〵遊びにござれ
かどにおくざの小唄坂
話上手もござるぞえ
たまにやぶら〳〵遊びにござれ
深い背戸井の小唄坂
冷し眞瓜を上げよぞえ

と書いて及ばずながら知友の暑勞を慰めたツモリであります。

◈光化門閑話

北漢山人

○田中警察部長は、昔から電氣が點いて、一二時間もせぬと、退廳しないといふ癖がある。

○體格もいゝが、勉强力も、群を拔いてるのである。

○但し部下の氣持の判らぬ人でない。『自分にかまはず、時間が來たら、サッサと、退出して欲しい』、口癖のやうにいふ。

○されど、部下の身になると、『ハイ、左樣ですか、然らばお先きに……』といふ譯にも行かず。『事、茲に至ると、畢竟體力の問題ぢやのう』

× ×

○その田中部長は、武道にかけても、頗る熱心。自ら率先して、劍道も、柔道もやる。それで、各課長や各署長も、ぢつとしては居れず。年寄りは、年寄り同士『お願ひいたしますかな』、『左樣、一汗掻くといたしませう』、コゝに天下太平の大試合が始まる。

○どつちも、腰は、ヒョロ〳〵です。『イヨー、しつかり〳〵』

○こんなことで、いつしか一般警察官の、平均力量がザット三四級といふところに、向上したさうです。

京城雜筆

チヤンゴクパプ

濱口良光
（徹新學校）

秋は味覺が新鮮になつてくる。食道樂は秋こそ活躍すべき時期だ平凡なものであるが、栗飯——茸汁——名をきいただけでも新鮮な氣がする。併し私はずつと方面をかへてチヤンゴクパプに興味をもつ（大變むつかしい名前であるが朝鮮料理の丼物である）、日曜かなんかに朝から南山あたりでもぶらつきまはり、晝前に朝鮮町に下りる、そして湯飯の看板の出てゐる家にはいつて溫突に足さしのべて暫くまつてゐる。するとやがて本題のチヤンゴクパプが大きな丼で運ばれる。見ただけでもう味覺は躍り出す。——この料理の內容は牛の乳部の肉を澤山入れてスープをとり輕く味をつけて飯とソーメン及燒肉を入れた丼に一ぱい注ぎ入れたものであるが、燒肉も普通の方法ではなく色々のもので味をつけた醬油の中に浸してよい味をつけたものである——代は普通二十錢、府廳の東側の武橋湯飯は隨分評判のよいものであるがそれでも三十錢、安いものである。

あゝ秋——チヤンゴクパプ——味覺は盛んに躍る。

求妻
三十歳位
再婚不苦
敎養必要

吾妹の死

福田有造
（釜山にて）

永刼の果てまで生きよ殘したる兒等の生
命も永刼にして
母に離れはらからにそむきトク子逝く殘
れるものゝ悲しき涙知らずや
思ひ殘すな兒等の身も心も靜にして育む
ものは多くあり
父も兄も既に逝く今また妹の逝く新なる
涙誘はんとするかやるせなや
如何なればかく死を急ぐや我が妹は秋の
初めにとわに眠りぬ
幾山河あゝ辿りゆく我が妹の旅路はるけ
しいつ果つるともなし
何事も知らで幼兒無心なれ母は逝けども
親は逝けども
兒を殘し夫を殘し突如逝く跡の歎き秋蕭
條として
兒等五人殘してありし母親よ三十二とせ
はいやに短し
母親に拜まれ給ふ身となればそを汝は如
何に感じ給ふや
汝が爲めに祈りしことも仇なれや母の思
ひもお法の山路に
物言はぬ淸淨にして世を去りぬ永久の眠
よ安らかにあれ（以上、四、九、一二）
哀れ亦土になるべき身なりけり火に燃し
たればとて靈は生き
魂は永久に歸りぬなきがらを葬るが爲め
火にする悲しさ
大なる力の許に招かるゝこれも世の常さ
けがたきもの（以上四、九、一二）

海上の建築に就て

松崎嘉雄（遞信局）

人をして最も畏敬の念を起さしむるものは何であるか、僕は力であると信ずる。限りなき狂瀾怒濤に接する時、何人か此の大自然の力に畏れざるものがある!!、堂々と雲表に君臨するやうな芙蓉の峰に接する時、何人か快哉を叫ばざるものがある!!、之れ即ち太古に於て天柱を碎いた大火山の爆發により、無限の『エネルギー』を以て地軸よりほとばしり出でたる溶岩、土塊の堆積から成つた所謂大火山の雄なるものが即ち大芙蓉であつて、その儘、動より靜の『エネルギー』として千古永刼に其力を示しておるからである。天涯より落下する『ナイヤガラ』の偉觀數萬噸の艦船の航走する壯觀等は孰れも之れ力の表現が吾人の腦裡を強く打つからである。關東の震災が名にし負ふ勇悍なる大和民族に一大畏怖の念を與へたのも、之れ亦大自然の力である。此力は社會の利益を增進する事ともなり、又社會を破壞することともなり、其の結果は實に測るべからざるものがある。僕は茲に海の建築に對して、此の大自然力が如何に横暴を逞ふするかの事實を一言したい。

今絶海の孤島に一大燈臺を建てやふとする、木材、煉瓦、『セメント』等多量の材料を大陸より運搬して、先づ之れを陸揚げしやふとするも、海岸は突兀たる絶壁にして元より道もなく、一朝颶風の來るあらば激浪の爲め材料の流失を免れぬから、多數人夫を督勵して、出來得る丈け短時間に安全地帶迄で、之を陸揚げしなければならぬ。故に恰も戰場のやふな氣分で人々は晝夜の別なく汗にまみれて活動を續けさせられる。或日の夜半颶風襲來!、見る〳〵中に怒濤の爲に海岸より數十尺の高所に揚げて置いた木材が奪はれんとし人夫は蟻のやうに協力して、これを防いで働らいてゐるうちに、一人夫は木材に取り付いたまゝ高浪にさらわれて、浪のまに〳〵救助を求むる聲も漸次かすかに冲へ〳〵と流され去つたが之れを救ふの方法もなく、遂に行衛不明となつた悲慘事もあつた。嗚呼如斯きは大自然力に對する人の力が、如何に無能なるかを示すと同時に絶海の孤島にも世に知られない貴い犧牲者の數あることを示すものではないか。而して之が完成に到る迄に要する假小屋、食糧、飲料水（主に天水）等を設くる非常なる苦勞を要する。僕は大都會に於て天を摩するの大厦高樓を見る毎に孤島に於ける燈臺建設の困難を想ひ出すと同時に、大陸に於ける建築家の幸福を想ふのである。之れ海上から見た陸上建築家の祝福觀である。

◈合財ふくろ

三木一彦

○戸嶋楢太郎といふ御隱居、いつたい何を商賣にする男か知らんが、近ごろ京城に出現。『×××メは、塚本清治だよ。清治といふ男は、なか〳〵やるぜ』と宣傳。それが妙に信者あり、御隱居の御機嫌を伺ふもの、引きも切らずとは、さて〳〵……。

× ×

○釜山瓦電買收の不認可になる一週間前、明瞭判然と、『アレはモノになりません。生田さんなど深入りするのは考へモノです』と豫言したのは、例の小唄阪の介石道人。今は、アゴを撫でゝ、『私の藝術は、萬事この通りで……へエン〳〵』

× ×

○西小門町に引越した高橋（章之助）辯護士間もなく大患に罹つて、月餘に亘つて臥床した。內地にゐる愛孃から、『ドコで見てもらつても、家の方位が惡いと申します。私ば、氣に懸つてなりませぬ。一日も早く他へ轉宅して下さい』、一代の剛勇頭を抱えて『ホイ……こりやえらいことになつたぞ』

× ×

○殖銀の矢鍋さん、ゴルフはやるけれど、決して爭覇戰には參加せぬ。矢鍋さんはまた、碁を樂しむ。しかし頭取一流の惡戰猛鬪は斷じてやらぬ。お相手は、東拓の澤田理事などで、禮儀慇懃、互に『ハーテ、これはお見事……』、『イヤ々々、御貴殿こそ』

京城雜筆

大邱から

河谷靜夫（大邱日報社）

あります。此人々は筆と牙籌とが兩立せないものと極めて居るので、笑はせられる事柄です。

△

頃日、主筆も內地からしてまゐりまして少閑も得ました。博覽會の幕も切られた樣だし、南山北嶽の錦繡も點綴せられてる事と思はれますので、拜委したいと思つてゐます。

但しこう落ちついてゐるやうですが氣まぐれで、執筆の持ち合せのない私、いつ飄然と京城人とならぬとも限りません、『地方人待遇』は御見合せおき願ひます。

△

松本さん、申譯のない御無沙汰を働いて居ます。私、最初當地の知人から『大邱日報で經營者を探して居る、やつて見ないか』と云はれて、京日を辭めて五年にもなり、少し脾に肉を生じて居た時でもあり、難局には相違ないが一つやつて見やうと思つて其旨返事をしておきました。

△

すると其知人君、濱崎さん（大邱日報の現社長）に會へとか、今村さん（慶北知事）に會へとか、注文をつけて來る、催促されれば會ふ、其結果三月の末に身賣り話しが決り、四月の初めから手をつけて見ることに取りきめたのです其時も、私の住居は京城にをいて月の半分は京城に居ることに話したのです。夫れが慇々手をつけて見れば仲々左樣に簡單にまゐらぬのに弱つて居るのです。また一面經營的に向上しつゝある數字などから來る興味にもひきつけられ、今は殆んど當地で起居して居て偶に出城しても一泊や二泊でそこそこに引きあげる有樣で舊知の皆樣にも失禮してる樣な次第です。

△

閉口したのは、七月の中旬來主筆編輯局長の突然の退社で、後任出來まで慣れぬ私がそれをやつて見たことです。セツセと圖書館通ひをやつたり、書架から飾り物だと思つた書籍を引き出して見たりして苦熱百度の大邱の夏を過したこと心窃かに愉悅を感じてゐます人からも賞められたり激勵を受けたりしてをります。

中には滑稽にも社說は河谷の書くのではないなど言つて廻る人も來る。

○中でも、二番目の坊ちやんは學業の外に、碁が滅法强い。歳はマダ十一二歳である。

○お父うさんが、カン〳〵になつて向ふが、テンデ物にならぬ。碁の筋が違ふ。お父うさんが、二十分考へて『サアどうだ。參つたか』、パチンとおくと、チラと眺めて、『フフお父うさん、相變らず凡手ですネ』、ビクともせぬ。鼻の先で笑つてゐる。憤慨の至りに堪えぬ。以來お父うさんは『お前の碁はどうも不愉快でいかん。俳味がない。俺ア御免を蒙る』

○專門棋客にし給へと、方々から勸められてゐる。

× ×

○平壤の料亭喜樂の主人は、一寸風變りの人物で、『鎭南浦に林檎あり。黃海道にアンズあり。そして、平壤にジャムの製造會社がないといふのは、一體どういふ理屈です』、時々客席に出現して、奇問に及ぶので、醉客俄にゐずまいを直し、『ウヘーその儀は』

◈記者の手帳

漢江漁郎

○大浦貫道師が、仙崖和尙の寒山拾得の一幅を持つてゐた。

○京都の某山の大和尙が、それを見て、『俺にしばらく樂しませてくれ』

○預けておくと、ソコへ細川侯が來訪。『和尙これを見ては、素手で東京へは歸れぬワイ。しばらく借用に及ぶ』

○以來十五年、細川家では、逸品中の逸品となつて、『どうですこれほどの仙崖が外にありますか？』

○それアいゝ。されど寂しいのは、大浦師だ。談仙崖に及ぶと、『皆の衆、斯ういふ譯です。私は一體どうなります』

× ×

○本町署の細上高等さんの坊ちやん達は、擲ひも擲つて頭が良い餘り勉强しないで、學校がよく出

し、其の息子等の七人を殺した。第八番目の子供が但だ一人生き殘

トルストイ原著 高架索の囚人（その一節）

瀬野馬熊譯
（朝鮮史編修會）

九

或る日ユリアヌは此の老人が住居せる家を見んと欲して山の方向へ散歩した。緩かな傾斜の道を下りて行くと、彼は其處に煉瓦塀によつて圍まれたる小さい花園を見出した。壁の後には櫻や桃や杏の木等があつて其の間から平たい屋根を持つた小屋が隱見してゐた。

ユリアヌは其の壁に近よると、其處に二、三個の蘭の蜂の巣を見出した――其の周圍には蜜蜂がブン〳〵音を立てゝ――其時彼はもつと壁の中をよく見ようと思つて彼の足を爪立てて背延びをしたが其時彼の足に附着した足枷が喧しくカラ〳〵と鳴つた。と、花園で何かして居た老人はこれを聞付けて振向いたが、彼はユリアヌを見付けると一聲叫んで彼の皮帶からピストルを取り出し、此の若い士官に發砲した。ユリアヌは危く身を躱はして大きな梨の木の影に隱れて彈丸を避けた。

激怒したる老人は、ユリアヌの主人の所へ行つて、事情を訴へたアブダルは此の囚人を彼の前に呼出し、いつもと變らずにこ〳〵しながら、『何故壁の上から中を覗いたか』を尋ねた。

若い士官は此れに答へて言つた『私は此の老人に對して何も惡い事をしようと云う考は少しも有りませんでした。私は但だ彼がどんな生活をして居るか、それを知らうと思つたばかりです』

激怒を以つて禿頭から湯氣を立て乍ら老人は彼の二本の牙齒を剝き出し、ユリアヌの方を指し乍らしかる樣な聲で何か云つて居たがユリアヌは早くも彼が彼を殺すか又は村から追出すか何れかにしろと云つてアブダルに乞ふて居るのだと云ふ事を知つた。

老人が彼の憤怒を充分に吐き出して歸り去つた後。ユリアヌは此の怒りぽい性急な老人は何と云ふ人であるかを彼の主人に尋ねた。するとアブダルは此に答へて、

『彼は此の地方では非常に重要な位地に居る人で、吾々の主領株とでも云つてよい位だ。嘗つて彼は澤山の露西亞人を殺した。彼は非常な金持で、三人の妻と八人の息子とを持つて居る。彼等は皆同じ村に共同生活をやつて居たが、一日露西亞人が來て其の村を破壞し、其の息子等の七人を殺した。第八番目の子供が但だ一人生き殘つたが、是れは敵に降參してしまつた。そこで老人も敵に降參して何處迄も彼等に服從すると僞つた三個月の間彼はロシヤ人等の內に居たが、終に彼の息子に出會ひ彼を殺して逃れ去つた。其後彼は決して戰をせず、アラアに祈禱せんが爲メッカに順禮した。彼はロシヤ人たるお前を非常に憎んでゐるそしておまへを殺してくれと私に乞ふた。併し私は決してそんな事はしない。私はおまへの爲澤山の金を拂つてゐるし、且つ私はおまへが非常にすきに成つた。だから私は決しておまへを殺さない』

そう云つて彼は大聲たてゝ笑ひ出した。――おまいはいい男だ。私もまたいゝ男だ。――と幾度もロシヤ語で繰返し乍ら――

ユリアヌはこう云ふ狀態で尙ほ一個月間そこに生活を續けた。

晝は村の近所を彼方此方と散步するか、又は何か仕事を一生懸命になしつつ――夜に入つて世間が靜かになると彼は彼の小屋の壁の根本をせつせつと掘つた。石が多いので事業が非常に困難で、石を除ける爲に屢々鑪を用ひねばならない事もあつた。けれど彼は終に人の體が十分通過し得る程の大きな穴をあけた。

彼は獨言を云つた。『今私は何の方へ進めばいゝか、それを知らんが爲には此の地方を十分踏査せねばならぬ。併しこれについて恐らく私に其の知識を與へてくれる者は有るまい』

或る日彼の主人が留守であつた時に、彼は村はずれの方へ散步に出かけた。そして、それから彼は附近を眺める爲に或る山に登り始

京城雜筆

めた。

當時旅行に出掛けて居たアブダルは出發するとき、彼の小供の一人に十分ユリアヌを監視し、彼が行く所には何處にでも跟いて行けと命令しておいた。そこで小供は此の若い士官が山に登らんとして居るのを見ると直ぐに彼に注意した。『お前は其處に登つてはいけない。私の父がそれを嚴禁したのだ。もしおまいが歸らないなら私は行つて澤山の村人を呼んで來るぞ』

それでユリアヌは彼と相談を始めた。『私は今、或る藥を得んが爲に植物を探してゐる。それでたゞちよつとあの山に登つて見たばかりだ。疑ふならおまへも私と一緒に來い。おまへが知る通り私の足には此の足枷があるので私は遲げることは出來ない。お前が私の云ふ事を聞くなら明日、弓と矢をお前に拵へてやらう』

子供はそれに同意して二人一緒に出かけた。

◈丁子屋新舘

三木一彦

○丁子屋の新舘は、いよ〳〵出來上つた。

○先月二十一日から開舘した。

○舊館と合せて、實に堂々たるものだ。大丁子屋のよそほひは、これで全く宗成した。

○獨り洋服ばかりでなく、帽子賣場、化粧品賣場、新設呉服部から、東京足袋の賣場まである。

○『御買よき店』『明るき店』そして『お安くて、良き品物を提供する店』

○鬼に角丁子屋へ……。

◈二つの新著

北漢山人

○京城で、最近に出た書物では大浦貫道師の『死線に立つ』、高橋源太郎氏の『朝鮮つてどんなとこ』など、最も心を引かれたものである。

○『死線に立つ』は、國境に駐在する警察官、及びその家族達のことを書いたもので、その挿入の寫眞版を觀、著者の同情溢るゝ如き文字を見ると、幾たびか暗涙に咽ぶ。

○國境哀話、國境感話の外『靈鐘を撞く人々』の中で日韓合併の功勞者武田範之和尚その他の逸事を傳へ。卷末に『朝鮮いろ〳〵』と題し、風俗習慣、その他興味ある童話まで採錄してある。好著である（定價金貳圓）

○『朝鮮つてどんなとこ』、全文問答體になつてゐる。如何にも簡潔にして明快である。

○朝鮮の面積、人口から始まつて、朝鮮料理、妓生、十歳のお婿さん等々……、風俗習慣を概叙し『京城見物』より、各道の偶々に至る。實に親切なる朝鮮手引草といふべく、また我々の好參考書ともいふべし。

○裝釘、製本また頗る氣の利いたものである（定價金一圓）

雜詠

元山にて　新田如氷

朝燒や人影もなきキャンプ村
遊船や日除かたむけ雨の中
投げらるゝ西瓜眞瓜に泳ぎよる
蚊遣火に潮吹く風のありやなし
新涼の壁に影もつ葉鷄頭

元山にて　新田時子

此土地の妓もまじりゐる泳ぎかな
泳く背に浪うちかむり〳〵
鮎賣女芦の淺瀨を渉り來ぬ
釣床に松籟を聞くうつゝかな
遊船の日覆に雨をしのぎけり

求職

鮮人廿一歳
筆蹟見事也
新聞社希望

飲んだり喰つたりデレ々々する時

舶來節約漫談

廣江澤次郎
（大和町）

過去十年間散々不景氣の毒瓦斯に惱まされ、經濟的危機に瀕して居た日本を救ひ出さんと、濱口內閣は敢然金解禁を叫び、緊縮を斷行し、消費節約を極力宣傳し、新聞に雜誌にパンフレットに、演說にラジオに、閣員擧つて、大車輪で活躍し始めて呉れた事は、私共の欣快に堪へぬ所だ。

金解禁も複雜な作用を經濟界に及ぼす難事業であり、解禁後尠なくも二ケ年は深刻な不況が續くであろうが致方ない、歐州大戰中世界で四十四箇國金の輸出禁止して居たが、一九一八年大戰終熄して翌年六月二十六日先頭に米國が解禁し、現在では四十箇國解禁した頑張り續けの醜體を演じて居るのは世界でタツタ四ケ國だけだ、此四箇國とは曰く、

日本、西班牙、勃牙利、羅馬尼

世界の一等國だ、東洋の盟主で候のと豪嘯して居り乍ら此七轉八倒振りは實際泣きたくなる。今更ら死んだ赤ン坊の年を數へる譯じやないが、大正八年末迄は日本の在外正貨も十三億四千二百萬圓あつたのだ、此時分に斷行して置いて呉れたなら、創痍も淺く國民の苦痛も尠なくて濟んだのに……。國民も安保丹なら政治家も案外不親切なものじやつたノウ。

× ×

駐英森財務官の土產話に、倫敦市場には五十數箇國の公債や社債類が上場されて居り、量に於てはロシアが筆頭で日本が拾壹億三千萬圓に達して第二位だが、信用程度は暹羅（シヤム）の公債よりも劣りて五十數箇國中日本は十五六番目だそうだ、何んとなさけない話ではないか。

併し濱口內閣の國際的信用は素晴らしいもので對米爲替も四十七弗臺に引戻した、四十九弗八十五仙と云ふ平準點も、國民の覺悟決心次第で遠くはない、一切の準備を整へて金解禁の斷行を急ぎ、對外的には信用を恢復し、對內的には貨幣の自働的調節機能を旺ならしむべきである。對外爲替を平調ならしめ置かざれば、昭和六年一月一日滿期の第二回四分利附英貨公債二億二千八百九十萬七千圓をドウするじやらうか、借替にしても不利を忍ばねばならず、實際國民はボヤ々々して居られん！。

本年上半期の輸入超過は三億五千萬圓に達した、下半期で馬力かけ貳億圓取戻した所が、一億五千萬圓の入超は免れまい、國民の消費節約と輸出振興大聲叱呼せねばならぬ筈じや。

× ×

西洋人は最近簡易生活（シンプルライフ）を目標とし、益々節約の徹底を期して居るそうだ、宴會も大抵午餐會で簡單な物でサツサと用談を濟まして散會するさうだ、日本の宴會と來たら始末が惡い、時間通り集らぬ、飲んだり喰つたりデレ々々する時間も永い、不良性を帶んだ主人側や來客は月末に尠定書を見て吃驚仰天する癖に一杯機嫌で二次會などに惑溺する、コウ云ふ不良分子を擊滅して淨化せねばならん？。

歐州人も成金國のアメリカ人も生活に眞劍味を帶んで來た、彼等は何事も簡單々々と叫び出し、鬚を剃り落す事が流行し、ステツキを携へぬ者が激增し、短靴が流行して編み上げ靴を履く者は、老人かオシヤレだと擯斥され、米國ではモーニングやフロックは前世紀の遺物の樣に取扱はれ、如何なる王侯貴人の所へも背廣服で押ツ通すと云ふ徹底振だ、日本の社會も此歐米最新思潮を取入れて簡單生活化の實現を期そうでは無いか。

顧れば私共の日常生活には大英斷を施さねばならぬ事が多々ある特に婦人の覺醒と努力を煩はさねばならぬ事が尠くない。

× ×

日本のKと云ふ教育家が、獨逸で某家政女學校を參觀したら、女學生が一生懸命に皿を洗つて居た手はフヤけ赤くなつても平氣である、Kさんは眼を丸ふして、父兄から苦情が出はせぬかと校長さんに訊ねたら、校長さんは苦笑して

『獨逸の女が皿の百枚や二百枚洗つて手を痛めるような惰弱な事で將來どうしますか、勿論女學生も喜んでやり父兄も苦情など決して申す譯がない、總て教育の實際化が獨逸の特色です』

Kさんはスツカリ感心して、更に他の小學校を參觀し、六年生の女生徒に質問して曰く、

『貴女は此學校を卒業したら何をなさいますか』

女生徒は羞かしい樣な顏もせず昂

京城雜筆

然

『私は學校を卒業したら女中に行きます』

女中に行きますとの返答に、Kさんは重ねて『何の目的でか』と追究したら、此の獨逸少女は最も明確に

『女中に行つて結婚の用意にお金を貯めるのです』

僅か十六才の少女にも此實際生活に就ての決心が閃めいて居る、此少女の健氣な決心と態度にKさんは感激して、思はず眼に珠の露を宿したそうだ。獨逸では教育が如何に實生活と緊密に結び附いて居るかの證左として、此話をゞ披露する次第である。

顧みて日本の實社會と教育の方法はドウか、昭和維新の斷行を痛感せざるを得ない。

秋の山

徳野鶴子（櫻井町）

朝餐服で電車に乘れば切符きりはわれに親しくものを言ひかく

ざはめきの町をさかりてたま〳〵に山に來つればさみしかりけり

きのことめて松山ゆけば原草にしん〳〵として秋の氣はみてり

眞晝間をしづもり深き松山の草むらになく虫しきりなり

初茸をさがしつゝ來し山ふかみ小草の露に足ぬらしけり

松山の草原に射す日光にも深める秋の色さやかなり

たまさかに見つけてとれば食べられぬきのこなれどもすてがてにつつ

谷ゆけばあさき流れに枝たるゝ野萩の末は洗はれてあり

きのことると草のしげみをさがしつゝ松山のなかを歩みつかれぬ

松山のなぞへに立ちてあほぎみる木の間にしろき晝の月かゝれり

◈將棋風聞記

北漢山人

○將棋の辻六段を中心にして、土曜會といふのと、水曜會といふのがある。

○土曜會といふものは、內務局土木課の技術家を中心としたもので、本間（德雄）さんが、これが總帥となつてゐる。

○水曜會は、判事、辯護士、畫家といつたやうな混合團體で、地方法院の脇判事が、采配を揮つてゐる。

○本間氏も、脇氏も、辻六段に香落で向つてゐるから、四段の技倆は、十分である。スルトその本間氏に、香落の横井、橋本兩氏は勝くとも二、三段はタシカだ。

○また脇氏に、香落の池田、加藤兩氏が、これも二、三段といふことは、否むワケに行かぬ。

× ×

○ところで、兩會の總帥同士ー本間脇の兩大將が、この夏一騎打の大勝負をやつたさうな。慘烈凄壯な大棋戰ー、息づまるやうな場面を現出した。但しこの勝負一勝一敗に終つた。

○強いものゝ考へるのは、當然のことだが、この兩公などは、特によく熟考する方で、一手平均三時間……。その間に敷島を二ッ宛フスべるといふから、一局を完了する迄には、勝くも大箱（廿個入）十五箱（二人で三十箱）灰にするワケだ。これで專賣局から、頌德表の來ぬのは、ナルホド局は頭が悪いといふ結論になる。

○序に申す。近々お馴染の矢野七段が入城。當分大和町横井氏官舎に滯在の筈。

狐の話

梶村正義
（城大醫學部）

私の家庭に滿二歳になつた男の子がある。いたつて元氣なのはいゝのだが、夜眠る迄惡戯をして家人を困らせてゐる。パパ、ママを始め世の中に何一つ恐しいものはないといふ顏をしてゐるが、獨り『ケンケンバカソウ』と稱する狐丈は例外である。すこし聲色を變へて『ソレッそんなに無理を言ふと、ケンケンバカソウオが來るよオ』と云ふと顏色かへて逃げ出す

此の子供狐を恐ろしがるそもそもの初めはいたつて卑近な理由から來て居るのだ。此男の子は何でも彼でも目に附く物を手なぶり度い癖があつて、祖母の眼鏡等幾つ壞したか知れない。北京から買つて來た狐の毛皮が洋服タンスに掛けてある。ワンワンが好きなのだからいづれ狐の毛皮も玩具にされてはたまらないといふので、以後此の毛皮を見る毎に『ケンケンバカソウだよ、こはいよ』と云ひ慣してから何となしこれが氣味の惡い者になり、動物園でも象や熊や羊は實に仲よしだが此の所謂『ケンケンバカソウ』丈は幼心に一種の不安と恐怖をさへ感るらしい。

で私は狐を特に男の子に恐しいものだと警告する事は理由のあるよい事でなからうかと思ふ樣になつた。その理由は讀者が私の話を聞いてゐる裡に自然とお氣付の事と思ふ。

古來狐に就ける傳話は甚だ多いがその起源は本朝より支那の方が古い。支那では既に楚の軍略に狐の才智を應用したのがある。それは極く童話めたい話であるが、要するに虎が狐を食はんとしたのに狐は吾れを食ふとは天帝の命に逆く。うそだと思ふなら貴公我背後に從へとて歩き出した。百獸は小さい狐の背後から來る猛虎の姿を見て逃げるを虎はてつきり狐が怖いのだと思つたといふのである。

斯んなに才智すぐれた狐だから支那ではまた狐をめでたい生き物祥瑞の獸として玄狐と稱した。本朝に於ても之を稻利社に祀つた。稻利社は元明天皇和銅四年二月十一日鎭座すと記されて居る。元來稻荷さんに狐が配されたとは緣もゆかりもない處にまんまと狐が、本朝宗教史上に一杯喰したものである。

昔空海といふ僧侶が如何に衆生を濟度せしむ可きやといふ實にむつかしい事を考へて毎日自分の狹い薄暗い室を獨り彼方に行つたり此方に行つたりして居た。恰度動物園の檻に閉ぢ籠められた狼が鐵柵から外をのぞきながら檻の中を行つたり來たりする樣に。

或る日空海は茫然と空想の檻から野に立ち出でた。

今や秋實れる田の面は收穫に忙殺されて居た。野に出た者の中手をこまぬきて立つて居る者は空海獨りであつた。老若男女は傍目も振らずに働いて居る。その樣子は眞に猫の手も借り度い程であつた。墨染の破衣に懷手して此の光景を目の邊り見せつけられた三十に近い青年空海が、廻りくどい哲理に生き是れに依つて濟世の途を開かんと日夜惱みつゝある自分自身をどれ程みすぼらしい姿だと思つたであらうか。然し當時空海が考へて居た所謂濟世の途とは農村問題を解決して田野の疲弊を矯めやうとか社會問題を研究して共產主義や貨銀分配法を確立しやう等といふきわどい腹案はないらしい。只勞働神聖說に大いなるショックを與へられたといふものだ。所詮薄暗い室でつまらない事をクヨ〳〵考へて居ないで此の澄み切つた秋の空の下でたくましい筋肉を振つて尊い勞働の汗の香を臭いで見たい位思つたのだらう。

秋の日は釣べ落しに暮れかゝる。房々と實のつた稻の束を彎りくねつた背に脊負ふて危なげに歩いて來る老翁、野らの仕事を了へた道具と自分の背丈より數倍大きな莚を引づりながら後から從ひ來る童子。空海は元より此れが何の誰かは知つては居たらうが今は實に何ともいへない只尊い姿をして聲も出し得ず恍惚として見とれて居た。たとへば常に自分が用ふるモデル女の生き寫しだとは意識してゐても、出來上つた彫刻を展覽會場で見た時のよそ行きの氣分よりも空海にはもつとうれしく感じたであらう。

フランスに曾てミレーが在る先に本朝空海は既に田園の禮讚を惜まなかつた。若し彼が繪筆を持つて世に立たん程の人なれば早速此の老翁と童子との姿を描いたであらう。そしてそれはミレーに先手

舍に潛在の筈。

【五八】

權を取られない以前にその時代の革命的功績を擧げて居たであらうけれども彼は宗教家である。彼は此れを自分の體驗宗教の主體とせん事を決心した。輸入思想、模倣宗教、佛教傳來の日に空海の此創意的決心は實に時代思潮の革命でなくて濟まふか。彼は直ちに大山祇の女神倉稻魂神土祖神の三座を祭つて之れを稻荷社と呼んだ。

此の神々の名を見た丈でも稻荷社に狐を祀つたのではなく、實に豊葺原瑞穗の國の祖先崇拜の精神より生れたものだといふ事がわかるであらう。

處が如何いふ思ひ誤りからかは知らぬが或る時恐ろしく威嚴のある——といふより面あつかましい老狐が居て稻荷社の宮司に申出でた。

その事は古事由來を長々と述べ立てて到頭宮司を說き伏せたものだが、こんな議論は恰度カルビンとルーテルとがキリスト教の三位一體論や贖罪論や受肉降神なんかの雲の上丈で通用して毎日のオマンマには何の關係も惹起さない。まあどうでもよい議論を三日間休みなく戰はしたといふその速記錄を見るより更に殺風景なものに屬する。

してその論旨は要するに二つである。

第一は狐は元來祥瑞の獸として當然人間からあがめられる可きものだと山海經の文句を引用して自家廣告をやつた事と、第二は狐の神靈こそ稻荷社の御神體だとの事である。

即ち稻荷社は宇賀美多麻（倉稻魂）と稱する稻の神で之れを一名御倉津とも云ふ。處が例の理窟屋の狐が之れは『三狐神』の誤りであると云ひ張つて、到頭稻荷大明神の御神體に自分の姿を彫らせて安置せしめた。素より素賢い狐の事であるから自分等の宗族をかり集めて有らゆる奇怪な術を應用して此處に參詣人が增えてお祭錢も從つて多くなり宮司の御神酒代にも心配せない樣になつたところか鳥居やお宮も續々建つといふので大繁昌を呈して大層宮司の信用を得た譯である。

處で此度は肩書に於ても確立する必要があるといふので正一位を戴く樣になつた。後世正一位の出處を調するに何等の確實な證文が殘つて居ない。何んでも從二位迄はたしか古事記か何かに戴つて居たとか誰かゞ言つて居たが正一位等とは實に自分勝手な稱號だと後世の考證家は皆憤慨して居る。世の中に是れ程ヅウ〳〵しくば實に徹底したものだ。

支那に則天武后といふ女にして皇帝と稱した支那唯一の女傑がある。十四歳にして唐の太宗に事へ寵を蒙つた。廿四歳で太宗は死んだ。此度はその子高宗に絕愛されたが其の巧慧と權數は三千の美人はおろか數月にして王皇后と淑妃を壓倒し、卅二歳に皇后となり前の皇后の手足を斷ちて淫甕の中に慘死せしめ、高宗眼病となりてより彼女は專ら政界を獨裁し、高宗崩後は自ら天后と稱し天下を政めて英雄を駕御してガタともピシとも言はせなかつた。

斯うした女王に妖僧は付き物である。武后に媚びる僧侶は武后を彌勒佛の下生として、彼女の姿體を刻んで之れを衆生に禮拜させた武后はその間肉慾生活實に猛烈極まるものがあつたと云ふ。

女が神になつたりする事は本朝でもある。今や狐が神に成ると共に女にもなる。

抱朴子は續無名著に狐壽命八百歳人に化する時はすくなくとも三百歳の後である夜尾を擊つて火を發し髑髏を載き北斗を拜して則ち人に變化すると曰ふ。又別に倭名類聚抄には『狐能爲妖怪至百歳化爲女也』とある。

狐が女になつたり神になつたりする世の中である。淫婦が神になる程の事が何の不思議であらう。

稻荷社の繁昌から見れば何處かで狐が空海の發心を笑つて居るであらう。否感謝して居るかも知れぬ。然しモダン狐から謝禮される空海こそいゝ面の皮だ。否時世が時世だといへばそれ迄だが、もうちつと筋道が通らないものだらうか。其處でキリストも『狐は穴あり空の鳥は巢ありされど人の子は枕する處だになし』こぼしたのも尤もな事だ。

昔から狐が女に化けて人間の男と戀をし、夫婦生活を送つて子供まで出來かして置きながら、何かの理由は有らうにしても——いづれ新しい女性の覺醒だとかノラ式の行動だとか理屈はどうとでもつかうけれど、『戀しくば尋ね來て見よ和泉なる信田の森のうらみ葛の葉』等と情のある樣な無い樣な思はせ振りタップリな一首を殘して家庭を逃亡する。

後で男が此歌を讀んで『ついの今まで妻ぢあ夫ぢあと呼んだものを、あれあみんな狐の變げか』と今更我子の顏を見なほすといふのがお芝居である。

さて斯うした女性が狐か人間か理のはかつたものであるものか。フランスにマリイ・ロウランサンといふ閨秀畫家がある。淡紫や水色やぼやけた樣な桃色を配色して幽靈の樣な女を描く、毎時も眼丈が既に狐と同類だと意識する樣になつて楚國の軍略をそのまゝ利用

◈番茶の匂ひ

色やぼやけた樣な桃色を配色して幽靈の樣な女を描く、毎時も眼丈は思ひ切つて生のアイボリイブラウクを使つてゐる。首が細いフランス娘の目丈がギロ〳〵して如何にも神經質で所謂謎の目である。此畫面に時に狐が描かれてゐる。狐の顏が女人の樣で女の顏が狐面の樣だ。見れば見る程どつちがどつちともつかない樣になつて來る錯覺か現想か知らないが終には畫面全體が狐の樣に思はれ、さては展覽會場に來て居る婦人連中から看守女迄も狐の顏をして居る樣に思はれる。

さて現代女性の觀た女性なる者が既に狐と同類だと意識する樣になつて楚國の軍略をそのまゝ利用された日には男性は安心して歩かれたものではない。

處が『娘化粧すりや、狐がのぞく』といふ事がある樣に女が狐の上手を行く樣な世の中だ。

斯う世の中がブツソウになると男である事が心細くなる。と云つて男に生れたのが因果ぢあ、今更女に鞍替えも出來まい。所詮仕方がないといふ事になる。せめてよう〳〵眉毛にコツテリ唾でもぬつて歩かないと飛んでもない狐にぶつかりますぞな。世の男達よ。

◈番茶の匂ひ

漢江漁郎

○役人を罷めた後、如何にも健氣に奮闘してゐるのは、元鎭南浦の府尹などをしてゐた深川傳次郎君だらう。

○罷めるとスグ東京に走り（家族は京城にゐる）娘さんのお婿さんと一緒に、辯護士をしてゐる。

○何んしろ、子女十何人といふ子福者。ぢつとしてはゐられぬ。昔司法官をしてゐた經驗をタヨリに獅子奮迅の勉强、今では大に信用を博し、事件輻湊してゐるとはヒト事ながらうれしい。

稲の花と栗

角田不案

東大門外をゆく

照埃りかつぐ路傍の田の稲の花の盛りなり花のこまかさ

眼のかぎりつづけり稲田しんとして稲の花盛りの日和の暑つき

稲の花あまき香りの野路をゆきつ住みかねて去りしくにの戀しく

青き穂の日にあたるいがは黄ばみもち新栗は匂ふ栗山のさわやか

秋茄子を竹籠にちぎり居れり洗足なる田舍娘は日にやけりけり

南山の裏山深くなばを採りて

山のなかになばをとるべく深く入りてやまおくどに妻をよびけり

折々にをらべは畫の山の深かく風にまじりく妻が聲のはるか

山を深かく畫をひつそりと妻と子と我等三人なりなばをとりにつつ

とりしなばのかごのかたへに山深かく眞白き握り飯を食うべゐにけり

松山の靑草のなかにひらき食うべる白き握り飯のひるげのうまし

食うべゐる白ろき握り飯に山松の古るき枯葉のふりかかり來る

毛臑あらはに握り飯を食うべる山の畫を黑ろき山蟻の大きかりけり

握り飯を食うべて居れば峰にはるかに深山頽白がなきて居れり聞ゆ

梨とこほろぎ

子供等のいねたる秋の夜をおそく食うべる梨は水の滴たりつ

水の多くして滴たる梨の大きみの水のゆたかをたたえつゝ食うべる

水の滴たる梨を食うべぬこほろぎよ秋の晴夜の空の眞靑なり

晴れわたる夜空の靑さものみなは月の光に濡れてゐるなり

題知えず

さしなみの隣の家もひつそりと秋の眞畫をかまつかは燃ゆれ

子供等はいまだかへりてこねばやまひ妻とひるげの膳に二人しひそかなり（四、九、一〇）

品川雜記

中島司（中央朝鮮協會）

拓相官邸の夜宴

八月二十八日の夕、麴町下二番町の拓務大臣官邸で松田拓相主催の晩餐會が開かれた。客は朝鮮總督齋藤子爵、中央朝鮮協會長阪谷男爵、同顧問水野錬太郎氏、其の外總督府の生田局長、白銀事務官近藤秘書官、中央朝鮮協會の尾崎石井兩專務理事などで、不肖も陪席の榮に浴した。主人側は松田拓相、小阪小村兩次官、武富參與官を初め主な高等官の人々で、近く赴任の齋藤總督を送別の宴とあつて主賓は即ち老總督であつた。

何がさて緊縮內閣の拓相晩餐會とあるからには、その待遇は懇切でも御馳走は氣は心の質素なものかなと、失禮ながら勝手の推測を致して參つたが、どうしてどうして、名實共に立派なデンナーであつた。

何しろ拓務大臣には岸秘書官が附いて居る。星霜二十年の間ホテル業に關係し、帝國ホテルで鍛いた腕で最近まで熱海ホテルを經營して居た岸さんだ。今日は秘書官でも、たゞの秘書官じやない。拓務大臣秘書官兼官邸ホテルマネージャーとして多年のうん蓄を傾むけて、齋藤さんや阪谷さんをアッと言はせやうとの趣向が、『どうぞ食堂へ』と案內された食堂に入つてテーブルの前に立つと、成程なあと肯づかれた。

頗る大きな橢圓形のテーブルに飾られたのは花でなく、非常に凝つた金剛山の一大盆景だつた。千山萬岳の姿、さては海金剛までも配したのに齋藤さんや阪谷さんが『イヤア、これはこれは』と感嘆された。岸さん先づ鼻が高い譯だ。さて御馳走はと云ふと、そのメニユウが又金ぶちで肉筆淡彩で金剛山が描かれた氣の利いたもの。獻立は

一、めろん
一、すーぷ朝鮮
一、鯛日本燒
一、小雞煮物野菜各種
一、あすぱらがす
一、桃氷菓子
果物御菓子

とある。すーぷ朝鮮とは淸羹に鷄卵入り、即ち鷄卵で朝鮮をきかしたもの、鯛日本燒は八寸ばかりの鯛鹽燒の側におこわが盛つてあるつまり尾頭付き赤飯で齊藤さんの門出を祝はうとの心盡しだ。さすがは岸秘書官の思ひ付きだと阪谷さんあたりから稱讚の言葉が發せられた。主客約二十人、長圓卓をかこんで何となく打解けた水入らずの宴會といふ感じで、松田拓相の主人振りも飾り氣がなく、一堂に和氣が滿ちた。乾盃の時のシャンペン、これが今夕の御馳走中の花形で、外務省秘藏の虎の子、本場の佛蘭西でも滅多にデーブルに出ないといふ逸品を多分小村次官の顏で分捕られたのだらう、『これだけは外では一寸召し上られません』と岸さんが自慢しただけに齋藤さんも『結構々々』と舌鼓を打つて居られた。

心のこもつた晩餐會で、主客まことに陶然として、食後は松田拓相、齊藤總督、阪谷男、水野さんを中心に座談の花が咲いて夏の夜が更けた。

【六〇】

◇大隊長の話

漢江漁郎

○東亞法政の田村氏、昔、入營中に、出雲の片田舍へ演習に行つた。

○泊まつたのが、十年の役に、乃木さんの馬丁だつたといふ老人の家。そして將軍の書を、紀念だといつて、一枚もらつた。

○大隊長が、それを見て、『粗末にしちやいかん。除隊になるまで、拙者に預けておけ』

○除隊の日に、『一寸來い』といふ。行つて見ると、『お目出たう。これは、ワシの寸志ぢや』とある。包を開くと、紋服上下、それに袴を添へてある。恐惶頓首……例の書のことなど、迚もいへたものでない。

○乃木さんの書が益々尊いものになる。一字何百圓何千圓といふ。田村氏アノ書を思ふこと切實。だが、大隊長は、少しも拔ケ目がない。毎年歲序の賀狀を怠らず。しかも、その末尾には、『貴兄紀念の乃木閣下の書、以來我が家の家寶として、朝夕禮拜を怠らず。本件については、貴下また決して意を勞し給ふなかれ』

知らずに濟むことであらう。

如何に短いことよ。それは僅にコ

つてテーブルの前に立つと、成程なあと肯づかれた。

場の佛蘭西でも減多にテーブルに出ないといふ逸品を多分小村次官件については、貴下また決して爲を勞し給ふなかれ』

京城雜筆

ひとり言

オモニー

永樂町人

二十年近くも朝鮮に住んでゐてその間、幾人の鮮童や女中を使つたか知れぬ。されど、彼等にして三年と續いたものはない。多くは一年、一年半、ひどいのは、五六ケ月で去つてしまふ。

私には、どうしても、彼等の心持といふものが判らぬ。

仕事は、至つて閑な方だし、食物は、家族と一緒だし、給金は近隣よりも多くしてあるし、私の宅には、大きい聲を出して、叱責するものもない。何が不滿で……何が目的で、斯く更迭流轉するか、少しも判らない。

朝鮮通といふ人に、このことを話して、歎息すると、『それアあまいからだ。あまくて、長く朝鮮人を使へると思ふか。我輩のとこを見給へ。給金は安く、仕事は多く、そして、この我輩の口喧ましさだ。それで、微動だもしよらん北條氏や、德川氏が、どうして天下を制御したかを考へて見給へ。あんたは、あま黨で、どうもいかん』

それが眞理のやうにも思へる。獨斷論のやうにも疑はれる。但しどつちにせよ、幕府のやうな態度には、我々は、なり得ない。

今も女中がゐる。この先きも、女中を使ふことであらう。そして私は、結局彼等の氣禀を、心持を知らずに濟むことであらう。

不可解

最愛の女房を喪つても、涙一滴こぼさないのである。電車の中でグッと足を踏まれても、『何、何でもありませぬ』……『空腹でせう』と問へば、『今、飯を食つたばかり』、『どうも御苦勞さま、これはその代金です』、『イエお金などは、イエ々々、どう致しまして』、これが我々日本人であるそのいふことに、一つもホントのことはない。その全部が、悉くお體裁である。

そこで、歐米人は、『日本人は氣の知れぬ國民である』といふ。『腹の判らぬ種族である』といふ。『どうも陰險で、ズルイ』といふ

或る英國人などは、三十年横濱に住み、去るに臨んで斷案を下し『ジャップは、結局私には、不可解である』と喝破した。

我々と歐米人は、古來全く別箇の社會生活をし、その信念、その正義、その作法禮儀の、おきどころ、適用法が、全く違ふ。不可解といふのは、正しい告白で、おのれの寸法を以つて、我れを不正、虚僞といふのは、早計であらう。

だが、我々の前に於ける朝鮮の人々は、……右の例證で、單簡に片づくべきか。それとも性質が全く違ふか。それも私には判らぬ。

科學の悲哀

博覽會内の、地質調査所の出品の中に、太古代から現代に至る地殼進化の模型圖がある。

何といつても地球の年齡は古い。それは、無限といつても、專門家は、必ずしも笑ふまい。しかし、人類の發生——及びその歴史の、如何に短いことよ。それは僅にココ十餘萬年には過ぎぬのである。

我々は、魚類や、鳥類や、象や牛馬に比べても、遙に新參者に過ぎぬのである。

何故もつと早く、人類は發生、發達しないのか。——そして、この十萬年ほどの間に、どうして斯うも異數の發達を遂げたのか。それは、たゞ氣候の關係である。

人類は、たゞ人類の力で、繁殖發達したと思つたら、大間違である。現在の氣候が、我々に饒倖し現在の氣候が、我々に饒多の生活資料を與へてゐるのだ。自力といふ分子は、殆んど計算の中にない。

しかも、人間の生存範疇の、如何に狹搾なことよ。それは、攝氏五〇度から零下一五度の限界を出ない。それを鳥渡ハネても、我々は、死滅してしまふ。實に人類は間一髮に、その命數を托してゐるのである。

いつアノ氷河時代が、再現しやうも知れぬ。一瞬に萬靈悉く葬らるゝ時があらうも知れぬ。

斯う考へて來ると、凡そ科學くらゐ、我々に無常觀を敎へるものはない……。

昭和四年九月廿五日印刷
昭和四年十月一日發行
本誌定價
一ケ月（一部）四十五錢
半年分　二圓六十錢
一年分　五圓
京城府和泉町一七〇
發行兼編輯人　松本武正
印刷人　石川利夫
印刷所　京城日報社
京城府和泉町一七〇
發行所　京城雜筆社
電話光化門三〇六番

鮮内隨一の

生氣嶺石炭

發熱量高く、價格最廉

塊炭一屯（市内持込）十五圓八十錢

粒炭一屯（市内持込）八圓八十錢

小林商店石炭部

古市町驛貯炭場

電話本局四〇〇二番

新地各種

仕立鄭寧

既製品も
いろ〳〵とり
そろえ居候

京城府鐘路一丁目
濱洋服店
電話光化門二四四

京城日報

祝博覽會開會

（いろはの順）

洋服類
濱洋服店
鍾路一丁目

新高麗燒
富田商會
南大門通三丁目

洋服及附屬品
富田屋洋服店
南大門通二丁目

本場銘仙
ちゝぶや
本町二丁目

貴金屬、時計
大澤商會
本町一丁目

金剛飴
龜屋商店
本町二丁目

御料理
川長
旭町一丁目

時計直輸入
田中時計店
本町二丁目

御料理
南山莊
西四軒町

標準時計
村木時計店
本町二丁目

サクラ正宗
山邑支店
明治町二丁目

和洋雜貨
藤木商店
南大門通四丁目

洋服及附屬品
丁子屋洋服店
南大門通二丁目

人參、藥品
貴生堂藥品店
本町二丁目

洋酒、洋菓子
明治屋支店
本町一丁目

百貨店
三越
本町一丁目

呉服類
三中井呉服店
本町一丁目

茶及茶器
青々園茶舗
本町二丁目

冷い風が吹き初めました

……お寒さの御用意は三越へ願ひます

早くも秋は更けて日に増し寒さも加つて參りました折柄、三越では秋から冬へかけての流行品を始め實用品等を豐富に取揃へました。

冬の御用意は、どうぞ三越へ。

地方よりの御註文は御手紙にて通信販賣係へ御用命を賜れば早速御送附申上げます。　振替口座京城七七番

三越

京城

京城雜筆（第百二十八號）　大正十三年一月二十九日（第三種郵便物認可）
昭和四年十月一日發行（毎月一回一日發行）